憑いて行きます

北野 鉄露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
憑いて行きます

【Ｎコード】
Ｎ０９５３Ｆ

【作者名】
北野　鉄露

【あらすじ】
ド貧乏学生・靖幸が見つけた超破格物件。うっかりとびついてみたら、そこには可愛くて色っぽくて、でも生前不幸な女の子の幽霊・あかりが棲んでいて…。貧乏脱出・幽霊卒業を目指し、二人の悪戦苦闘が始まる。――一人称独りツッコミ系、伏字万歳、解読不能のテンション＋１ミクロンのシリアス＋少年誌程度のお色気＝この物語です。【１０／１９完結。投票&ご支援いただき、本当にありがとうございます！！】

その１　真夜中のボロ家にて

今考えてみれば、確かにこの物件は相当怪しかった。
平均家賃八万円という地域の中にぽつりと、一軒だけ月一万二千円という超破格の爆安特価で転がっていたからだ。その上、敷金礼金なし、暖房完備日当たり良好、ついでに駅から徒歩５分！　と、ここだけピックアップすれば日本中どこを探してもこれ以上にエクセレントな条件はないに違いない。
が、よーく冷静になってクールな頭脳でちょっと考えたならば、同時に日本中でこれ以上のミステリアスかつデンジャラスな物件もないというものである。
が、迂闊にも俺は目先の欲得に、してやられてしまった。
「……お？　　お……、おおぉぉぉー！！」
いかにも安物件しか扱ってなさそうなみすぼらしい不動産屋の片隅でそれを発見した瞬間、俺は今までの人生で一番「お」を連発していた。そりゃあ、連発したくもなるだろう。人間、自分が望むものに巡り会った瞬間こそ最も昂揚し、最も興奮し……そして、最も思慮を欠くものである。
「おばちゃん！　　こ、これ！　　この物件！」
「あー！？」
「これ！　　これがいい！」
「あー！？」
「だーかーらー！　これ！　これにしたいんだけど！」
「あー！？　トイレ！？」
言ってねぇよ、一言も。
どうやら耳が１００マイルくらい遠いらしい。○リフのコントでこういうの、あったような。
通常の会話を諦めた俺は物件の資料に指を指してやると、やっと通じた。

「この物件？　この物件ね？　この物件、この物件……ぶつぶつ」
今更ながら補足しておこう。
おばちゃんじゃあない。婆さんだ。どうサービスして見積もっても、楽勝で７０歳は突破している。
「あの、一つ訊いてもいいすか？」
「あー！？」
「……なんでこの物件、条件いいのにこんなに安いんですか？」
俺の質問に、婆さんは
「あの部屋はねぇ……ゆぅ……○×△□※？◎■……」
「あー！？　もっかいお願いします」
「だからね、あの部屋はね、……ゆぅ……○×△□※？◎■……」
ありかよ！？　それって、あり！？　ぼそぼそと聞き取れない声で呟いて流しちまいやがった。っていうか、聞こえてんじゃねぇかよ！　そこだけ！
婆さんは何事もなかったかのように
「あたしからねぇ、トメさんに言っておくから！　部屋は空いてるからね、引っ越すのはいつでもいいよ！　……ああ、出してもらう書類はこれとこれとこれ。早いうちにね」
書類はいいとして……ト、トメさん？　何だそりゃ？
どうも、昭和初期に発生した生き物の名称のように思われるのは俺だけか？
にしても「ゆぅ……○×△□※？◎■……」という婆さんの発言、全ての元凶はこの一言に集約されていたのを、俺は見抜けなかった。というよりも、婆さんの耳の遠さに根くたびれして適当にスルーしてしまった。
そう。今にして痛烈に思う！
あの日あの時あの場所で、婆さんを締め上げてでも確認しておけばよかったのだ！
ついでに、安いからといって、世界で二番目くらいにラッキーな条件だからといって、怪しげな物件なんぞに手を出すべきではなか

ったと。
そうすれば、逢わずに済んでいたに違いない。
彼女と、突然やってきた得体の知れない生活に。

婆さんとやり取りがあった一週間後、俺は例の物件に引っ越した。
だいたい想像はしていたが……想像通りのボロアパートだった。
いや、想像プラス。
周囲がそれなりの住宅ばかりだから、このボロさは感動するくらい目立って見える。
（あー……まぁ、爆安だし、文句は言えないか）
俺は自分で自分を無理矢理納得させつつ、中へと足を踏み入れた。
アパートは木造の二階建てで一歩歩くごとに床が軋み、壁などは突きでも入れれば簡単に抜けそうな代物。畳は古びて歪み、天井はシミがひどい。トイレが共同でなかったのだけは奇跡的だった。商品価値としては、間違いなく一万二千円相当。不動産屋の婆さん、グッジョブ！
変といえば、荷物を運び入れている最中、誰かに見られているような気配があるにはあった。
しかし、俺はこの歳まで幽霊、妖怪、宇宙人、怪獣珍獣以下省略するが、一目たりとも遭遇したことはなかったし、その存在にも否定的だった。そうそうこの人間社会の脅威となる生命体にうようよされてたまるものか、と、極めて人間本位に考えていたからだ。だから、その気配も完全に気のせいだと思っていた。
大体、古い建物にオバケが棲みつくって、何系の発想だよ。オバケ本出版社と怪しげな霊能者がつるんで一儲けしようっていう企みに、みんな何故気が付かん？
そして、あれやこれやで引っ越しも終わったその夜のこと。

俺は一人新居（？）に寝ていた。
眠りに落ちてからどれくらい経っただろう。
ふと、喉の渇きを覚えて目を覚ました。
すると。
「……？」
寝ぼけていたから、目を疑いこそしなかったが、一瞬自分が今いる時代と世界がわからなくなった。
うつろな頭で目を凝らすと、なんと女の子が一人、俺の目の前にいたからだ！
いや、目の前に浮かんでいた、という方が正確だろう。つまり、地についていなかった。
例えるならば時代劇に出てくる忍者のように、天井からぶら下がっていたのだ。……ああっ、上手く言えないが、天井に立っていた、とでも表現すればいいのか？　妖怪にもこういうヤツがいたかも知れない。
はっきりとは見えなかったが、ともかく若い女の子で、下着のような服を着ていた。
……これがどういう事態なのか、もう少し説明しよう。
幽霊（まだ決まっていないが、そういうことにしておこう）とはいえ、重力には逆らえないらしく、長い髪の毛がだらりと下向きに垂れている。かつ、これが問題点（？）なのだが――ワンピースみたいな服の裾が「これが普通です」的にめくれ下がり、脚はもちろんパンツまで完璧にオーライになっている！！
一つ言わせてもらえば、目の前にいる彼女はこの世のモノではない。どう見ても。
そういう存在に欲情するほど、俺は堕ちていない自信はある。
だから、呆気にとられることにした。というか、素で呆気にとられた。
そうする以外に！　この全く意味のわからない状況をやり過ごす方法がないんだっつーの！

言い忘れたが、怖いという至極当然の感情は、哀しいくらいに１ミリもなかった。
部屋の中に知らない女の子（の幽霊）がいたとして、パンツオーライで天井からぶら下がっていたとしたら、怖いとかいう以前の問題になりはしないか？
ややその対峙（？）が続き、しびれが切れてきた俺が何か言いかけようとした時。
「……」
彼女は無言のまま、まるで紙風船のようにふわりと、無重力状態的に宙で一回転して俺の前に降りてきた。
そして正面にぴたりと正座するや、まじまじと俺の顔を観察し始めた。
それまで暗くてよくわからなかったが、近くでみると年の頃は俺よか一つ二つ下くらい、小顔で目がぱっちり、口元が小さく締まっていて、要するにそこそこ可愛い顔立ちだった。髪もふわりしたロングヘア、これはどう見ても萌〇顔、〇リ顔……いやいや、俺にはそんな趣味はない。ただ、俺のこれまでの人生の中で半径３０センチ以内に接近したことのない人種であることは確かだ。……満員電車を除き。
「ふーん……」
「……」
しばらくの沈黙と観察ののち、彼女はこう切り出した。
「あんた、みたでしょ？」
「何をだ？」
「あたしのパンツ」
誓って言う。
見たんじゃない。見えたんだ。
大体、そんな恰好で逆立ち、じゃなかった宙づり？　正しくは逆さ吊り……いやいや、この表現は極めて不適切だ。ともかく、見てくれと言わんばかりに上下逆になっている方がおかしくないか！？

この時点で、気味が悪いほど俺は落ち着いていた。
相手が生身の人間だったら、その点は保証できないが……。
「あのな」
「何よ？」
「そういうカッコで逆立ちして俺の目が覚めるのを待ちかまえていたあんたに８０パーセントの責任ってモノがあるでしょーが」
「残りの２０パーセントは？」
「不可抗力だ」
途端に彼女はムッとした顔をした。
お、お？　幽霊が怒ったのか？　怒った顔も、ちょっと可愛くはあるが。
「あんたねぇ。若い女の子のパンツ見といて、その感動と感激の不足はないんじゃない？　ちっとはありがたそうな態度くらい、とったらどうなの！？　拝むとか畏れ入るとか畏まるとか土下座するとかさぁ」
何をエラそーに。
拝んでもらえるようなパンツかよ。それに、畏れ入ると畏まるは意味的にほとんど一緒だ。
そもそも、女の子のパンツを崇拝するような宗教、あるいは一団がこの世の中に存在するのであれば、逆に教えて欲しい。
相手が喋ってくれたことで、俺は応戦する余力を得た。
「大体お前、登場の仕方ってものがあるだろう！？　なぁにが悲しくて逆さ吊りなんかやっとるんだ、お前は！」
「だって……怖がるかと思って」
強気に出ると、いきなりしゅんとしやがった。
世間で今流行りの「〇ンデレ」というやつか！？
いや、多分違う。
なぜなら数秒ののち、彼女はころりと忘れたように俺の膝をばしばしと叩きながら
「ねぇねぇねぇ、あんた、何でここに引っ越そうと思ったの？　よ

りによって、こんなボロ家に」
……悪かったな。どうせ俺は貧乏まっしぐらですから。貧乏万歳ですよ！
っていうか、パンツはもういいのか、パンツの話題は！？　お前はお前にとって世界で一番大切なものを一般公開しちまったんだぞ！　門外不出の国宝級じゃなかったのか！？　幽霊の立場だけど……。
「だって、安かったんだ。家賃が。大爆裂価格で」
パンツはさておき、正直なところを教えてやると、女の子はじーっと俺の顔を見て
「……不動産屋のババ、じゃなかった婆さん、何か言わなかったの？」
ああ……やっぱり。やっぱり、そうだったのか。
もう、遅いんですけどね。
首をゆるゆると横に振った俺を、彼女は哀れむような視線で
「この部屋、かなり有名だよぉ？　オバケが出るってんで、だーれも寄りつかないの。静かだわーって思っていたら一年ぶりくらいに、あんたがきたんだけどさ。……にしても、あの婆さん、教えてくれなかったんだぁ。へぇー……酷いね、それ」ほとんど他人事のように彼女は言った。
おい。
お前が言うのか！？
その全ての悪の根源はお前だろうが。お前がその「オバケ」だろうが！
それにあのババ――とまで思いかけて、俺はぐっと腹に飲み下した。教えてくれなかったんじゃない、あの不動産屋の婆さんは、教えてくれたに違いなかった。俺が最後まで聞き取れなかった「ゆぅ……○×△□※？◎■……」という言葉、思い返せば「幽霊が出るんだよ」とか、そう意味のことを言ったのだろう。……ちゅーか、何故かそこだけ早口だったけどな。

俺はふと、気になった。
「で、あんた、俺をここから追い出したいワケ？　で、怖がらせようと？」
尋ねると、女の子はちょっと悪戯っぽい笑みを浮かべ
「怖がらせてやろうとは思ったかな。でも、追い出そうとは思わなかった」
ほお。で？
「だってさぁ、この部屋を借りるようなヤツって、９９．９９パーセントまでヘンなヤツばっかりだったんだもん。夜中に○○して○○する○○○とか、この部屋一杯になってもまだ足りないくらい○○○な○○○とか○○○とか持ってきた○○○。好きなのはいいけどさ、そいつったら、――云々」
あー、色んな意味で聞くに堪えない。申し訳ないが省略しよう。続きをどうぞ。
「――そういうのばっかりだったから、あんたを見た時」
女の子の声のトーンが僅かに和らいだ。
「……すっげーフツーじゃん！　と、思ったのよ」
褒められたのか？
褒められたのか、俺？
フツーで褒められるってんだから（褒められたことにしておこう）、よっぽど凄惨な人種を見てきたってのか、こいつは。
「で、そいつらは追い出した、と」
「そうそう。例えば（以下省略）とか（以下省略）とか、やってやったのね。そうしたら、速攻で出て行っちゃった。あはは」
……これも聞くに堪えない。笑うところか、そこ？
とはいえ、彼女の申告を聞く限り、過去にこのアパートの住人となった者達がフツーでなかったことはわかった。
そこは取りあえず、同情しておいてやろう、うん。
「でさぁ、お前はいつからここで幽霊やってんの？」
「うーん、死んだのが１７歳のときだからぁ、もうすぐ2年経つの

かな？　ってことは、あたし１９歳になるのか。……いやだぁ！　めっちゃ歳くってんじゃん！　青春は終わったのね？」
ちょっと待て。
幽霊が歳なんかとるかよ！　……とらない、よな。多分。
こいつが真性のアホだとしたら、とことん哀れだ。そこはフォローしておいてやるべきだろう、人として。
「いや、お前さぁ、死んだのが１７歳なんだったら、多分今も１７歳なんじゃねぇ？　死んでから歳とったとしたら、そいつはノーベル物理学賞級だぜ。……よくわからんが」
言ってやると、彼女は途端に明るい表情になった。
「ああっ！　そっかぁ！　そーだよね！　考えてみたら、あたし死んでるんだものね。歳なんかとったら大変だぁ。あははは――」
前言撤回！　こいつは真性のアホだ！
ってか、てめーが死んでることすら忘れてやがったのか、この頭がおめでたいパンツ幽霊アホ娘は。
「あんた、アホじゃないね。っていうか、割とアタマいいみたいな？」
俺はマジでちょっとだけムカついた。アホにそーいう返し方されると、な。
が、アホ娘相手にマジになったところで、何のメリットもない。おまけにこいつは幽霊だ。自分が死んだことすら忘れてるような。……だから二年も幽霊やってられるんだな、きっと。
話題を変えることにしよう。
「……何で、死んだのさ？　お前みたいに身体共にピチピチしていて人生まさしくスタートライン！　っていうヤツが」
「おおっと？　ここで人生相談ですかぁ？　○泉君」
それはもう、やってないから。
「嫌んなったのよ、何もかも」
急に彼女の声のトーンがガタ落ちした。
「……オヤジは飲んだくれで女癖悪くてどっかいっちゃったまま帰

ってこないし、ババァ、って母親のことだけどさぁ、オヤジがいないのをいいことにとっかえひっかえ違う男連れ込んでくるわで、もうメチャクチャ。あたしはとりあえずガッコ行ってたけど、卒業したらぜぇったいにこんな腐れた家なんか出てやろうと思って。それだけが希望だったかなぁ」

「……」

「だけどさ、ある日にババァが出かけている隙に、そん時の男があたしの部屋にいきなり入ってきたのよ。そうしてあたしを無理矢理……。忘れもしないわ」

……えーと。この雰囲気でどういう気持ちになるべきか、それは俺でもわかる。

スカイダイビング級に急転直下な彼女の話に、俺は思わず固唾を飲んで聞き入っていた。

しんとしたボロ部屋の中で、幽霊の彼女は続けた。

「男が出て行った部屋であたし、ぐったりしたまま考えてたの。実はその日、付き合っていてすっごい好きだった彼が、あたしの親友のコと陰でできてるのを知ってしまって。……だけじゃない。ガッコーだけは行かせてもらってると思ってたのに、授業料も支払われてなかったらしくて、退学勧告くらっちゃうし。ババァはババァで借金重ねていたみたいで、こっそりとあたしをどっかのいやらしい店で働かせようとか考えていたらしいのよ。そういう募集のチラシが、いつの間にか山ほど家にあったし。それ以上生きていく意味がわからなくなったわ、マジで」

ひ、悲劇のオンパレードかよ。……そ、それで？

「睡眠薬を丸々一ビン、飲んでやったの」

す、睡眠薬自殺か。ドラマみたいだな。壮絶なものがあるぞ。だが、気持ちはわかる！　俺でもきっと、そうするだろう。

「で、死んじゃったのか？」

「うん。飲み過ぎて、錠剤、喉に詰まらせちゃって」

おいっ！！

そっちかよ！！

「ま、それで良かったのかもね。死に際にビンのラベルが見えたんだけど、睡眠薬だと思ってたその薬、よく見たら〇オフェ〇ミンだったから。飲んだところで死ねたかどうか」

こっちがビビるくらいあっけらかんと、彼女は言った。

きちんと確認しろよ……。

死にきれなかったらそれこそ、その後二日間はトイレと抱き合い心中じゃないか。

……って、冷静にツッこんでいる場合じゃない。

それよりも、ま、ま、待ってくれ！

今までの超凄惨な話は何だったんだ！！　俺は１８６パーセント、ついこの瞬間まで彼女に同情していたんだぞ！　そういうオチ（じゃないけどさぁ）って、ありかよ！　ええ！？

右だと思っていたら上下前後左右３６０度から百発くらい飛んできた様なカウンターにやられた俺は、リアクションをとるのも忘れて今度こそ呆然としてしまった。

すると、彼女はずいっと接近してきて俺の両肩をつかみ

「ね！　ね！　可哀相でしょう！？　こんなあたしって、とっても可哀相でしょう！？　涙を誘うよね！？　間違いなく！　あんたもそう思うよね！？」

がくがくがくがくと激しく揺さぶり始めた。

同情と誘い涙の強制、いや恐喝か？

あーあー。確かに可哀相ではある！　同情の余地しかない！　だが！

想像してみて欲しい。

真夜中のボロ部屋で男が一人、自称「この世のモノでない」若い女に肩をつかまれ、ひたすらにがくがくとやられている光景を。

泣けるか？　フツー。

「……あ、あ、あのさ」

「何よ！？　ちゃんと泣けてきた？」

「ち、違う。あんまり、前のめりに……なるな」
「？」
これもまた、誓って言う。不可抗力である。
ええと、その、なんだ、こういう服装を何というのか、女の子と縁のない俺には単語がわからない。つまり、肩と胸元と背中が露出していて妙に色気のある、要るか要らないかよくわからない肩ヒモのついた服のことだ。メンソール？　……違う、それはタバコか。
そんな格好で正面から前のめりな体勢をとられてみたらどうなる？
結果は歴然だ。
胸元・谷間百パーセントじゃないか！　天然素材で！　キリマンジャロ級！　中途半端なグラビアアイドルおとといきやがれ！
相手が幽霊（らしいが）とはいえ、青少年にとって決して健全な状況ではない！
不覚にも俺は何事かに動揺したらしい。しどろもどろに
「お、お前、胸、胸……。少しは行動に気をつけ――」
彼女はゆっくりと自分の胸元に視線を落としたかと思うと、くわっと詰め寄り
「あーっ！！　あんた、どこまでスケベなのよ！？　どさくさに紛れて！　ババァが連れ込んできた男全員と一緒だわ！！　フツーだなんて言ってソンした！」
だから、言っとろうが！　不可抗力だと！
「いやぁっ！　変態！　ドスケベ！　痴漢！　絶対ありえない！」
と、彼女は連呼した。
だけではなく――その間俺はマグニチュード７．０くらいの勢いで揺さぶられ続けていた。
だが。
そこで俺はハッと悟った。
彼女の今の姿が、死んだその時のものだったとしたら、どうだろう？
見知らぬ男に乱暴され、その直後に自殺を図った。だから――そ

うに違いない。彼女だって、本当は死にたくなんかなくって、着たい服を着て、自由に街を歩きたかっただろう。学校に通い続けて、もっと勉強だってしたかった筈だ。

それなのに――。

そういう彼女の哀しみに気が付いた瞬間、俺は思わず

「すまん！　悪かった！　俺が軽率だった！」

叫んでいた。心の底から。隣近所の部屋に誰も住んでいなかったのは幸いだったかもしれない。

途端に、マグニチュードはピタリと収まった。

「俺もまた、通常の男子だ。幽霊だろうとなんだろうと、若い女の子は気になってしまう。……が、今このタイミングでそういう発言をしたのは明らかに不謹慎だ。謝る！」

頭を下げた。

すると――痛いくらいに（どういう訳か、痛かった）俺の両肩をつかんでいた彼女は手を離し、自分の膝の上に置いた。俯いて、神妙にしている。

今までアホだのパンツだのと言ってはみたが、急に俺の胸中、彼女に対する憐憫の情がむくむくと止め処もなく湧いてくるのを、抑えることができなかった。だって、そうだろう？　このコには何の罪もない。悪いのは、その周りにいた大人達で――と言いつつ、俺も自分自身に得体の知れない罪悪感を感じた。そりゃあ、生前の彼女とはどういう縁もなかったけれども。

本当に救えなかったのかなぁ……彼女のこと。よくわからないが、胸の奥がどうしようもできないくらいに切ない。

「……あんた、いい人かもしんない」

不意に、彼女が顔を上げた。

それまでのだるそうな表情が、ちょっとだけマジに、ちょっとだけ嬉しそうだった。

そんな彼女に、俺は０．５ミリくらい、救われたような気がした。

「本当はさ」女の子は言った。「男なんか、大キライだったから。

絶対に困らせてやろうと思って、次々と怖がらせて追い出したのよ。ほら、こういうボロ家って、絶対に女の子なんか住まないでしょ？」
うーん。絶対かどうかはわからんが。
ともかく、謎は一つ解けた。
そういう理由でこのボロ家に棲み付いたのか、このコは。
「でも、あんたは違うのよね。何か、よくわかんないけど……あたしと同じ空気？　オーラ？　ああっ、上手く言えないんだけど。ま、何か違うってことで」
そう言って彼女は可笑しそうにしたが、俺は笑えなかった。
成る程ね。
そうきたか。
その直感、かなりの割合っていうか、ラッキーゾーンに飛び込むジャストミートだな。いや、今はもうなくなったけどな。ラッキーゾーン。
「ま、胸でもパンツでも、見たきゃ勝手にみなよ。どーせ、あたし、幽霊だし。あんたみたいな、かったーい照れ屋さんに見せるのも、それはそれで面白いよーな気がする」
……はぁ。温かいお言葉、ありがとうございます。胸にじーんと染み入るぜ。
いやいや、そういうことよりも、今の発言って――
「……お前、引き続き、この部屋に出続けるつもり？」
おそるおそる尋ねると
「そりゃーそーでしょー！　だってあたし、行くトコないもん！」
当然のように言い切りやがった！
うああぁぁ……。成仏できんのか！　ハナシ、聞いてやったくらいじゃ……無理なの？
「それ、それって……じ、じばく、なんとか？」
「いんやー。よくわかんないけど、磁石みたいなカンジ？　くっつけるところにくっつく、みたいな。――ああ、そうだ」
何かを思いついたように、女の子はニヤリと笑った。

何だ？　何だよ？　祟るんじゃないだろうな？
無意識のうちに、俺はそれまでの俺の主義をすっかり放棄していた。当然かもしれない。これだけ長時間、この至近距離で幽霊と心のやりとりまでしちまったんだから。
彼女は悪戯っぽく笑った顔をぐっと俺に近づけ
「……あんたに憑いちゃえばいいんだ！　そうすれば、外にも出られるし」
「おい！　幽霊ってのは、夜しか出られないんじゃないのか！？
それに、その自分勝手な発想は何だ？　俺に憑いたところで、一銭の得にもならんし、成仏できんぞ！　ああ！？」
我ながら、情けない発言をしたものだ。
江戸時代くらいの定説だろう、そういうのは。
案の定、彼女は
「だーれがそんなコト言ったのよ？　うそうそ。嘘に決まってるってば。あんたに憑けば、面白そーだし」ケラケラと愉快そうに笑っていやがる。
だよな……。
俺はこれから四六時中、この女の子の幽霊につきまとわれるってのか？　まぁ、ちょっと色っぽいしって……そういう問題じゃないんだ！　俺の、俺のプライベートは！？
引越し初日の真夜中から憂鬱になってしまった俺の心情などはお構いなしに、彼女は楽しそうに宙をくるりと一回転して見せた。
「あたし、あかりっていうの。あんたは？」
「……靖幸だ、やすゆき」
「へぇー。じゃあ、やっちーだ！　そう呼ぶね。あはは」
勝手にしてくれ。
俺は心の中でふてくされてみた。
とはいえ……生前に散々辛い目に遭ったこのコを突き放すようなこともできないというのが、俺の正直なホンネでもあった。

その2　それでも地球は動きやがった

「――やっちー、朝だぞー。起きろー！　ゴハンくえー！」
……？　なんだ、もう朝か。
それに、どこかで聞いたことのあるようなフレーズだな。
っていうか、誰だよ、人の部屋に無断で上がりこんできて騒いでいるのは。
ああ。あかりの奴か。
いいや。面倒くさいから放っておこう。
眠たいし。
引っ越し疲れで体中が痛く、そしてとにかく眠かったので、俺はぐいっと頭まで布団をかぶった。
するとあかりは
「やっちーったらぁ、二度寝するなよぉ。腐ったのーみそがもっと腐っちゃうぞー！　ねぇったら！」
うっさいなー。余計なお世話だ。お前の脳みそはおめでたいくせに。
朝なんだから、幽霊はじっとしてろ。
「起きてよー！　ねぇ、起きてってばー、起きろー！」
がくがくがくがくと揺さぶり始めやがった。
相も変わらずマグニチュード級の震度だぜ。意外と馬鹿力だ。
なんだって、幽霊のくせに朝からこんなにハイテンションなんだろう。二年間も幽霊やって、すっかりベテランになっちまったからか？
あんまりにもうるさいので、半ばたたき起こされるようにして、俺は二度寝を断念した。
「あー、やっと起きたー！　おっはよー、やっちー！」
「……なんだよあかり、こんな朝っぱらか――ら！？」
かぶっていた布団から顔を出した途端、依然９２パーセント寝ぼ

けていた俺は、一瞬でログインした。
目の前に、国宝が！！
いやちがった、パンツが！！　どころじゃない、黄金の秘境が展開されている！　こんな朝っぱらから！！　俺は思わず目を疑った。
よりによってあかりの奴、転がっている俺に馬乗りしてやがったのだ。
あのな。
ちったぁ考えろよ。てめーの無鉄砲な行動がもたらす結末ってヤツをよ。
「お、お前な」
「何？」
気付いちゃいねぇ。あっけらかんとしてやがる。
「女の子なんだから、少しは行動を慎め。パ――」とまで言いかけて、俺はぐっと呑み込んだ。
確かに、彼女のパンツは大盤振る舞い式に一般公開しすぎであるといっていい！　間違いない！　そんなことじゃ、この先稀少価値がぐっと下がってしまうぞ。「〇運　なんでも〇定団」に――ああっと、これは違った。
とにかく、きちんと秘蔵しようと思わないのか、おい！　しまっておけよ！　国家機密級に秘匿しておけ！
とはいえ、だ。
いちいちそれを気にしている俺というのも、よく考えればフツーにスケベだ。
７５パーセントは不可抗力だと言いたいところではあるが――。
あかりは「見たけりゃ見なよ」とは言った。しかし、だからといって「じゃーご遠慮なく！」というのは、短絡的すぎる。男として恥ずべきではないのか！　例え「見たい！」と心の中で悶えるくらい強烈に思っても、「……フッ」と何事もなかったかのように我慢するのが男の礼儀というものだ。Ｂ級な都市伝説くらい何の根拠もないけどな。

「……」
俺は黙って起き上がった。
「ねぇねぇ、今、何か言いかけなかった？」
「……いや。気のせいだ」ここは例え顔が変形しようともひ〇ぶになろうとも、無表情を装うしかない！
すると、あかりはニヤッと笑って
「どーせやっちーってば、また『パンツが見えてるぞ』とか何とか、言おうとしたんでしょ？」
う゛！　見かけによらずするどい奴だ。女の何とか、ってヤツか？
思考をよまれた俺は不覚にも、一瞬動揺しちまった。
そのタイミングを巧みに捉えたらしく、ぐいーっと顔を近づけてきて俺を覗き込むあかり。ちょっと得意げな表情（それが可愛らしくもあるのだが）をして
「まー見えちゃったモンは仕方がないわ。っつーか、男のむっさーい一人暮らしじゃぜぇったいに体験できない、胸キュン涙うるうるの贅沢な目覚ましでしょー。感謝しなさい、か・ん・しゃ！」腰に両手を当ててエラそーにふんぞり返ってやがる。
はいはい。
全国のむっさい一人暮らしの男を代表して篤く御礼申し上げます。
ありがとうございました。誠に、ありがとうございました。王様神様仏様あかり様！　ま、こいつは既に仏さんだけど。
……って、誰も見せてくれなんて、これっぽっちも頼んでねーし！！
たかがパンツ見せただけじゃねぇかよ。
そもそも、勝手にばさっと広げて見せてんのはあかり！　お前だろ！　とかいってるこの現在も、一向に気にするでもなく「〇〇ーダム、行きます！」状態だし。〇ャスティスはどうした、ジャ〇ティスは。
いやいや、それよりも！
いいからさっさとしまえ！　金庫にでも入れて厳重に鍵でもかけ

ておけ！　その胸とパンツをよ！
　言い忘れていたが、例によって胸元も大迫力パノラマワイドビジョンで俺の前に広がっていたという事実をお知らせしよう。ダブルマッキンレーは今日も健在だ。富士山も真っ青だぜ……って、富士山はもともと青いのか？
　説明が不足していたかも知れないから補足しておく！　気にしてはいけないと思いつつ、俺は昨晩、気が付いてしまった。あかりの胸が大盛りであるという事実に！　……四捨五入すれば特盛りかもな。
　馬鹿馬鹿しいんでリアクションを出し惜しみしていると、あかりはぶすっとして
「なぁに？　ぜんっぜん、ありがたそうじゃないじゃん。なーんか、面白くなーい！　あたしのどこが不満だってのよ？　こんなに可愛くて色っぽい女の子だっつーのに。あんた、状況わかってる？　釘の甘いパチンコ台がわざわざ、自分から玉出してあげてるのよ！？」
　おい。幽霊の分際で文句たれてんじゃねぇよ。生きているうちに言え、そういうことは。
　それに、そのパチンコ台の例え。全然意味がわからねぇ。
　ってか、いつまでヒトの上にまたがってやがる。
　さっさと降りろ――っていっても、重くも何ともないんだよな。
　そりゃそうだ。こいつは幽霊だし。もし重さがあったとしたら、世界中の幽霊学者と物理学者が二人三脚で大騒ぎするだろう。超一流スクープで連日連夜テレビは特番の嵐だ。そのくせ、生身のように感触があるってのは、どういうことだ？
「はいはいはい。あかり様は十分に可愛くて色っぽいですね！　……これでいいのか？」
　起き抜けから面倒くせー注文をつけてくる女ではあるが、崇られたら嫌なので適当に反応してやると
「そーよ！　以後、あたしに目線をやる時は、とってもありがたがるよーに」

……ありがたいのは、お前のアタマだろうが。
「いつからいたんだ？」
「うーん、ずっと」
そうだった。こいつ、俺に取り憑いてるのをすっかり忘れてた。
いつ起きたんだ、と訊きかけて、ふと思った。
幽霊だもの、寝る訳ねぇよな、多分。
で、何してたんだ、と訊こうとすると、あかりは珍獣でも見つけたような顔になって
「この部屋、全然ないのね」
「何がだ？」
「えっちぃ本とかビデオとか。男の一人暮らしには、ぜぇったい、ある筈でしょ？」
ヒマだからって、勝手に家宅捜索しやがったのか、俺が寝ている間に。しかも、一体全体何を捜索の目的にしてるんだよ？
残念ながら、俺の持ち物には生きていく上で最小限必要なものしかない！　人生そのものがサバイバルかキャンプみたいなものだからだ。……我ながら、上手いことを言ったぞ、俺！
「ねぇよ、んなもの」
「何で？　マジ？　キョーミないの？　女に。……あー！　やっちー、もしかして――」
あかりが何を言おうとしているか、咄嗟に悟った俺。
ちょっと待て！　犬○首相も言ったじゃないか！　話せばわかる！
そういう誤解だけは死んでもされたくない！
例えこのまま貧乏のどん底で朽ち果てなくてはならなかったとしても、だ。
「ちがーう！！　断じて違う！！　一人で勝手に誤解してんじゃ……って、何だそのカオは！？　お前、すげぇ勢いで疑ってるだろう！？」
「うん。めっちゃ」
俺を見る目がじとーっとしてやがる。

無礼なヤツめ。男がみんな、エロ本エロビデオ大好きだとでも思ってるのか？
それよりも、この俺のどこをどう分析すれば、そういう結論に達するんだ。頼むから教えてくれ！　論理的に、倫理的に！
「もし、俺がマジで〇〇っ気百パーセントだったらだ、いちいちお前の胸だのパンツなんぞ気になると思うか！？　健康で健全な男子であればこそだ、その、何だ――」
疑いを晴らそうとそこでついアツくなってしまったのは、致命的にマズかった。
そこまで言いかけた時、あかりは「ほれ見たことか」といった顔つきをして
「……やっぱり、見る気満々じゃん。あたしの胸とパンツ」
……し、しまった。
してやられた。謀略だ。死せるあかり、俺を走らす――みたいな？　上手いこと言うじゃないか、昔の中国のみなさん！　って、感心してどうする。
「ふ、不可抗力なんだって！　それに今の！　例えばの話だ！」
「あー！　またそれ！　何よ、見たいなら素直に『見たい！』って言ったらどお！？　あたし、少しだって出し惜しみしたかぁ！？」
いや、出し惜しみしなさいよ。大いに。
「大体、やっちーってば失礼なのよね。これだけさんざんチラ見しといて「事故だ」みたいな言い方？　ありえなーい！」
チラ見どころの騒ぎか。
俺の視界に入らんばかりに「ほーら」ってスペシャルバージョンで展開してたのはどこのどいつだよ！　結果としては強制ガン見だ、強制ガン見。
「とっ、とりあえず、話を元に戻させろ。俺が〇〇でないってのは今のでわかっただろう？　ああ！？」
あかりは腕組みをしつつちょっと不満そうではあったが
「まーいいわ。やっちーが〇〇でないってのは、なんとなーく、わ

かった。なんとなーく、わかったことにしておいてあげようじゃないかね、ワトスン君」
誰がワトスンだ。
昨日からそのパターンが好きだな、あかりは。生前ミステリーマ○アか？
……ってか、おい！　その恰好で腕組みはよせ。マッキンリーの標高がさらに高くなるだろうが。
「……ま、わかってくれれば、何も言うことはない！」
「でもさ、でもさ」
前のめりに接近してきやがった。
よ、よーし！　俺は断じて下方に目線をやらんからな！
「どうして、えっちぃ本とかビデオ、持ってないの？　あかり、すっごい不思議」
男子は年頃になるとそういうものを所持するのが石器時代からの習性だとでも、義務教育で習ったか！？　思い込みがひどい奴だな。
が、俺には合理的な理由がある。アメリカ大統領も納得するくらいにな。
「よし。じゃあ、教えてやろう。この部屋に、そういう物品が存在しない理由を」
「うん」
「それはだ」
「うん」
「……んなものに投資している経済的余裕などは、１ペソもないからだ」
と、大威張りで言った俺。
ある意味偉大だと我ながら思うが、一方でエラく情けなくなった。真実だったから。
そんな俺を、あかりはじーっと見ている。
「……マジで？」
「こんなボロアパートを選んだこと一つ考えたって、わかるだろ！

？」
あかりは見る見る憐憫の情を浮かべたかと思うと
「あんた、ハリケーンと津波と地震をいっぺんにくらった被災地くらいにカワイソーなのね！　どーじょーの念を禁じ得ないわ。どんなにビンボーな男だって、えっちな本の十冊や二十冊は買っちゃうじゃない、フツー。――ちゅーかさ」
たちまち不審そうな顔に戻り
「……なんであんた、そんなにビンボーなのよ？　昨日から、不思議に思ってたんだけど」
「あー、まー、それは……」
どう説明したものだろう。
それについては、至って突っ込みどころのない話をしなくてはならない。
俄に真面目に戻っていた俺に、あかりは気がついたらしい。
「……別に、無理して言わなくても、いいよ。言いたくないことだって、あるよね」
遠慮し始めた。ふざけたテンションが落ちている。
確かに、あんまり話したくないといえば話したいとは思わない。今までだって、ほんの数人の親友を除いて、俺は俺の履歴を語ったためしなどない。
でも、こいつには、知る権利があるのかも知れない。いや、ある。なぜならあかりは俺に、自分にとって思い出したくもない過去を喋ってくれた。
お返しというのも変だが、俺もまた、彼女に応えてやる責任がある。
俺はぐっと顔を上げた。
「いいよ。教えてやる。きのう、お前は俺に自分のコトを話してくれたからな」

と、言っても、話はそんなに長くはない。
俺がまだ小さい頃、親父が商売に失敗してでかい借金を負っちまった。そうしたら、おふくろのヤツ、出かけたまま帰らなかったのさ。愛想つかしたんだろうな、親父もあんまりおふくろのことを大事にしてなかったっていうし。どっちかってばおふくろ、あんまり俺ができたことも喜んでなかったらしいからな。可愛がられた記憶はない。
男って結構脆いから、完全逆境モードになって親父はすっかり絶望したらしい。
ある日、学校から戻ったら、親父のヤツ、ぶら下がってたよ。天井から。
二親ともいなくなった俺は、親類のところをあちこち預けられた。
でも、どこでも邪魔者扱いさ。親父の遺した借金が、自分トコに降りかかるんじゃねぇかって、みんなびくびくしてたワケだ。まあ、恨むつもりはないよ、今となっては。仕様のないことさ。
ただ、最後に親父方のえらい遠い親族にあたるっていう婆ちゃんが、俺を哀れんで引き取ってくれた。その婆ちゃんも、早いうちにダンナに捨てられちまってずっと独りでいたっていうのは、かなり後になってから聞いた。
俺は今でも、婆ちゃんには感謝してるよ。面倒みてくれて、全然そんな余裕もないっていうのに、中学校のあと高校、ついでに大学まで行かせてくれて。大学に合格した時、思ったね。
必ず、今度は俺が婆ちゃんを楽させてやるんだって。もちろん、勉強もしないとならないけど、授業のあとバイトもすぐに始めた。ようやく、自分の思い通りにできる時が来たんだって思ったら、キツくはあったけどちょっと嬉しかった。
ところがだよ。
婆ちゃん、急死しちまった。半年前の冬にな。持病が悪化したみたいだ。
運命って言ってしまえばそれまでだけど、これはねぇよな。前の

日まで、フツーに元気にしてたのに。バイトから戻ったら婆ちゃん、倒れてこと切れてた。
だけど、それでわかったんだ。俺を学校に行かせるために、実は陰で結構苦労していたんだって。整理していてわかったよ。貯金なんか、何にもなかったから。
これには参った。さすがにヘコんだな。でも、折角婆ちゃんが必死に行かせてくれた学校だから、なんとしても出るだけ出ようって、思った。授業料払えるような状態じゃなかったけど、バイト必死に探して数増やして、授業にも出て、自分でいうのもなんだけど、真面目にやってきた。この半年間。今年度分の授業料の支払いが遅れていたから、学生課に何とか待ってもらって、もう少しで払えるかなっていう段階まできた。
……でも、お手上げさ。
一番時給がよくて、親切だったトコの雇い主のおっさん、夜逃げしちまいやがった。他のバイト先の給料かき集めたって、授業料は払えやしない。それくらい、超ダメージ。これには、やられたよ。とうとうこの間、退学勧告くらっちまったしな。
とどめに、少しして他のバイトも立て続けに切られた。どこも理由は同じ。雇っている余裕がなくなったから、だそうだ。続く時には続くモンだな。
これでわかっただろ？
しょうがないから、とにかく家賃が安いところを探したんだ。
それで、立て直せるものなら立て直そうと思った。
思ったけど、な。
ふっと我に返った途端、すっかり気力がなくなってる自分に気がついた。
親父と一緒だよ。
これしきの逆境でやらちまってんだな。情けないけど、どうにもならねぇ。こればっかりは。

長くないとか言って、延々と喋っちまってた。
話を終わってあかりを見たら――目に涙を溜めてやがる。
「……そっかぁ。やっちー、大変だったのね。ごめんね、スケベとか変態とか言ったりして」
そ、それは別にかまやしないが。構わないのだが！
「あのな、あかり」
「うん？」
「涙は嬉しいんだが、その……鼻水……」
垂れてるよ。両方から。
女の子が威風堂々と鼻水垂らしてちゃ、アカデミー賞並みの胸とパンツの持ち主でも、ちょっと悲惨じゃないか？
ビンボーでも街角でもらったティッシュくらいあるけどさ――幽霊じゃ、鼻もかめないだろうし。
すると「ずーっ」とか音がして、あかりが鼻を啜り始めた。
仕方がないか……。鼻、かめないから。見ないフリをしてやろう。気の毒だ。
でも、これは発見かもしれないな。幽霊でも、鼻水が出るんだ。
「……ねぇ、やっちー」鼻声のあかり。
「ん？」
「とりあえず、朝ごはん食べてさ、街に出てみようよ。あたしも一緒に探すよ、バイト先」
その一言、瞬殺だった。
聞いた途端に俺、ちょっと目頭が熱くなった。
幽霊に同情されたからじゃない。
マジな気持ちであかりがそう言ってくれて、久しぶりに津波のようなすごい感動に襲われたから。あかりって、少しそういう部分が見え隠れしてたけど、あっけらかんとした裏側じゃ本当に真面目で情に厚いコなんだって、素で思った。
どんなに辛いことが続いて負けそうになっても死にそうになって

も「あ、わかる」って素でリアクションをとってくれる人に会ったら、人間はどう我慢しても嬉しくなっちゃうし、もう一歩だけ、踏ん張ろうって思えるものらしい。
ほとんど涙なんか忘れかけていた俺も、これにはやられた。
そっぽ向いて溢れかけた涙を拭うのが精一杯だよ。
俺がグッときたのを見て、あかりは泣き笑いみたいに微笑んだ。
「やっちーってば、カタいみたいで意外とほろり屋さんだね」
その天使のような彼女の笑顔を、俺は一生忘れないだろう。
そして――。
その後揃って街へ出てみて、俺はあかりに対してとある決心をすることになる。
「とりあえず、ごはん、食べなよ。あたしは幽霊だから、食べなくても平気だけど」
それはそうだろう。
しかし、だ。一つ問題がある！
「メシ、食えないんだ」
「へ！？　どーして？」
「何にもないんだ。金、なくてさ。昨日の夕方、引越し手伝ってくれた友達にお好み焼き奢って、終了。この部屋には、食料にカテゴリされる物質は全くないんだ」
びっくりした顔をして固まっているあかり。
……無理もないか。他にそんなヤツは、街中駆けずり回っても発見できないに違いない。
「ないこともないよ？」
「あ？　どーいう意味だよ？」
驚いた俺が尋ねると、あかりはぴっと自分の背後を指して
「このボロアパートの裏側よ。雑草がボーボーなんだけど、それに混じって野いちごが生えているの。……ちっちゃいけどね」
結論。
食ったさ。

食いました！
雑草だらけの裏庭を、クモの巣にひっかかりながらも必死に探した野いちごを！　十秒チャージで5分くらいしか保たないような量しか採れはしなかったのだが。
「……あかり」
「はいはい」
「……済まねぇな」
「どういたしまして」屈託なさそうに笑っている。
俺はそんな風に、礼を言うのが精一杯だった。
情けないやら仕様もないやら。
でも、改めてあかりの存在に感謝していたというのも、正直ベースな気持ちだった。
野いちごの話ではなく、な。

その3　虚しい街角

とても朝飯とは言い難いが、俺は腹ごしらえをしてとりあえず街へ出た。
平日だから授業はあったけど、行ってる場合じゃない。退学寸前だから少しでも金を稼ぐことを考えなくちゃならなかったから。
道を行く俺の背中にくっつくようにして、あかりがいる。
ふわふわと漂っている。幽霊だからな。歩かなくたっていい訳……か？
「……あかり」
「んー？　どーかした？」
「お前の姿って……他の誰にも、見えてないんだな」
さっきから注意していたのだが、気付けばビビる筈の通行人が、みんな素知らぬカオして通り過ぎていく。つまり、あかりの姿が見えてないってこった。
ベテラン幽霊（？）のあかりは事も無げに
「そぉねぇ。よっぽど何か事情のある人ならわからないけど、フツーの人には、あたしが見えないんじゃないかしら。あのボロアパートみたいにあたしの存在が安定している場所なら別だけどね。今はやっちーがいるからあたしもこうやっていられるってワケで、じゃなかったらこんなに遠くまでこれない」
ほお。そういうことなのか。
よくはわからんが、つまり俺が夜であかりが星みたいなモンか。
あのボロアパートに憑いてた時は磁場的に安定していたから、次々とやってきたこれまたアヤしい男達には見えちまって、怖がって逃走した、ということになる。ま、あかりに言わせりゃ「何か事情のある」人間達だったんだろうけど。
……待て待て。
するってぇと、何か？　俺もその「何か事情ある人」なのかよ？

という類の質問をぶつけてみると
「だからぁ、言ったじゃん。あたしとやっちー、似たようなニオイがするって。だからよ。――何も、○○○が趣味だとか、○○○に溺れてるなんて、言ってないってば」
そ、そうだった。
お互いに、恵まれない星の元に産まれてるんだもんな。そういうことにしておこう。
「それよかやっちー」
「あん？」
「他の人がいる前で、あんまりあたしに話しかけない方がいいかもね。ハタから見たら、一人でぶつぶつ言ってるアヤしい人になっちゃうよ？」
それもそうだ。
幽霊に忠告されてちゃ立場がないぜ。

俺のボロアパートの数少ない好条件の一つだけあって、あっという間に駅前まで来た。
この駅は、近年の宅地開発の一環で建設が決まった駅だ。だから○Rも住民の乗降が増えるだろうと踏んだ上で造ったらしい。でもなきゃ、簡単に駅なんか増えないよな。鉄分の高い俺の親友がそんなことを言っていた。
行き交うたくさんの人、車。
俺にとっちゃ何の変哲もない見慣れた光景だが、あかりは嬉しそうに眺めている。
「何か面白いモンでもあったか？」
「へ？　何で？」
何でって訊き返されてもな。
「だって、あかり、すげぇ楽しそうってか、嬉しそうだから」
「あ、そーいうこと？」

高度（宙に浮いているから、高度としか言い様がないのだが）を下げて、俺と目線を合わせたあかりは
「うん！　だって、こんなに賑やかなのを見るのは、久しぶりなんだもん。長く居すぎちゃって、あのボロアパートからほとんど離れられなかったから。生きているのに精一杯の時はぜんぜん見てなかったけど、あたらめて眺めたら、色んな人がいて面白いなぁ、って」
心の底から楽しそうに、笑っている。
そっか。
言われてみて、俺も気が付いた。
数えるのも面倒くさいくらいに大勢の人間がいて、楽しそうなのもいれば、引きつったようなカオしてせかせか歩いていくヤツもいる。と、思えば無表情で暗い人もいるんだよな。多分、なんか悩みでも抱えて「ああっ、どうしよう？」とか考えてんだろうな。
どっちかっていえば、状況的に俺もそういう人間になるんだろうけど。
少なくとも、昨日まではあんな感じで街の中を歩いていたんだろう。
一晩経ちはしたが、何にも状況は変わっちゃいねぇ。むしろ、メシもろくに食ってないし、退学寸前のヤバさは刻一刻と悪化していく一方だ。
だけど、今日の今はこうやって道行く他人を眺めることが出来ている。
エラそーなことを言えば「ヤバいのは俺だけじゃねぇんだ」って、何となく客観的になっている俺がいる。自分だけ辛いって思っていたら、目先どころか何にも見えなくなるってこった。
そして、そういう自分がいるのは――
「……やっちー？　やっほー。どーかしたぁ？　ぼんやりしてるぞぉー」
俺の顔すれすれに手を振っているあかり。
笑っている。

まぁ、こいつのおかげか。
なんだか、不思議な気がする。
たかだか昨日の深夜にばったり出くわし、ほんのちょっと、人生全体を6パーセントくらいに縮めたダイジェスト話をお互いにしただけだってのに。そりゃあ、パンツと胸元も見ちまったがよ――それは単に偶然なる事故であって、俺は別にパンツと胸元を見せてやったワケでもない。あかりはそんなモノ、見たくないだろうしな。
心のどこかに、あかりと会ったから、とかいう字幕（？）が浮かんできて、初めて俺は少しだけ照れるような気持ちになった。あれだけパンツと胸を見たって感動しなかったのに、な。
それはともかく、こんだけ明るくて陽気で人が嫌いじゃなくてパンツが多少見えたって気にしないようなコなのに、どうして死ななきゃならんかったんだろうか？　ってか、周りのヤツはどんな風にしてあかりの心を追い詰めていったんだろう。○殺仕事○とか○平犯科○とかに出てくる悪役も十分ひどいが、彼女のオカンとか彼氏とかオカンの男とか、きっと地獄の閻魔が指くわえて呆然とするくらいにひでェヤツだったんじゃないのか、という気がした。
人の思いをフツーにぐりぐり踏みつけるようなヤツ。
ぜってぇ最悪だよな。
刃物で斬り付けてきたって両手がありゃガードのしようもあるだろうが、心は○トのよろいでも○Nフィールドでもガードできない。スキだらけで脆くてキズつきやすくて。だから人間っていう生き物は、隣に誰か一人でもいてもらった方がいい。心の○イミ○アル、つまり心の回復。誰かが「うっし！　大丈夫だコノヤロー」って言ってくれるから、どれだけダメージをくってもまた立ち上がっていける。
いなかった……のか？　あかりには。
「あかり、お前さ」
「おー？　何かひらめいたのかね？　○智君」
……だから、それはもういいって。

「何でもねェよ」
ま、いいか。
こんなところでホイホイ話すようなコトでもないし、な。
「行くぞ」
「あーん、待ってよぉ。やっちーのいぢわる！」
俺は歩き出した。
その後ろにくっついてくるあかり。
「……ねぇねぇ、やっちー！」
「あん？」
「駅、あっちなのに。電車に乗らないの？」
駅を通り過ぎて行こうとすると、あかりがそう訪ねてきた。
乗れるものなら乗りたいけどな。しかし。
「朝、言っただろ？　それしきの金すら、今の俺にはないんだ」
すると、ハッとしたような顔をしたあかり。
「あ……そ、そう、だったね。ごめん……」
謝ってきやがった。
すっげぇ素直だ。
何だか、こっちが悪いような気がしてきた。
「いや、いいんだ。……悪いけど、二つ向こうの駅まで歩くぜ？」
申し訳なさげに言うと、
「ううん。あたしはぜんぜん……。だってほら、歩いてないし」
宙でくるりんと回ってウインクしてみせた。
可愛いヤツだ。
そうして俺達はてくてくと歩き続け、２コ先の駅までやってきた。
ここは〇Ｒとか地下鉄の色んな路線が集まっていて、かなり栄えている。店なんかも数え切れないほどあるから、どっかバイトの口でもあるかもしれない、俺はそう考えていた。ついこの前クビにはなってしまったが、サブでやってたバイトも、この駅前にあったからだ。
（出来れば、飲み屋なんかいいなぁ……夜間で自給もいいし、メシ

も出るし）
俺は皮算用しながら、繁華街を物色し始めた。
本当は新聞とか折込とかに募集広告も載ってたりするけど、新聞なんかとってないし、フリーペーパーじゃ俺のようなビンボー男が働くような仕事のクチは見つかりやしない。むしろ、マメに歩いて張り紙してあるところを見つけたほうが、案外働きやすかったりするってことを、親友から聞いた。前にいたところもそうだったし。
道の両側に店があるから、俺は左を、あかりは右を、分担して探していく。
だけど歩いていくうちに、俺は自分の皮算用の甘さを吐きそうなくらい思い知らされた。
……ない。
働けそうなところが。
まともに募集なんか、してもいなかった。
これは一体、どういうことだ？
バイトを探す学生が多くて、どこも人手は足りているのか？　それとも、ホントに不景気だからなのか？　募集をしている店もなくはないのだが――いやらしいお店を筆頭に、あからさまに「女のコだけ！　男はあり得ない！　しっしっ」ってな店ばっかりだ。
なんかあるだろうくらいに思っていたらしいあかりも
「……ふえぇ、ぜーんぜん、ないじゃーん！　どぉなってんのぉ？」
首を傾げている。
飲食店の立ち並ぶ通りを抜けると、デパートみたいな大型百貨店がひしめくエリアに出た。
ここにはさすがに、俺みたいな人間を「カムヒヤー」なんて呼んでいる張り紙などはもちろんある筈がない。それよか「あんたみたいなビンボー人はお呼びでないんです」みたいな雰囲気すら感じるのだが――それは被害妄想か。
「うーん。ここはちょっと、キビしそーねぇ……」
あかりもそんなことを言っている。

場所を変えよう。
そう思った俺は、違うエリアに向かうべく歩き出した。
すると、行く手になんとかっていう、女の子の服屋とか、とにかくそういうテナントばかりが入っているビルが見えてきた。
そこの前を通り過ぎようとすると、急にあかりがひょいと道を外れた。
「あかり、なんかあった――」
言いかけて彼女に目をやると、ショーウィンドゥの前に漂って、じっと中を見つめていた。
中には、今年の新作デザインらしい女の子の服がきらびやかに飾られている。
でも、もう着ることができないあかり。
ちょっと寂しそう。
着たいのか？　着てみたいのか？
……だよな。年頃の女の子なんだから。
だけど彼女は、死んだ時そのままの、うっかりすると胸とパンツを一般公開してしまうようなワンピース姿でずっといなきゃならない。
あかりの後ろを、そういう流行の恰好をした女の子達が、楽しそうにお喋りしながら通り過ぎていく。羨ましそうな目で、彼女達を見送っているあかり。
そんな彼女を見ているうちに、胸の奥が詰まるように痛くなった。
着たくても着れない、か。
――切ない。
これは切ない。切なすぎる。
同じような歳頃だっていっても、男はまだいい。でも、女の子には色んな希望や願望が男の何倍も、たくさんある筈だ。女の子とまとも付き合ったことのない俺でも、それくらいのことは大体想像がつくさ。
なのに、何もしてやれない俺。

才能も、金も、何もないから。すっげぇ無力。役立たず。
バカみてぇ。
犯罪だ。
可哀相な女の子一人救えない罪、とでもいうんだろうか。男としては重罪だな。
呆然として突っ立っていたら、そんな俺に気が付いたあかりが急いで寄ってきた。
「……ごめんね。今年の新作だってかいてあったから、つい」
てへへ、とばつが悪そうに笑っている。
いや。見てるだけで済むなら、一晩でも一ヶ月でもいいんだぜ。
それで心底満足できるなら。……そうはならんよな。
何てあかりと話したらいいのか、わからなくなっていた俺。
「……」
しばらく不景気な面してずんずん歩いていたら、ふっと浮かんできた。
どうしていいのか、わからないけど――せめて、カネでもあれば、できることの一つくらいあるんじゃないだろうか？
おいおい、お前にそんな余裕があるのか？　自分のことが先じゃないか？
なんてツッこまれたら、そりゃ答えられない。顔面蒼白、冷や汗たらーだ。
まぁ、可及的速やかに手を打たないと退学が待っているワケだから何とかしないとならないんだけども。今はなんだか、どーでもよく思えた。現実逃避するつもりもないんだけどな。どーせ、粘ってみたって結果は知れてるんだし。
そんなことよりも。
この、可愛くてちょっとワケのわからんところもあるけど、やっぱり可愛い幽霊のあかりのために、とりあえず何かしてやりたくなったから。
捨て犬を拾ってきて親に見つからないように必死にかくまいなが

らエサなんかやってる子供の気持ちに近いものかも知れない。
その先に、何が待っているワケでもない。あるのは――次の別れだけ。
それでもいいんじゃないか？
やらないで後悔するよかマシだ。
今は幽霊だけど、あかりは人間なんだから。

夕日が、ボロアパートの一室を真っ赤に染めていた。
結局、これというバイト先を見つけられないまま、俺達は引き上げてきた。
ってか、途中から俺が違うことを考え始めたせいかもしれない。
正直、全くないということはなかった。あかりも時折「……ねぇ！　これなんか、どうなのぉ？」って、見つけてくれたりした。ただ、無性に気分がのらなくて、うやむやにスルーしてきてしまったのだ。
そんなことよりも。
せめてあかりが何か喜ぶような事をしてやりたい。
金か？　金なのか？　それとも他に、何かあるんだろうか？
俺は腕組みをしたまま、ずっと考え続けている。
朝の野いちご以来何にも食ってなくて、とんでもなく腹が減ってたりするけど、それどころじゃないんだ、今は。
しばらくして、所在なげにふわふわと宙に漂っていたあかりが
「――ねぇねぇ、やっちー？」
くいっくいっと、俺の服を引っ張った。
「どぉしたの？　さっきからずっと、暗いカオしちゃってさ」
尋ねる彼女の表情は明るい。
そう明るく振る舞うなよ。
余計に辛くなる。
いいんだぜ？　なんかもっとこう、辛さとか愚痴とかぶちまけた

って。
今の俺には、聞いてやることしか、できないから。
でも、きっとこいつはそんなコトは言わないだろう。
死ぬ前まで、死ぬ瞬間まで、そして死んでもなお、明るく振る舞っている。
そう思ったら、またしてもバカみたいに泣きたくなってきた。
朝から俺、どうかしちまったみたいだ。
でも、泣きたいなんて思ったの、いつ以来なんだろう。親父が死んだ時も婆ちゃんが死んだ時ですら、一滴の涙も出なかった。「ああ、またか」みたいに、人と別れることがほとんど当たり前になっていたんだろうか。本当は、人と別れるっていうのは、すごく悲しいことであるんだろうに。俺の感覚は、明らかにマヒしちまっている。
つってもあっさり泣いちまったら――あかりがもっと困るだけだ。
絶対困らせたくねぇ、こいつだけは。
考え込んでいるうちに、いつの間にか、何とも言えない顔をしていたらしい、俺。
そのせいなんだろう、あかりもがくっとテンションが落ちた。
「やっちー、様子、ヘンかも。……もしかして、あたしのせい？」
ぐっと覗き込んできた彼女は、しゅんとしていた。
「違うな」
あかり、結構気にするタイプだ。
パンツ見ただの見ないだのって騒いでるときには、全然わからなかったけど。
さっきもそうだった。
電車賃ないって言ったら、途端に申し訳なさそうに謝ってたっけ。
彼女はすうっと俺の前にやってきて、ぴたっと座った。
「じゃあ、話してみなよ。二人で考えれば、何かアイデア出るかも知れないじゃん？　あたしに話しても仕方ないなら、無理しなくていいけど……」

頼むから、今の俺の前でその寂しそうな顔はやめてくれ。
でも、やめてくれっていっても、そもそも悪いのは俺だ。
むっつりと考え込んだりしていたから。
でも、確かにあかりの言う通りかもしれない。
相談してやればいいのか。
何でもいいから二人で喋っていれば、少なくとも無言にはならない。一人で落ち込んだりしない。
なんだ。単純なことじゃないかよ。
俺はぽつりぽつりと話して聞かせた。
「まあ、確かにバイト先は全くなかった訳じゃないんだけど、その……ある程度、まとまった収入を短期間で、と思っているんだ。今日見て回ったところじゃ、ぶっちゃけ、ちょおっと間に合わないっていうか、さ」
大真面目な顔でうんうんと頷いているあかり。
「うん。急いで授業料、払わなくちゃならないもんね」
「……あー、まぁ。そうではあるんだけど、ある意味そうじゃなくて、その――」
本音を言えば。
お前に何か、してやりたい。
お前のために金が欲しいなんて、言えねぇよ。あったところで、何をしてやれるのかもわからなかったけどさ。
気が付けば、部屋の中も外もすっかり暗くなっていた。
あかりはすっかり授業料のことだと思っているから、
「バイトでなくても、何かしてお金くれるようならいいんだよね？」
そうだけどさ。
そんな話、俺の周りじゃ聞いたことない。
しばらく、あかりはじっと考え込んでいた。
すると、急にパッと顔を上げ、
「……そういえば、かも」
そういえば？

彼女はその先を言わず、ＵＦＯみたいにふわっと浮き上がると
「ちょーっち、出てくるね」
「あれ？　お前、単独であちこち行けないんじゃ……」
「近くなら、へーきへーき。やっちーのお陰で、安定してるから。
――じゃ、行ってくるね」
そう言い残し、あかりはすうっと窓をすり抜けて出て行った。

それからどれくらい経っただろう。
「……たっだいまぁ！」
天井からすうっと、あかりが降りてきた。いや、帰ってきた。
「――おうっ！？」
無意識に窓の方をずっと見ていた俺は、相当ビビった。
窓から出て行ったから、窓から帰ってくるものだと思っていたらしい。後で冷静に自己分析をしてみると。
そんな俺のビビりようが不満だったらしく、あかりは腕組みをして
「やぁね、やっちーったら。何が『おうっ！？』なのよ？　あたしが妖怪か化け物みたいなリアクション、とらないでよね」
……悪いがあかり、今のお前は生物学的に分類すれば『化け物』カテゴリに属するぞ。
ってか、腕組みはやめなさいよ。
「いや、あのな。窓から出て行ったから、また窓から帰ってくるものだと……」
「甘いなぁ、甘いぞ！　そんな推理じゃ、これからのミッションは遂行できないぞぉ！」ビシッと指さすあかり。
何の推理だよ。
それに、ミッションってのは何だ。今から軍隊に入れだの、戦争してこいだの言うんじゃないだろうな？　幾ら貧乏から逃れたいっていっても、人殺しだけは死んでも絶対やらないことにしているんだぜ。あと、ヘビとかネズミを殺して食うのも御免だ。

「何だよ、ミッションってのは。何か、不思議なバイトでも発見してきたのか？」
「それそれ。あたしが話すよか、直接聞いて貰った方が早いと思うから――ついてきて！」
？？
ともかく、何かあったらしい。
ついていくのはいいが――あかり！
窓から出ていくなよ！
俺はそこから出られねぇんだっつうの。
「早く早く！　やっちー、そこから飛び降りればいいじゃん！」
できるか！
ここは二階だっつうの！
もしかして、テレビドラマの撮影とかで俳優の代わりに高い所から落ちたり走っている車から蹴落とされたりするヤツじゃないだろうな？
俺は運動神経がいいだの身体が頑丈で滅多に壊れないなんて、一言も言ってないからな！

その４　神様仏様トメ婆様

ふわふわと先を行くあかりにくっついて、俺は暗い道をとぼとぼと歩いていく。
「……なぁ、あかり」
「ん？　どーかした？」
右手に続いている板塀をすり抜けようとしていたあかりがひょいと顔を出した。
「俺はなぁ、壁抜けなんかできねぇんだ」
いつものクセなのか？
彼女は前に壁があろうとお構いなしにすいっと抜けて行くが、後ろに俺がついているということを忘れているんじゃないだろうな。
「あー！　そーだった。やっちーがいたんだっけ」
今気付いたようなカオしてやがる。
あかりは事も無げに
「んじゃ、やっちーは入り口にまわって。ここの家だから」
言い捨てて、自分は中へと消えていった。
おいおい。
ここの家――俺のボロアパートの裏だよ。
越して来たばかりでわからんかったが、裏手にこんな敷地の広いお宅があったんだな。昔ながらのその、何と言うか〇ぞん〇刻とかに出てきそうな、昭和〇十年代っぽい、板塀でぐるりと囲まれていて、なんとなくレトロな感じがする。空き地で野球をしていたらボールが飛び込んでいって、ガシャーン！　で、おっかねぇ雷オヤジが顔をだして――的な？
ん？　ホントに、そんなおっさんが中で待ち構えているんじゃないだろうな？
「なんだねキミは？」みたいにのっけから威圧されたら、たまったものじゃない。

ってか、あかりのヤツ、いつそんなオッサンと知り合いになったんだ？
ああ、違うか。
この中にまだ雷オヤジがいると決まったワケじゃない。
俺のもーそーだ、妄想。
やたら長い板塀をぐるりと迂回して入り口まで来た俺。
思わず、身の毛がよだった。
まず、照明が1ルクスたりとも点いてない。
中は草ボーボーで、荒れ放題！　ただ広いってだけで、どこが踏み石なのか庭なのか、全然わかりゃしねぇ。ほとんど小ジャングルじゃないかよ！　実はトラなんか飼ってたり――それはないか。まあ、随分と長い間手入れされてないってコトは一目瞭然だ。こんだけ土地ありゃ金も持ってんでしょ？　手入れくらい、しなさいよ。ご近所様から苦情プレゼントプリーズだぜ、こんなんじゃ。
もしかすると、実は人なんか住んでなくて、あかりのお友達な方々、その、つまり「ユーレイ」的な？　方々の集会所なんかだったりして、一歩足を踏み入れたが最後、市町村指定ゴミ袋みたいな半透明の人たちに取り囲まれて「あなたも仲間にして差し上げます」って魂なんか取られるのか、俺は！？　あかりがニヤッて笑って「やっちー、もう生きていてもしょーがないでしょ？　だから、あたしと一緒にユーレイやろーよ。楽しーよぉ」なんて――。
「……そんなトコで何やってんの？　早く来なよ」
「うおっ！！」
さんざんに伸びた雑草の陰から、いきなり現れたあかり。
ホーンテッドなマイワールドにジャンプしていた俺は、思いっきりビビッてしまった。
本日二回目のビビリリアクション。
さすがにあかりはイヤな顔をして
「もうっ！　さっきといい今といい、何でそんなにビビるのよ！
こんな可愛い女の子つかまえて、そのリアクションはないんじゃな

ーい！？　抱き締めて押し倒されるのは仕方がないケド、そんなにビビられちゃ、あたし傷ついちゃう」
いや、幾ら可愛いからって、幽霊を抱き締めて押し倒すような能力の持ち主はいませんから。霊能者だってやれなんて言われたら、土下座して許しを請うぜ。
それはともかく、まあ、俺が妙な想像していたのも悪かったか。
「……す、すまん。あまりに豪壮なお宅を拝見してしまって、つい、その」
豪壮だろう。
このターザンびっくりのワイルドな様子は、どう見たって。……それはいいや。
フツーに謝ってやると
「……しよーがないなぁ、やっちーってば」
なんか、フツーに許してくれたようだぞ。
「んじゃ、こっちこっち」
もと来た薮（？）の中へ入っていった！
玄関は？　この正面じゃないのかよ！
「……あ、あかり」
「ん？」
「玄関……家の正面じゃ、ないのか？」
足元からもじゃもじゃ生えている雑草やら、頭の上から覆いかぶさってくる何か（木の枝か何かだろうが、暗くてわからん）と格闘しながら尋ねると
「玄関？　そっちにでも、あるんじゃない？」
俺が多分そっちにあるだろうと推測した方を指した。
「どうして、玄関から入らないんだ？」
もしかして、泥棒か強盗でもやれというのではあるまいな！？
するとあかりは事も無げに
「だって、ヘンなお札みたいなの、貼ってあるんだもん」
お……！

あかりはひょっとして、〇界師だの〇陽師が使うようなアイテムの類は苦手なのか？　塩とか、お守りとか、呪文（？）とかとか。そういうの、ユーレイ退治の常道グッズだもんな。

これはなんか、世間の幽霊に対する一般論になってきたぞ。学説どおりか！

「そ、そうか。じゃ、結界みたいなその、バリアになってて入れないのか」

「ううん。そんなコトは全然ないんだけど……なんか、不気味じゃん。お札とかってさぁ」

おいっ！

それだけかっ！！

ただ「ブキミ」としか思われてねーぞ！

〇陽師失業！？　〇界師誇大広告！？　日本中の神社仏閣は、ただの紙切れ売りつける悪徳商法か！　全国の爺さん婆さん、騙されてるぞ！　速攻弁護士呼べ！

「……」

物を言うＭＰを奪われた俺は、黙ってこの不愉快なジャングルを抜けることに専念した。

かき分けかき分けしていると、すぐそこに縁側らしきものを発見した。

踏み石もある。

おお、これが昭和年間に日本中に流行した、今も日本フェチの外国人が愛して止まないというジャパニーズテラス、いわゆる縁側か。今じゃ、ほとんどこんなもの見られないもんな。超レア物、といってもいいかも知れない。

それに、きちんと雨戸も締まっている。すっかり腐ってボロボロだけど。

俺がしげしげとこの昭和的シチュエーションを観察していると

「ねぇやっちー、どうしてこの家、入り口が二つあるの？」

あかりがそんなことを訊いてきた。

入り口が二つ？
「入り口って、玄関はあっちの、お札が貼ってある方の一つしかないだろ？」
「だってさぁ」
あかりいわく、一年ほど前まではこのお宅も、こんなジャングっていなかったらしい。
で、この縁側に面した庭も綺麗にされていて、昼間は近所に住んでる婆ちゃん達がよぼよぼとやってきては、ここに腰掛けて茶を飲んでいたりしたというではないか。顔馴染みの郵便屋なんかも、郵便受けに入れないでこの庭に回ってきてはこのお宅の住人に手紙を手渡ししていたんだそうだ。そういう様子をあかりは見ていて、入り口が二つあると思ったようだ。
何という、古きよき懐かしき日本の風景なんだろう！
別な意味で俺は泣きそうになった。
このネットだの携帯だの○ンダムだのが蔓延している現代社会の、それも都心の足元にひっそりと息づいていたのである！　まぁ、わかる人にしかわからんだろうが、それでも○ゲージとかそーいう趣味の世界では、オッサン中心に昭和の風景を造るのが流行ってるっていうし。
……つってもな。
あかりの年頃ってのは、マンション当たり前の世代だ。こういう昭和チックな風景なんて、○ザ○さんとか○びま○子ちゃんとか○ぞん○刻でも読まなくちゃ、見ることはないかも知れない。考えてみりゃ、それらもあかりの世代のコ達じゃ、知らない人も多いかも知れない。
俺は端的に説明した。
「あかり、これはな、日本の文化が生んだ、ご近所付き合いに最も適したツールだ」
「うん」
「玄関は玄関。これは正式の入り口じゃあない。だけどな、こうや

って気軽にやってこられるスペースを確保しておいて、いつもご近所さんと交流を深めるワケだ。茶ァ飲んだり、世間話したりしてな」
「ふーん……」
わかったような、わからんようなカオをしている。
無理もないか。
イメージつかみにくいよな。
今じゃ、隣の人間すら何をしでかすかわからんから、玄関も窓も完全ロックで、下手すりゃ厳重に防犯システムつけてる家も少なくない。こうやって、隣近所が連帯して防犯に努めた時代なんていうのは、遠い昔のことみたいだもんな、あかり達には。俺もあんまり世代が違うワケじゃないんだけど、婆ちゃんとか親戚とか接点があったから、直接そういう仕掛けで暮らしてはいないが感覚としては理解できる。
首を傾げていたあかりは、ポンと手を打ち
「じゃあ、あれ？　井戸端会議ってヤツ？　そーでしょ？」
うーん……合っているような、合っていないような。
塩だと思ったら〇の素だった、みたいな？
まぁ、そういうことにしておこう。ここでレクチャーしててもしょうがない。
「その通りではないが、近いものは――」
答えかけていたら……おい！
あかりはもう、さっさと中に入って行ってしまった。
キョーミゼロってことかよ。
一生懸命に考えさせておいて、これか。
「やっちー、早く早く」
早くったって、振り逃げしておいてよく言うぜ。これがお笑いなら、コンビ解散だ。
俺は雨戸の一枚を繰ると、靴を脱いで上がりこんだ。
「お……お邪魔します」
途端に「誰だコラァ！」とか怒られるんじゃないかと、ちょっと

怖かった。
中は表同様にえらい暗さだ。
照明がついてねぇ。
一歩踏み入れると、そこは廊下らしかったが、ずしりと軋んだ。
目を凝らすと正面にふすまがあって、あかりが顔だけ出していた。
「やっちー！　こっちこっち」
この状況で、そういうマネはやめなさいよ。
いくら可愛い女の子のそれでも、真っ暗闇で壁から顔だけ出ていたら、誰だってＭａｘでビビるっての。
「おい。ほんとーに、お邪魔していいんだろうな？　いきなり怒られたりせんだろうな！？」
「いいよ。ちゃんと、あたしが言ってあるから」
あかりから事前通知済み？
ってことは、あかりの姿が見える人か。
昼間あれだけ街ン中歩いても、誰一人見えやしなかったのに。
おいおい。
本当に「お仲間」じゃあるまいな？
俺は恐る恐る、ふすまを開けた。
なんか、しばらく溜め込んでおいたような、どよんとした空気のニオイがした。
ほんのりと薄暗い、ぼうっとしたオレンジ色の世界。
「……？」
よくよく見てみれば、それは家庭用照明によくある、豆電球の灯りだった。
その下には布団が敷いてあり――婆さんが独り、横たわっていた。
枕元で、ちょこんとあかりが正座している。
「あかり、これは……」
「いいからいいから。とにかく、話聞いてあげて」
あかりに服の裾を引っ張られながら、俺は並んで座った。
俺が腰を下ろすと、寝ていた婆さんの首がゆっくりと動いて俺の

方を見た。
な、なんか……このシチュエーションはヤバイぞ。
実はもう、なんたらの川に膝まで浸かってるんじゃないだろうな？
で、俺に「……生き別れになった子供によろしく」とか言って、がくっと息を引き取る。なんていうのは勘弁してくれ！　生き別れの子供を捜しているうちに、こっちが行き倒れになっちまうぜ。
そんなコトを取りとめもなく考えていると
「……ああ、あんたさんが、昨日幽玄荘に越してきた学生さんだね？」
うお！
俺の想像はあっけなく撃墜された。
めちゃめちゃ声が元気だ！
婆さん、全然死にそこなってるし！　ＨＰ十分だよ！　魔王〇ラモスと戦えるわ！
「あたしゃねぇ、早乙女トメってんだよ」
さ、さおとめトメ？　悪いけど……いいにくっ！
そんで、さおトメ二乗っすか。
ん、トメ？
っちゅーことは――。
「ああっ！　おーやさんっすか！？」
トメ婆さんはニコニコと頷き
「そうだよ。フネさんから聞いたのかえ？」
また新しい固有名詞が。
フネ？
残念ながら、俺は〇ザエさん一家にお知り合いは一人もいない。
俺が一瞬怪訝そうな顔をすると
「あれだよ、あれ。あんた、不動産屋に行ったべ？　あの婆さんがフネさんだよ」
おおっ！
俺をだま……じゃなかった、肝心なところだけ何故か耳が良く聞

こえて早口になるという不思議な特技を標準装備した、あのババアか！
「そうだったんですか。あのバ……じゃなくてオバさんはフネさんという方で」
「そうなの。あたしのもう、ええと、５０年来の付き合いでさ」
ご、ごじゅうねん！？
半世紀だよ、半世紀！　戦後も高度成長もバブルも、全部経験済みだ。
腐れ縁、っていうんだろうけど、ホントに腐ってませんか、それ！？　防腐剤でも入れた？
「磯矢フネさんってんだ。よろしくしたってよ。久しぶりにお客が来たって、喜んでたわさ」
トドメにめっちゃニアピンすか。
このババアコンビ、ツッコミどころが蜂の巣のように多いってば！
「あかり、この、ええと……トメさんとお知り合いか？」
「うん！　あたしがボロアパートに棲み付いて、少ししてからかな」
……大家の目の前で「ボロアパート」呼ばわりは止せ！
「なんか、隣で楽しそうな声がするから、覗いて見たのよ。そしたらオバさん『あら、そんなところにいないでこっちにいらっしゃい』って。それ以来」
このトメババア、最強のキャラだよ。
幽霊が見えているだけでなく、フツーに仲良くなってやがる。
しかしだ。
よーく考えてみると。
あのアパートにやってきた先代の住人どもを、あかりは次々と叩き出した。ということは。
……めちゃめちゃ営業妨害してんじゃねぇかよ！
トメ婆さんは嬉しそうに
「そうそう。あかりちゃん、とってもいい子でねぇ。こうやって、遊びに来てくれるのよ。あたしゃ早くにダンナに死なれちまって子

供もいないから寂しかったのよ。『おばさーん』っていっつも来てくれて、可愛らしいでしょお？　あたしゃ嬉しくてねぇ」
えーと。
真実をお伝えした方がよろしいのでしょうか？
俺の隣にいる、この善人ぶった小娘の幽霊は、あなたの商売を片っ端から邪魔してます、と。
――それにだ。
このババア、自分の物件に幽霊が棲み付いているって分かってて、公然と貸してやがったのか！　備考欄にでも書いておけ！「幽霊一匹憑いてます」くらいによ！
たまたまその幽霊に気に入られたからいいものの……気に食わなかったら今頃俺は路頭に迷って野垂れ死んでたかもしれないってのに！
あ、頭が割れるよーに痛くなってきた。
もうどうでもいいぜ、このババアとあかりの関係なんて。
気を取り直して、話を仕切り直そう。
「……で？　俺に何か？」
「そうそう、そうなのよ」
あかりはポンと膝を叩き
「おばさん、あのね、さっきの話」
さっきの話？
トメ婆さんは云と頷き
「いやぁ、済まないねぇ。あたしゃ、一年前からカラダがこんなんなってしまって、動くに動けないのよ。自分でトイレ行くのが精一杯でねぇ」
そうか。
それでこの家も、アパートも、ろくに手入れがされてないってワケか。
「あかりちゃんから聞いて、いやぁ、助かったと思ったわぁ」
ん？

なんだソレは？
何の話だ？
「この家でも、アパートにある物でも、何でも自由に使っていいからね。お金が必要だったら、フネさんに言ってもらえればいいから」
……？
言っている意味がわからん。
俺は無言であかりの顔を見た。
あかりはニコニコして
「やっちー、良かったねぇ！　この家の掃除とか整理とか、あとアパートの管理とか、代わりにやるよって言ったら、おばさん『是非』って！　必要なお金も出すっていうし」
おーい。
ちょっと待て。
すると何か？
俺は自分が知らない間に〇無〇子さんになっていたってコトか？
大体なんだ、本人抜きでいきなり話コンクリートしやがって。
苦情を言いそうになった俺。
するとあかりの奴は
「それでさぁ、やっちーが授業料払えないって話したら、おばさん、それくらい払ってあげるからって！　どぉ？　すごいでしょー！」
！！！！
マジ！？　……っすか？
キツネが両側から頬っぺたつねってんじゃなかろうか。
おいおいおいおい。
なんだよ、この展開。
どこの世界に、そんな神様仏様みたいな人がいたってんだ？
何だか、頭がくらくらしてきた。
俺は思わず、叫び出しそうになった。「世界よ、ありがとおぉぉっ！」的に。
が。

しかし、だ。
「……気持ちは、有り難いですが」
俺は居住まいを正した。
どう見たって、このトメ婆さんの生活はギリギリだ。
タンスの中かスイス銀行かは知らないが、貯金なんかある筈がない。幾らこのボロ豪邸とアパートの面倒みてやるって言ったって、○十万円単位の授業料なんか出してもらった日には、割に合わねェよ。
「大家さん、結構暮らしに大変そうな部分があるみたいですし、幾らこの家とアパートの世話するって言っても、割に合わないと思います。大家さんが暮らしていくための資金を、俺が頂戴するワケにはいきません」
真面目にビシッと、キメた俺。
授業料は咽喉から手が出かけているくらい欲しいが、はいそうですかって貰っちゃっちゃあ、男が廃るってもんだ。
あかりは目を丸くして俺を見ている。
トメ婆さん、フリーズ。
しかし、ほんの1．5秒くらいの後
「――はっはっは。今時、こんなに硬い子もいたもんだね」
爆笑してやがる。
布団から出している右手で俺の膝をバシバシと叩きながら
「やだねぇ、ちょっと。そんな真面目になられちゃ、このババアが惚れちまうよ。あはははは」　それは、ご遠慮申し上げます。
「お金の話かい？　いやいや、この家見たらびっくりしただろうけどさ、違うのさ。――あたしゃねぇ、○○町と○○門と○○川のところの土地を貸してるんだよ。その収入が月にねぇ（個人情報）ほどあるんだよ。だから、あんたの授業料くらい、お安いもんだよ。お小遣いにもなりゃしないねぇ。あはははは――」
……！？
○○町と○○門と○○川！？

ぶっとびで超一等地じゃねぇ？
しかも、その貸し賃で月々（個人情報）の収入！？
俺一人で何十年、いや何百年大学に行けるんだよ？　〇野屋の牛丼、何万杯だ！？
このババア、タダ者じゃあない。
お、恐れ入りました……。
あるところには、あるモンだな。世間ってのは広いぜ。
すっかり口が利けなくなった俺。
正直、それでいいのかという気がしないでもないが、この際、もたれかかっておくよりなさそうだ。これというバイトを見つけられなかった以上、やらないよりやった方がマシなように思った。それに、自分のアパートとその裏が範囲だから、全然やりやすいしな。
考えてみりゃ、とんでもない幸運が転がり込んできたようなものだ。
「……わかりました。俺の出来る範囲で、やらせてもらいます」
「うんうん。ホントはどこか業者にでも頼めばいいんだけど、今の業者は信用できなくてねぇ。こんなババ独りだってわかったら、あっさり殺されちまうよ。――あはははは」
豪快に笑っている。
話がついたと見えたあかりは
「じゃおばさん、明日から、この家とアパート、綺麗にするね？」
「ああ、済まないけど、頼んだよ。あたしも、もう少ししたら、この腰も良くなりそうなんだがねぇ……」
トメ婆さんはふと
「おお、忘れちゃいけない。当面の費用は明日にでもフネさんに頼んでおくけど、二、三日は済まないがそれでも使っておくれ」
指差した先の小さなテーブルの上に、封筒がのっている。
これ……俺がこの間支払った家賃じゃねぇか。フネさんが持ってきたんだな。
俺にしてみれば血と涙そのものだが、今のトメ婆さんにとっちゃあ、便所でケツ拭くくらいにもなりゃしないんだろうな。

するとあかりは
「じゃ、遠慮なくー」
おい。
あっさり受け取るんじゃねぇ。一応、慎めよ。
って、しかも！！
「……何、やってんの？」
「え？　何ってあたし、ポケットないし」
よりによってあかりは、自分の胸元にしまいこみやがった。
っつーか、封筒を谷間に挟んでるし！
ありえねー。こんなの、直で初めて見た。
それがお前のダブルマッキンレーの使い道か！　用法・用量を守って正しく使ってねーだろ！
「……おい」
「何？」
「どこでそーいう行儀の悪い真似を覚えたんだ？　ええ！？」
あかりはあっけらかんと
「前かな。あたしんちに、いやらしい店のチラシがいっぱいあったの。それ。……やってみたら、ホントにできるもんだね、あはは」
あははじゃねぇよ。
やってみなくていいから！
そーいういやらしい店は確かに山ほどあるだろうが……その店、一体全体女の子に何をやらせる店なんだ？
「それはよせ。そーいう真似していると、アホがうつるぞ」
「えー。アホはヤダなぁ……じゃあ、はい！　やっちーが持って」
胸を突き出すな、胸を。手渡ししろよ。
「ったく、そんなところにしまうなよな。……んじゃ、俺が持ってくから――」
手を伸ばした途端、あかりは手ぐすねを引いて待っていたように
「あー！　やだ、やっちーったら！　今、どさくさに紛れて触ろうとしたでしょ？」

お前な！
するかよ、んなこと！
幾ら貧乏人だって、デリカシーの二つや三つは持ってるわな。
例え高級据え膳京風懐石爆安価格だろうと、喰わずに死んでやるよ俺は。
と言ってまあ、そりゃあ――さわれりゃベストだがよ。
「……もういい。あかりがそのまま持って帰れ」
夜道で見えちまった人はビビる以前にさぞかし驚くだろう。
色っぽい格好した女の子の幽霊が、胸の谷間に封筒を挟んで漂っている姿に！
ん？　待て待て。
普通の人にはあかりの姿が見えないんだから、封筒だけがひらひら漂っているように見えるのか？　それはそれで不気味だ。
「なんだよぉ！　あたしがアホになってもいいって言うの！？　ひどーい！　やっちー早く持ってってばー！　ほらほら」
揺らすな揺らすな。
自分のマッキンレーの標高くらい、測量しておけよ。崩落しても知らねーぞ。
そんで訂正。
すでにアホだ、お前は。

その４　神様仏様トメ婆様（後書き）

筆者のぼやき

……執筆テンション補充のため、次回アップ未定っす。

その5　俺の世界遺産

トメ婆さんの家を出た俺は、ありがたく頂戴した仮費用（俺の払った家賃がリターンしてきただけだが）で、とりあえず鋭気を養うことにした。

まぁ、メシを食うってコトだけど。

それでも、一日ぶりのメシ！

野人か原始人みたいに、朝に裏庭で採取した野いちごしか食ってなくてなかったし。超すきっ腹だった俺には、涙がでるほどありがたかった。

コンビニに寄って買い物をし、ボロアパートに戻って来てから食おうとしていると

「ねぇ、やっちー」

「うん？」

「一日ぶりのありがたーいゴハンが……それ？」

あかりが不思議そうなカオをして訊いてきやがった。

――悪いのかよ？

○ブン○レブンの牛カルビ弁当じゃ！？

焼き肉などという尊い存在が、すでにファンタジーかＳＦの世界のハナシになってしまっている俺にとって、この弁当の価値はとてつもなくでかい！　少しでも、焼き肉の気分を味わえるじゃないか！　一個で二回得した気分――あくまでも、気分だが――になるじゃないか！

って、何を牛カルビ弁当ごときにアツくなっているんだ、俺は。

「牛カルビ弁当を大いに盛り上げる団体（ＧＯＤ）」の会長みたいだな。そんなものは世界中に絶対ないだろうけど。もしあったら俺は明日にでも、その方々に拉致されることだろう。

すると、あかりはおっかぶせて

「ちょぉっとリッチっぽい気分になりたいんだったらさ、ファミレ

スとか行けば良かったじゃん！　千円も出せば、そこそこのモノ食べれるじゃないよ。――コンビニ弁当買って嬉しそうに喜んでいる人って、チョコ〇ールで金の〇ョロちゃん出すくらいに珍しいよぉ？」

あーあー、すみませんでした！

どーせ俺は、〇ンキーとか〇ールにたまたま入っているレア形と一緒ですよ！

本当なら、きちんと米とか卵とかキャベツとか買った方がいいんだけどな。

貧乏学生が買い求めるべき「三種の神器」ならぬ「三種の食材」！

安くて量を稼げて、何とか死にはしない！（筆者註：実話です）

でも、夜も遅いんで、明日にならなきゃ買いに行けない。

そーいう主旨の説明を加えたあと、

「――と、いうワケだ！　牛カルビ弁当は、いわば気分だ！　メシにありつけた喜びというものをだ、一番ダイレクトに表現しているのが、この牛カルビ弁当というワケだ」

いやいや……きちんと腹に入れるために買ったんだけどさ。

匂いだけ味わって捨てるようなヤツがいたら、そいつは全世界の貧乏人を敵に回してるよ。

「明日からは、きちんと自炊する！」

総理大臣の所信表明演説よろしく声高らかに宣言した俺を、あかりは驚きの眼差しで見ながら

「へぇーっ！　やっちー、自分でゴハン作れるんだ！　すっごーい！」

そこまで感心しなくてもいいよ。

貧乏人にゃ、当然のスキルだぜ。

買い食いなんざ、貧乏人がもっとも慎むべき行為だからな。

あと、雑誌にマンガにエッチぃ本やＤＶＤ、レンタルものにケータイ電話！　とどめにいやらしいお店（俺は行かないけどな）！

これだけ我慢すれば、憲法に保障される最低限度の生活は維持でき

るというものだ。そーいう無駄金こそが、貧乏人をさらに貧乏にするこの世の元凶だ。世界各地の貧乏な同志達よ！　断じて負けるな！　……と、俺は思っている。

自炊というハナシにあかりは

「あたしはねぇ、全然ダメだったなぁ……。カレにお弁当作ってあげようと思ってキッチンに立ったんだけど、お米の炊き方からわかんなかった。あはは」

そう言って笑ったが、俺は笑えなかった。

「……まあ、仕方がねぇよ。そーいうワザは、必要があってこそ身につくんだからさ」

そもそも、だ。

俺のイメージが突っ走っているだけかも知れないが、あかりの親なんか親らしいコト０．１ミリもしてなくて、借金重ねた挙げ句、逆に娘をいやらしいお店に売り飛ばそうとしてたくらいだからな。

そんな親から何を学ぶことやある！？

料理なんか習えるワケがねぇ。娘に教えるどころか、作ることすら相当怪しいぜ。

「……ま、自分に対する仕切りみたいな部分もある。こーいうモノは、よほど金の都合がついた時くらいしか、買えないからな」

「ふーん。いろいろ、大変なのねぇ……」

そうして食い始めた俺を、あかりは上からじっと眺めていたが

「……で、どーしてえっちぃ本は買わなかったの？　お金、余裕できたのに」

「ぶっ！」

思いっきり、そこら中にコメを吹き飛ばしてしまった。

なんで、そこでそういう質問が出てくるんだ！

「汚いなぁ、やっちーったら」

「お前な！」

俺は昼間街角で貰ったポケットティッシュでそれらを拾い集めながら

「俺がそーいうえっちぃ本を読む姿でも見たいのか！？　金が入ったからって、なんで俺がわざわざえっちぃ本を買わねばならんのだ！？」
「え……だって、お金ないから買わないって言ったじゃん？　お金が手に入ったから買うのかなぁ、って、てっきり」
そこで俺は合点がいった。
さっきコンビニで弁当を選んでいる間、何故かあかりは本のコーナーをうろうろしていた。　えっちぃ本を物色していたのか、こいつは。
世界中の男がみんな、金があるからってえっちぃ本を買う訳がないだろう！
あかりは事も無げに
「さっきのコンビニ、色々あったよ？　何とかってコの初ヌードだとか、ええと……人〇写真館に素人娘――」
見出しをみんな覚えてきてんのかよ！
「ええい！　メシが不味くなるからやめい！　俺は別に、そのような低俗なアイテムは必要ないのだ！　とにかく黙ってメシを食わせろ！」
「ああ、それもそーね。やっちーはあたしのパンツ、見ようと思えば見れることだし」
だから、見たくて見たワケじゃないんだ。事故だ、事故。
――ってそこ！
わざとらしくこっちに脚を向けるな！

翌朝から、早速俺は仕事を始めることにした。
トメ婆さん邸とこのボロアパート、二つ合わせると作業のボリュームはかなりのものがある。長い期間放置されていただけあって、環境保護団体が泣いて喜びそうなほど草木が成長しちゃってるし。建物もあちこち汚れ放題に壊れ放題。ヤバいところはトメ婆さんと

相談して大工でも呼ぶとして、とりあえず掃除くらいしないとな。こんな状態の中にあの婆さんを転がしておいたら、いつコロリとお逝きになるかわかったものじゃない。というのは冗談で、あれだけＨＰ・ＭＰ満タンの婆さんなら、そう簡単には壊れそうもないけどさ。

よくこれだけの管理を、あの婆さんは一人でやってきたものだ。

まあ、やることは腐るほどありすぎるけど、いつまでにやれっていう制限はないから、少しづつやっていくことにしよう。

とりあえず、トメ婆さんの家だ。

何が気に入ったのか、俺のオーナー的存在になってくれたことだし。恩にはきちんと報いたいからな。

トメ婆さんの家にやってきた俺は、作業に取り掛かった。

まずは雨戸をすっかり開けて婆さんちの空気を入れ替えて、日光を取り入れてやる。

そして、玄関前から庭にかけて、植物系モンスターとバトルだ。

これがえらいこっちゃ。

雑草ってのはしぶといから、根が深くてなかなか骨が折れる。トメ婆さん宅の物置に幾つか道具があり、俺は鎌を持ち出してきたが……サビきっている上に刃こぼれ上等。あの婆さん、金持ちのクセに物持ちがいいらしい。

俺が雑草や木の枝と格闘している間、あかりには婆さんの話し相手をしてもらっている。

トメ婆さん、少しづつ綺麗になっていく庭を見てすっかり喜んでいるようだ。

「ああ、やっぱり、若い人の力はすごいねぇ。――ええと、あの人、なんていったっけ？」

「やっちーよ、やっちー。あのね、部屋にえっちな本とかＤＶＤが全然ないの。お金ないから、買わないんだって」

そこ！

余計なことは言わんでいい！

すると、トメ婆さんは
「ひゃっひゃっひゃ……そうかい、そうかい。このババのでよければ、幾らでも見せたるけどねぇ」
……だから、固く辞退申し上げます。
などという余計な気を遣わなくてはならない場面もあるにせよ、俺は楽しくなってきた。
トメ婆さんは喜んでくれてるし、あかりもいる。
こんなに好意的な人達に囲まれているんだから、そりゃやる気も出るだろう。
俺が学校にこだわっていたのもそう。
気のいい連中と一緒に、ああだこうだいいながら勉強をするのは気持ちのいいコトだ。ほとんど諦めかけていたけど、あかりとトメ婆さんのお陰で、また近いうちに通えるようになった。人間、願ってみるもんだぜ！
「ムリしなくていいよ。ゆっくりやんな」
座敷から、トメ婆さんが時々声をかけてくれる。
「はい！　大丈夫っすよ」
俺は数々のバイトをやってきたから、体を使うことなんか何でもない。
あっという間に昼近くになった。
すると、ひょこひょこと訪ねてきた人がいる。
不動産屋のフネ婆さんだ。
磯矢フネ。名前が、〇ザエさんのお母さんとめっちゃニアピン。
「あれまあ、こないだの学生さんかい。トメさんが、世話になるねぇ」
いえいえ。こっちが世話になってますよ。
「おやおや。こげに綺麗になって。トメさん、喜んどるげに」
ええ、まあ。
それよりこの間から気になっていたんだが、この婆さん達、不思議な訛りを操っている。一体、どこの言葉なんだ？

フネ婆さんは、風呂敷包みを提げている。
「ほれ、トメさん、身体悪いべ？　だからこうやって、サエさんとキネさんとわしとで、ご飯作ってもってくるのさ。あはははは――」
出た！　婆さん必殺「何でそこで笑う！？」的笑い。
婆さんっていうのは平均すると、こっちが予期しないところで笑ってくるんだよな。
でも、なんかあったかいよな。
みんなで寄ってたかって、助け合っている。
俺の親戚とか、あかりの家庭なんかとは違いすぎる。
「やっちー！　あのさー、おばさんが――」
そこへ、ふわふわとあかりがやってきた。
フネ婆さんは「あら、あかりちゃん。こんにちは」イントネーションめちゃくちゃ。
「あ！　こんにちはー、おばさん」
ああ、この婆さんもあかりとお知り合いか。
ったくよ、偽装表示しやがって。そんなところで流行にのらなくたっていいだろう？
まー、もういいけどよ。
「あのね、やっちー。おばさんが、そろそろお昼にしなさいって」
「ああ。それじゃ、これから買い物に――」
言いかけた俺に、フネ婆さんは風呂敷包みをひょいひょいと上げ下げして見せて
「ほれほれ。これ、あるから。一緒に食べなさい。婆さん二人じゃ多いんだわ、いっつも」
……なぜ、それだけの量を作る？　いつもいつも。
と、ツッコミを入れたいところだが、これは仕方がない。
俺の死んだ婆ちゃんもそうだったから。
その科学的根拠はわからない。年寄りだから、っていったらそうかも知れない。
でも、婆さん達の心ってのは、マリアナ海溝みたいに深くて、サ

ハラ砂漠級に広い。
きっと「腹いっぱい食ってくれ！」的な心情があって、いっつもどっさり作っちまうんじゃあないかと、俺は思っている。食い物のない時代に生まれ育って、でも若い人とか他の人にはそういう思いをさせたくないって、心のどこかにあるんだろうな。
何を余計な、とか思うヤツはクソガキ！　鼻ったれ！　アフリカ行って腹減らして来い！
そーいうことじゃねーんだ。
心、気持ち、思い。
これぱっかりは、金持ちだろうとビンボー人だろうと、若くても年寄りでも関係ねぇ。
素直に「ありがたい」って、思えよ。それでいーんだ。理屈はない。
「あー、すんません。お世話になります」
びしっと頭を下げると、フネ婆さんはパタパタと手を振って
「なんもだって！　お辞儀なんかされたら、こっちが恥かしいよ！
ひゃひゃひゃひゃ――」
サイコーだぜ。
クールでポップな婆さん。
偽装表示の件は不問に付そう。可愛い女の子の幽霊だったってコトで、マル。
んで、それから俺達はトメ婆さんを囲んで昼メシになった。
メニューは至ってシンプル！
根菜とかの煮付けに魚っぽい煮付け、蒸かしたイモ系＋かぼちゃと漬物。
これがいいんだって！
食い物に困った事のあるビンボー人なら、間違いなく誰でも感動するぜ。涙ウルウルに。
ところが、相手は婆さん二人。あかりは当然、食えない。
オニのよーに勧めてきやがる！　俺に！

「ほれ、若いんだから食べられるっしょ！　これ、全部食べちゃいなさい」
「は、はあ……。ありがたく」
婆さんの特徴、その二。
若者は幾らでも無制限に食えると思い込んでいる！
大事なことは、ここで断ってはいけない。婆さんは、老い先短い人生の何百分の一かを使って、これらの食い物を調理しているワケだからな。
――腹、きつっ！
でも、ありがたいこった。
ビンボー人がこうまで腹いっぱいになるなんて、一年に何回あるだろう？
ああだこうだ言いながら食って一段落した頃、フネ婆さんがごそごそとポッケを探り
「トメさんから頼まれたの、持ってきたからね。なくすんじゃないよ？」
封筒を差し出された。
おお！　おお！
これこそ世界遺産！　俺の授業料！
死んでもなくすかよ。
言ってみれば、俺の人生のリフォーム代だ。
これこそ、（俺の）世界を救う、最後の希望なんだからな。
俺は思わず、拝むようにひれ伏した。
途端に、婆さんコンビ、大爆笑。
「ひゃっひゃっひゃ。いいねぇ、若いってのは。気持ちがいいもんだよ」
「あんた、エラくなるよ！　若いうちに金を大事に思えるってのは、大事だぁ、うんうん」
恐れ入ります。
いや、恐れ入ります。

とにかく、恐れ入ります。――しつこい？
そんな様子を可笑しそうに見ていたあかり、すーっと俺の傍にやってきて
「……良かったね。やっちー」
微笑んでいる。
サンキュー、あかり。
お前の、おかげさ。
この婆さん達と仲良くなっていて、話をつけてくれなかったら、こんな幸福はやってくる筈もなかった。
神様仏様トメ婆様、そして――あかり様！
婆ちゃんに死なれて以来、久しぶりに俺が幸福感を味わった日だった。

でも、忘れちゃいない。
このあかりのために、俺ができること。
これからは、そいつを見つけてやらなくちゃ。

その6　そんなんアリかよ！？

ババア……いやいやお婆ちゃん×2＋あかりという不可解な存在達に囲まれて至福の一日を過ごした俺。

次の日は、久しぶりに学校へ出向くことにした。

トメ婆さんが出してくれた授業料を支払うために。

婆さんちも、もう少し手入れしたいところだが、放っておけば今度は俺がヤバくなる。でも、そこはマイオーナー・トメが昨日

「いやいや、良かったよかった。そんなに喜んでもらえると、このババアの寿命もあと五十年延びるってモンだわ。――明日にでも、すぐに払っておいで。クビになったら、大変だからね」

クビ、ではないんですけれども。

ってか、本当にこのトメ婆さん、あと五十年生きそうだな。

まあいいや。

トメ婆さんのお墨付きも出たことだし、何の問題もない。

行けば、誰か友達もいるだろう。

こんなビンボー人な俺といえども、仲のいい友達の四、五人はいる。

できればみんなに会って、首の皮一枚つながったことを伝えたかった。みんな、俺の絶体絶命ぶりを知っていて、心配してくれていたから。

「あかり！　あのさ、明日なんだけど――」

学校へ行くことを伝えると、あかりは

「あーっ！　あたしも行く行く！　行ってみたーい！」

子供のようにはしゃぎ始めた。

ってか、彼女は俺に取り憑いているんだから、行かざるを得ない。

「だいがくってトコ、行ったことないし。ほら、あたしバカだったから、ぜぇんぜんご縁がなかったんだ」

実はすっげー聡明なコに限って、そういう言い方をするものだ。

これっぽっちの嫌みもなく自分をバカだって言ったりするコはな。嫌みに聞こえる時ってのは、本音はその反対にある。
周囲の連中が理解のある人間だったら、あかりはもしかすると○大とか○大でも行けたのかも知れないし。今となってはイメージでしかないけどさ。
ただ、あかりは決してバカなんかじゃない。
時々アホっぽさが垣間見えるのは否定できないけれども。
ま、可愛くて色っぽいアホだから、別に苦にはならないかな。
愛嬌だ、愛嬌。

俺の通っている大学までは、ボロアパートから歩けば結構ある。楽勝で1時間は歩くだろう。引っ越す前まではもう少し近かったから、雨が降ろうと雷が落ちようと、歩いて通っていた。ビンボー人、基本中の基本だ。
でも、幽玄荘に引っ越して遠くなったし、トメワークで収入も確保できたから、これからは電車で行こう。トメ邸と幽玄荘の管理も、毎日きちんとしなくちゃならないから、歩いていたら時間もないしな。
大学までは最寄りの駅から電車に乗り、途中で乗り換えて15分ほど。
そこは都心から離れていて、大学が幾つか固まっている地域。だから、朝夕は大勢の学生の姿を目にする。
朝の授業に出るつもりじゃないから、俺達は午前中の遅い時間にやってきた。
この時間帯は既に授業真っ最中だから、午後の授業に出ようとしている学生がちらほら見受けられる程度だ。
正門の前に立つと
「わーっ！　おっきー！　大学って、すっごいねぇ。高校なんかと、全然違う！」

のっけから、あかりは度肝を抜かれたように感心している。
まあ、そう思うのも無理はないか。
俺も受験で初めてやってきた時、そのスケールにビビリまくったもんだ。規模も人間の数も、ダントツに違う。通っているうちにだんだん、それがフツーになっていくんだけどさ。
でかくて自由なのが大学だから、居心地が良くなって朝も晩も居着いてしまう学生が何人もいる。ゼミの研究室なんか、そーいう奴らがゴロゴロしているぞ。
「……中、行こうぜ。いろいろ、見る物はあるんだ」
「うん！」
立っていた守衛さんの傍で物珍しそうに見ていたあかりが返事をした。
守衛さん、幽霊が見えなくて良かったですね。
巨乳の色っぽい幽霊が突然目の前にいるって気がついたら、恐らく腰を抜かしていただろうに。
「やっちー、あれ、誰？　番犬？」
犬じゃない、犬じゃ。ヒトの形してるだろう。
守衛って言えよ。
キャンパスの中に入っていくと
「ひゃーっ……」
あかりがまたびっくりしている。
正門から少し歩いていったところで、最初にどでかい立派な講堂が見えてくる。ここで入学式や卒業式、それとか学祭のイベントなんかをやったりする。そりゃあ、高校の体育館なんかより倍以上もでっかいから、俺も最初はこれに驚いた記憶がある。軽くバスケでもクルーダンスの練習でもできるくらいの大きな中庭が整備されていて、噴水もある。ここでみんな、入学式とか卒業式の記念写真を撮るワケだ。
「わぁ……こんなのがあるのねぇ」
少しあかりの好きなようにさせていると

「――あれ？　ヤスじゃねぇ？」
背後で、聞きなれた声がした。
振り返ると、そこには懐かしい顔！
ヒロじゃないか。
高橋宏幸。俺の、仲のいい友達。同じ学部で、入学してすぐに知り合った。
「おっす。久しぶりだな」
俺が声をかけると
「……お？　おお？　おおお！？　おーっ！！」
ヒロの奴、やったらオーバーリアクションだ。
お、って何回言ってんだよ？
しかも、そのままずざざと後ずさりして行ってるし。
「……おい、ヒロ」
「どーした！？」
「後ろ。……噴水に落ちるなよ」
俺の冷静な指摘で、ヒロは迫り来る危機に気がついたらしい。
だが、ちょっと遅かった。
「うわっ！　ついうっか――」
そのまま噴水の中へ独りバックドロップ！
――しかけたが、ヒロの身体は途中でピタリと静止していた。
あかりがひょいと後ろから支えてやったのだ。
「……？　あれ？　俺、確かに……？」
ヒロのヤツ、噴水の前で不思議そうに首を捻っている。
その後ろで、可笑しそうにケラケラと笑っているあかり。
俺も笑いながら
「ちっとは気をつけろよ。泳ぐ時期はもう過ぎてんだぜ？」
「いやー、すまんすまん。――それよかお前、金は貯まったのか？
修一から、家賃の安いアパートに引っ越したって聞いたけど」
「ああ。それで、何とかなりそうなんで、今日は来たんだ。心配かけたな」

ふっ、とヒロは笑顔になって
「安心した。お前がいなくなっちまったら、俺の代わりに出席とってくれるヤツがいないからな」
俺の価値ってその程度かよ。
そーいうお前はいっつも授業中、どこへフケてやがるんだ。
まあ、いいや。
とかなんとか、ヒロは喜んでくれているようだし。
彼は急に腕時計を見てハッとした顔をした。
「やっべ！　一コマ目、終わっちまう！　ヤス、また後でな！」
ドキューン、と、漫画のジェット機みたいに走り去って行った。
「面白いヒトね」
ゆるゆると近寄ってきたあかりに、俺は
「……サンキュー。あいつ、いいヤツなんだけど、時と所を弁えることなく不必要なリアクションをとるクセが、な」
そのせいで、一緒にいるこっちが恥ずかしくなる場面、多数。
合コンの盛り上げ役で結構引っ張られているらしい。
でも一向に彼女が出来ないでいるのは、多分やりすぎるからだろうな。最初は面白いけど、そのうち女の子の方が鬱陶しくなってくるようだ。その気持ち、同感。
「どーいたしまして。あのヒト、やっちーと同じカンジがして、いいヒトみたいだったから」
そういう風に思えるお前もいいヤツなんだぜ、あかり。
彼女はまたくすくすと笑って
「あの人、お笑い芸人でも目指してるの？」
「……いや。素でああいうヤツだ」

キャンバス内をあちこち眺めながらてくてくと歩いて文科系学舎までやってきた俺達。
経済学部とか法学部とかの授業をする大小の教室が入っている建

物で、夕方は各クラブが使用したりしている。学内の建物ではもっともでかくて、ほとんど中心的な存在だな。
学生の間では「万が一の場合はロボットに変形できる」とかいう噂があるが、流しているのは多分コミック同好会とか二次元動画研究会の連中でないかと俺は思っている。あいつらはヒマさえあれば、そんな空想話に花を咲かせたがるからな。
この文科系学舎の前で、もう一人の親友に出会った。
修一といって、俺のボロアパートへの引っ越しを手伝ってくれたヤツだ。
こいつは、さっきのヒロとはちょっと性格が違う。
学舎から出てきて俺を見つけた修一は、傍まで寄ってくるなりいきなり握手をして
「お前、ガッコー来て大丈夫なのか？　授業料、都合しなきゃって……」
みんな、俺に関して得ている情報は同一だから、言われる事も一緒。
「ああ、とりあえず、何とかなりそうなんだ。心配かけたな」
「構わないさ。復帰できてよかったよ。――それよか、お前のいない間になぁ」
修一は律儀に、ゼミの申込みだの単位取得のことだの事務的に必要な話を幾つか詳しく教えてくれた。こいつみたいに事務をきちんとやる友達がいると、大いに助かるものだ。うっかりすると、致命的な事態に発展することもあるしな。その点、修一に聞いておけばどういう抜かりもない。
「三年生からゼミが必修だから、選んでおいた方がいいぞ。人気のあるところは定員超えちゃうから、試験を課しているところもあるし」
そーかそーか。いいことを聞いたぞ。さすがは修一。
そのあと、修一は
「それと、これは全然関係ないんだけどさ」ちょっと声を落として

「……お前、イッコ上の鮎川美佐子って、知ってるか？」
鮎川美佐子。
直接の面識はないが、その存在は知っている。
とんでもない金持ちのお嬢様で、とんでもない美人で、学生自治会長。
そういう人の噂は、不思議と学内に広まるものだ。実家が多少裕福、という学生は幾らでもいるが、この鮎川美佐子クラスってのはそうそういないだろう。親父さんがなんたらいうでかい会社の会長で、他にも幾つか経営している会社があるとかなんとか。
はーっ。
えーと。
○ウルソサイエティとか○ニバーサルセンチュリー的な世界のお話しでしょうか？
理解不能。○考停止！
どーやったら、そーいう境涯に生まれつくことができるんだろう。
俺もようやく○解できたけど、それでこのレベルだよ。
っていうのはさておき。
しかし、今はそうではなくなっていた。
というのは、彼女は既に生きているのがやっとという状況に追い込まれていたからだ。聞いた話だから真偽の程は知らないが、その噂が広まるのと時を同じくしてキャンパスから彼女は姿を消していた。だから、真相なのだろう。
事故に遭ったという。
大学から帰宅する途中、車にはねられたらしいのだ。
でも、そこから先がどうなったのかは、俺は知らない。数ヶ月前から俺は退学の危機に瀕していて、学校にはきていなかったから。
修一が今話そうとしているのは、そのあたりの時期のことのようだ。
「すっかり治って、また学校に来てるんだけど……その」
様子が変だ、と彼は言う。

自治会に所属している知人の話では、復帰してきてからの彼女は妙に言葉遣いが下品になり、ちょっとしたことで腹を立ててはすぐミーティングを出て行ってしまうらしい。服装もいきなり派手になって、水商売のねーちゃんかと思うような格好をしているという。何よりもっとも大きな変化というのは――学内の事を打ち合わせしようとしても、全然とんちんかんな発言しかしなくなってしまったというのだ。ほとんど知識ゼロとしか思われないらしい。

「そういう人じゃなかったって、いうんだけどな」

事故に遭う前の鮎川美佐子は冷静で頭のキレがよく、的確な判断と指示で学内の懸案事項を片付けていくような人だったという。

「ふーん」

正直、俺にとって彼女の話題はあんまり関心がない。

縁もゆかりもないし、自治会自体、どっかの優秀な学生のたかり場としか思っていなかったから。まあ、俺がバイト漬けになっていたというせいでもあるんだけど。

で？　鮎川美佐子の話というのは、何か含みがあるのか？

「……いや。今、学内でもっぱら噂になっているから、な。お前、しばらく来てなかったから、そういうトピックスも教えておこうかなと」

やることがカタいぜ、修一は。

そこまで気をつけてくれたのか。

「サンキュー。大いに助かったぜ」

「少し落ち着いたら、どっかに集まって飲み会でもやろう。じゃあな」

何となく、また学校に来て良かったな、というほんわか温かい気分になった俺。

やっぱ、友達はいいよな。

そういや、あかりにはそういう友達はいたんだろうか。

あんまり訊いちゃいけないような気がするから、訊かないけどさ。

――さて。

一番重要な目的を果たしに行くとするか。
行く先は、文化系学舎内にある学生課窓口。
ここで、俺のこれからの学生生活と、世界の平和がかかった授業料を支払う！
学生課の窓口へ行くと、いつものオバサンが座っていた。
メガネかけていて、髪の毛の長さが中途半端で、あんまり冗談通じなさそうで「私がこの大学の窓口よ！」みたいな雰囲気全開のオバサン。
この眼鏡のおばちゃんに、俺は今まで何度も頭を下げている。
授業料支払期限を何とか引き延ばしてくれている、言ってみれば防波堤おばさん。しかし、そろそろ限界がきていたらしく、決壊まで秒読み段階にはいっていたというワケだ。
「あのー……」
話しかけた俺を、オバサンは眼鏡の奥からじっと見て
「ああ、あなたね。待っていたわよ。――はいこれ」
??
はいこれって――退学申請の用紙かよ！
ちょっと待て！
いきなり死刑宣告する前に、こっちの話を聞け！
「あの、その、事情が変わりましてですね、その――」
俺が差し出した現金の封筒を見た瞬間、おばちゃんの顔色がリトマス試験紙のように変化し
「ええっ！？　いけませんよ、そんなことは！」
「……？」
「いますぐ、警察に行ってきちんと自首なさい。自分から申し出れば、悪いようにはならないから。ね？」
おばちゃんの顔は、明らかに俺を哀れんでいる。
おい！
誰がドロボーとか強盗で金を都合したなんて言った！？
あんた新聞読んでねーのか！　窃盗事件も強盗事件も起きてませ

んから！
まあ、今まで一銭の金すら持ってなかった俺が急に大金を持ってきたものだから、このオバサンはこの場では必要性ゼロの想像力を働かせたに違いない。
ビンボー人→急に金なんか稼げない→ここは一つ犯罪でも→大金、的な？
そんな想像、要らねぇよ！
オバはん、失礼だな！
それにしても失礼だな！
俺が自力で稼いだ金じゃないけどよ。
少なくとも、アヤしい金じゃないんだ。きれいな金だ。トメ婆さんの心だ！　世界遺産だ！
ともかくも、誤解を解かねば。放っておいたらこのオバサン、勝手に１１０番すると予想される。
ってか、そこ！　何で電話に手をかけている！？
フネ婆さんだのトメ婆さんという存在の説明から始めるのは完全に面倒くさいので、俺は
「あの、これはですね――」
こっからは、俺のイマジネーションワールド。
いいバイト先が見つかって、そこの責任者がすごくいい人で、俺が授業料払えなくて困っているという話を切々と聞かせたら「そぉか。それは大変じゃないか」といって、数か月分を前借させてくれた――と、俺はオバサンに語って聞かせた。
けっこー無理があるが、この広い世界には、そーいう美談の一つもあるんだ！　……多分。
話を聞き終えたオバサンはじっと俺の顔を見ていた。
う、疑っていらっしゃいます？
ですよね。
ウソだもん。
やっぱり警察を呼ばれるのかと思っていると、

「……わかりました。では、今年度分はこれで納入になりましたから、退学勧告は取り消しです。うかうかしていると来年度分の納期もやってきますから、計画的に貯金するようにお願いします」
と、とおった……。
わかりましたわかりました。
ってかよくわかりませんが、計画的にしときます。計画的なご利用と返済、じゃなくて、マイオーナー・トメを計画的に大切に労わっておきますから。
オバサンは極めて事務的に現金を数えてから、極めて事務的に領収証を発行しつつ
「……ああ、今日は雨が降るのかしら」
呟いてやがる。
やかましい。
あんたなんか、学生の間で何て呼ばれてるのか知ってんのか？
狛犬、シーサー、鬼瓦、トドメに○クレロ。全部人間じゃねぇよ。○ビルアーマーまで混じってるし。……名付け親は誰なんだ？
まあいいや。
これで晴れて――。
あかりがくるりんと一回転して俺の前にきて
「……良かったね、やっちー！」
「ああ」
悲願の退学回避！　幽霊だけど可愛い女の子にも「良かったね」って言ってもらえたし！
俺は思いっきり叫びたい気分で一杯だ。
ざまあみやがれ！
雨でも雪でもヤリでも勝手に降りやがれ！　どっさり降れ！　たーんと降れ！
訂正。
……学生課のおばちゃんの頭の上に降れ。

今さら授業に出るのも何だし、俺はあかりを連れてキャンパスをあちこち歩き回っていた。
大学なんて場所に足を踏み入れたことのないあかりは、見るものが何でも珍しいようだ。
「ねぇねぇ、アレ、何？」
「この建物は何やってるトコ？　やっちーは行かないの？」
子供みたいに次々質問してくるのを、俺ははいはいと答えている。
もしあかりが死なずに済んで母親が男狂いの借金バカじゃなかったら、大学だって来れたかもしれない。でも、大学のだの字も関わりあえないまま終わってしまった。次の人生で大学へ行けるタイミングが巡ってくるのを待つしかない。
ちょっと、切ない。
せめて、こういう学びの場所もあるんだって、教えてやりたいと俺は思っている。
午前中2コマ目の授業をやっている時間帯だから、学生はちらほらとしか歩いていない。
だから、あかりと喋っていても誰からも不審に思われないし。
人の多い時間だったら、ちょっと閉口したかもな。
この大学には、正門と裏門がある。
正門は国道なんたら号線っていう大きな道路に面して造られているが、反対側にも道路があって、これに面した入り口も設けられている。そっち方面からくる学生の通学とか業者の出入の利便性を考えて、できたらしい。俺はあんまり使う用事なんてなかったけどさ。
正門ほど立派じゃないけど、簡単な駐停車スペースとかあるし、守衛さんもいる。
「へぇー。このガッコー、入り口が二つあるのね。あたしが行った高校は、正門イッコしかないから、遅刻したらすぐバレちゃって」
まあ、そうだろう。
高校なんかに幾つも入り口作ったら、遅刻早退やり放題だよ。俺

はやらなかったけど。
スペースが広いから、あかりはそのあたりをふわふわとのんびり行ったり来たりしている。
俺は道端のベンチに腰を下ろしてぼへーっとしていた。
見れば、男子学生が三人ばかり佇んでいる。みんな、落ち着かなさそうにしきりと何か話し合っては時計をみたり道路の向こう側に目をやったりしている。
その時、門の前にやったら高そうな、ええと、高級車っていうのか？　が、停まった。
途端に男子学生達がそっちへ駆け寄って行き、後部座席のドアを開けた。
ＶＩＰでも来たのか、と俺は思った。
ほんの時々だが、学長とかに会いに、政治家とか有名な学者とかが来校することもある。
が、降りてきたのは若い女性だった。
パーマのかかった、キツい茶色のロングヘアー。芸能人みたいにサングラスなんかかけて、その下の形のいい唇は激しく赤い。何色のルージュだよ。でも、顔は小さいし遠めにも肌がキレい。これはかなりの美人に違いない。
服装はといえば、どっかのでかい会社の秘書みたいに高そうなスーツっぽい上着に、脚がすっかり露出しちゃってる程のミニスカートなんか穿いている。ハンドバックなんかも、とんでもなく高級そうだ。あれって、なんたらいうブランドでなかったっけ？
ああ、と俺は内心で理解した。
あれが、噂に聞いていた鮎川美佐子だろう。
確かに、取り巻きの男子学生を三人ばかり連れて歩いている。
いつの間にか、あかりが俺の傍にやってきて、一緒にその光景を眺めていた。
「……やっちー、あれ、有名人？」
「いや。多分、修一が言ってた、鮎川美佐子ってヤツじゃないかと

思うけど」
などと二人で話していると、彼女が急にこっちを見て立ち止まった。
「……？」
なんだなんだ？　俺の顔に何か、ついていたか？
背後にあかりは憑いているけどよ。
もしかして――見えてる？
鮎川美佐子は取り巻き男に「先に行って」的な仕草をすると、つかつかとこっちに向かってきた。
なんか、妙な威圧感があるぞ。
本人、というよりも「私ってお金持ち！」的なオーラがな。ビンボー人は、これに弱い。
俺達とちょっと離れた位置で、彼女はピタリと脚を停めた。
ほんのちょっと間があったあと、ツン！　っていう笑いを浮かべて
「――久しぶりね」
は？　久しぶり？
ああたのコトは噂で聞いていたけど、残念ながら面識は1グラムもありませんぜ。しかも、ツンデレだっていうハナシもね。
俺が黙ってヘンな顔をしていると、鮎川美佐子はピッと指をさした。
「そこにいるの、見えてるわよ。まだ幽霊なんかやってたのね、あかりってば」
！？
指されたのは、俺じゃない。
俺の斜め上。
その先にいるのは誰でもない、あかりだ。
み、見えてる。この女……。
あかりはじーっと鮎川美佐子の顔を見つめていたが
「……誰？　あたし、アンタのコト、知らないケド」
胡散臭そうに言ったものだ。

そりゃあそうだろう。
鮎川美佐子があかりのことを知っている筈が……多分、ない。
過去に接点があったとしたら、俺の方が驚くぜ。
すると、サングラスを外して
「相変わらず、ニブい女ね、あんたって」
明らかにフン、という見下した態度をバージョンアップさせた鮎川美佐子は
「ミエコ、って言ったらわかるよね？　西高にいた、ミエコよ。忘れたん？」
忘れたん？　とか言われても、俺は忘れようがない。しらねーもの。
ってか、話しかけられているのは俺じゃないか。
――それよりも、この女、何言ってんだ？？
鮎川美佐子だろ、お前？
修一が言ってたな。
様子が変になったって。
アタマでも打ったんか？　自分の名前間違えるなんてよ。
が、背後にいるあかりは、明らかにそれまでの無邪気な様子とは違っていた。
「ミエコ……？　あんた、ミエコなの？　何で！？　何でよ！」
顔をこわばらせているあかり。
？？
イミがわからない。
俺の目の前のタカビー女、どう見たって鮎川美佐子だろ？
ミエコって何だよ？　鮎川美佐子の夜の名前か？　お水のバイトなんかやってんのか？　金持ちのクセに。そーいや、格好がお水くさいもんな。そのほとんど丈のないミニスカートといい、学生にあり得ない高そうなハンドバックといい。そういうことか？
頭の中がぐっちゃぐちゃに混乱していると、
「見つけちゃった。この女のカ・ラ・ダ。鮎川美佐子っていうの、

この人？　男に振られて生きる気なくしちゃってんだもん。幾ら身体が治ったって、魂が還ってこなきゃダメでしょ？　……だから、イっちゃったみたい、あっちの世界に。それでいただき、ってワケ。すごいでしょー？　ちょっと歳くってるけど、顔もカラダもまあまあだし、家はお金持ちだし」

なぁにぃ！？

何だそれ！？

もう一度訊くけど、何だそれ！？

アリかよ、アリなのか、そんなコト！？

「アンタ、いつまで幽霊やってんの？　そんなビンボーくさい男なんかにくっついてっから、いつまでたっても万年ユーレイなのよ」

勝ち誇ってやがる。

悪かったな。

俺はビンボーくさいんじゃなくて、ビンボーそのものだよ。

訂正してやる。

が、あかりにとっては晴天の霹靂だ。

「……アンタ、その人に憑いて魂を追い出したっていうの？」

「ちっちっ……バーカ。ハナシ聞いてたぁ？　鮎川美佐子の魂は、自分から人生やめたんだっつーの。ハイジャックしたみたいな言い方、やめてくんない？」

ハイジャックじゃないけど、モズとカッコウの関係そのものじゃないか。

金持ちの家に生まれた鮎川美佐子は、こんな下品ではなかったに違いない。

同じ肉体でも、入る魂が違えば、こんなにも変わるもんなのか。

たださえ扱いに困る女だが、この後が最悪だった。

「アタシはあんたと違うのよ。あんたは男に犯されたっつって勝手に自殺こいただけじゃん。アタシは生きたかったけど、事故に遭っちゃった。……だから、人生やり直す権利があるのよ、アタシにはね」

おいおい。
なんちゅーこと言うんだ、この女。
俺は聞いているうちに、ぶん殴りたいくらい腹が立ってきた。
自殺こいたとか、簡単に言うんじゃねぇよ！　お前だって、事故って死んでドンくささ丸出しだろう！
それに。
あかりが男に犯されたってお前はさらっと言うけど、その時のあかりの辛くて悲しい気持ちがわかるのか！
とはいえ、俺は口も利けずに怒りに震えながら突っ立っているしかない。
ちょっとでも動けば――このクソ最低な酔っ払いのゲロ同然な女を殴るか蹴り飛ばすか、しかねなかった。
幽霊とはいっても、あかりが明らかに青ざめているのが見てわかった。
こんな暴言ぶちまけられちゃ、聖徳太子だろうが孔子だろうが平然となんかしてられるモノじゃないぜ。
すっかり調子にのったミエコはさっさっと面倒くさげに手を振ると
「じゃーねー。万年ユーレー、あっかりちゃーん」
肩で風を切って立ち去っていく鮎川美佐子、もといミエコの背中を、俺達は呆然と見送っていた。
「……何だ、あいつは？」
姿が遠くに見えなくなった頃、ようやく俺は口を開いた。
「あたしとおんなじガッコーにいたの。すっごいワガママで女子からは嫌われてたんだけど、カオが可愛い系だったから、次から次と男が寄ってきてた」
あかりの声は打って変わって低く、沈んでいた。
さっきまで、初めて大学に来たっていって、あんなにはしゃいでいたのに。
「しっかし、なんだよあいつ。あんな言い方はねぇだろう」
やっぱり、二・三発ケリでもいれておけば良かった。

「あたしがあのボロアパートに憑くようになってからよ。さまよってるあいつとカチ合ったことがあるの。あいつ『あたしは絶対にカラダを見つけてもう一度人生やり直すんだから』って言ってた。そんときも、あたしがボロアパートにいるのがなんだかんだって、さんざんなコト言われたわ。でも――見つけること、出来たんだ。カラダ」

あかりは、すっかりしょんぼりとしてしまった。

自分は幽霊のまま、だけどミエコって女は魂を受け入れるカラダを見つけられた。

ショックだろうな。

確かにあかりは自殺、あの女は事故死だったから、どっちが生まれ変わる権利あるかっていったら、ちょっと不利ではあるかも。

でも、あかりは死んだ当時とは少しづつ変わってきているし、その頃とは環境が全然違う。トメ婆さんとかフネ婆さんっていう人生経験豊富な力強い味方もいて、俺もいるし――もしも、使えるカラダがここにあるなら、彼女だってもう一度、生きたいよな。

どういう慰めの言葉をかけていいのか、わからない俺。

だけど――一つだけ、俺は気がついた。

修一の言葉が、俺の頭の中で繰り返されている。

カラダが手にはいること、イコールめでたしなんかじゃない。

「……なあ、あかり」

「……何？」

「あいつ、苦労するぞ。鮎川美佐子の人生なんか、ヤメたいって思うだろうな。絶対に」

「……？」

そんな予言めいた言い方にあかりはちょっと驚いたらしく、目を丸くして俺の顔をしげしげと眺めている。

俺は続きを言わないで、すたすたと歩き出した。

もし、絶対の理由が俺にあるなら、すぐにも続きをあかりに伝えてやりたい。でも、俺の憶測だから、言ったところであかりにとっ

て何の救いにもならない。悔しいけれど。
そう思ったら、腹の底で怒りが収まらねぇ。
おい、神、仏。
もしいたら、耳ほじくって聞きやがれ。
――きちんと人事評価しろよな。舐めたマネしてんじゃねーぞ。

部屋に戻ってきてからも、あかりはずっと浮かない顔をしていた。
その気持ち、俺には手に取るようにわかっている。
――あんなもの見せられちまったらな。
かける言葉も見つからない俺は、黙ってトメ婆さん邸物置にあった錆び鎌を研いでいる。
「ねぇ、やっちー」
声をかけられた俺は鎌研ぎの手を停めて、あかりの方を見た。
うなだれて床にぺたりとへたりこんでいる。
彼女はちょっと黙ったあと、思い切ったような調子で
「……あたし、早まっちゃったのかな？」
それを聞いた瞬間、ハッとした俺。
あかりのヤツ、そこまで思い詰めていたのか。
「もし、ほんの少しだけ、あの時辛抱していたら、もしかしたらやっちーに出会えていて、それで――」
思わず、馬鹿野郎、と言い掛けた俺。
そう言ってしまう代わりに、俺は――あかりを抱き締めていた。
何でもいいから、とにかく何かしてやらなかったら、あかりはきっと――近いうちに俺の前から消えていってしまうんじゃないかって、そんな気がしたから。
あかりは、嫌がらなかった。
黙って俺の胸に寄せられてきて、そして……泣いていた。いつまでも。
可哀相に。

ツラいよな。
だけど――だけどな！
もしかしたら、なんてことはなかったんだ！　絶対に！
絶対にな！
人間、その時その状況でしか、生きていくことはできないんだよ。
もしもなんて、それを言っちまったら、あかり。
俺は――その時苦しんでいるお前を助けてやれなかったんだぜ？
あかりは泣きやまない。
彼女の冷たくて華奢な身体を、両腕で抱きとめ続けている俺。
いいよ。
一晩でも三日でもひと月でも、俺はお前の気が済むまで付き合うよ。悔しいけど、それしかできない。
俺は今日、九回裏ツーアウトから三連続デッドボールの後に逆転満塁サヨナラホームランでめでたしめでたしだけど、あかりはその逆だ。
よりによって、酔っ払いのゲロみたいな下らない、大して社会に必要もなさそうな女が彼女を出し抜いて、自分の身体を手に入れていたなんて。
幽霊がもう一度人間をやり直す？
あり？　それって、アリかよ！？
神様、仏様、トメ婆……は放っておくとして、全世界の自称霊能者の皆さん、どう思われますか！？　今すぐ俺の元に集結して会議を開いていただきたい！
そんな役立たず共のことはいい。
ってか、不可解なのはあの「肉体リサイクル現象」だ。
あのミエコって女に出来たのなら、あかりにも可能なんだろう。
諦めるのは早い？　あかりも、もしかしたら――。
だけど、基本的な大問題。
――カラダが要る。あかりっていう魂が、もう一度人生をやり直すためには。

たった一つでいいけど、その一つったってそこらへんに簡単にあるような代物じゃない。何たって、人間のカラダだからな。
あかりのための、カラダ。
ジジでもババでも幼児でも、何でもいいってワケじゃない。
彼女が本当に望む状態。
若くて、健康で、周りにバカな大人がいなくて、そして――女の子。
正直、難しすぎる。
そんな完璧な状態の肉体だけ残っていて、魂だけ「もう結構です」なんて都合のいい話が、どこに転がっている？　俺が思うに、鮎川美佐子はたまたまだ。きっと、プライドが〇浜ランドマークタワーよりも高かったんだろうな。彼女はたった一回の失恋で自分を全否定されたと思って生きることを諦めちまったらしいが、フツーの人間だったらそうはならないぞ。例え事故って大怪我したって、本人は「生きたい！」って望む筈だぜ。
金持ちだからって、全部完全にできてるんじゃないってコトだ。
逆に、あっけなく脆いものをあるんだな。フツーじゃ考えられないような。
それにしても――ハードル高い。
砂浜から、ほんの一粒の砂だけを見つけるようなものだ。見つかるとすれば、奇跡に近い。いや、奇跡。
だったら、せめて、ほんっとにせめて。
できるものなら、替わってやりたい、あかりと。
俺は気が遠くなる程の強さで、そう思った。
本当に、ないんだろうか。その方法。
そんなコトを考え始めた瞬間だった。
それまで俺の胸の中でしくしくと泣いていたあかりが急に顔を上げて
「……やっちー、駄目だよ！？」
ガラにもなく強い声だ。

会ってから今まで、こんな態度は一回もなかったのに。パンツを見られようとアホ扱いされようと。
とにかく一瞬ビビっちまったほど、あかりは怖いカオをしていた。
あかりは有無を言わせない感じで、ぐいと俺の身体を押してきた。
そのまま腰でずるずると後退りして、壁に押し付けられてしまった。
すると彼女はほとんどキスするくらいのぎりぎりまで顔を近づけてきて、こう言った。
「そんなこと考えちゃ駄目！　マジで！　――本当に、なっちゃうんだから」

その7　ココロとカラダと

おいおい。
何だよ、あかりのこの鬼気漂うシリアスさは。
俺はまだ何にも言ってないのに。
まだ何も言ってなかったけど――すっかりそう書いてあったんだろうな、俺のカオに。油性マジックペンよりも、もっと強力な何かでな。それくらい、スプーン程度ならあっけなく曲がってしまったくらい、すっげー強く思ったコトだけは間違いない。
だってよ。
何とかしてやりたいじゃねぇかよ！
こんなに健気で可愛くて、なのに周りにいたヤツが馬鹿で自分勝手で終わっててどうしようもなかったばっかりに、人生を失わなければならなかったあかりのコトをさ！
まあ、ホントにカオに書いてあったかどうかは別として、俺がそういう顔をしていたばっかりに、あかりにはわかったんだろうな。
「……」
何か言おうと思っても、あかりの視線が瞬きもしないで俺の目を見ているから、言葉がでてこない。ヘビに睨まれたカエル的状態。
「……約束して」
あかり、再び大接近。
顔と顔の距離、１センチもない。
「約束？」
「もう、そんなコト、考えたりしないって」
めっちゃ真面目。
初めてあかりのことを「怖い」と思った。
幽霊だからじゃない。このコの「そうなって欲しくない！」っていう、強い思い。
怖い顔つくりながらも、あかりはなんか泣きそうになってるし。

そういう時の情けないカエルは「うん」って返事するしか出来ないよ。
「……わかった。お前がそう望むなら、それだけは、もう」
頷いたら、俺の額があかりのそれにこつんとぶつかった。
「……なら、いいよ。約束だからね？」
やっと、笑ってくれた。
あの衝撃な出来事以来、初めて笑ったあかり。
笑顔のないあかりは、あかりじゃないみたいだ。
「鮎川美佐子も、そうだって言うのか？」
訊いてみると、彼女はふっと目をそらして、こんな話をし始めた。
「……どっかで会った、あたしより年上の幽霊の女の人に聞いたことがあるの。フツーの人があんまり生きる意欲がなくって、取り憑いている幽霊の念がそれ以上に強ければ、その人の身体を乗っ取ってしまうことがあるって。今日会ったやっちーのガッコーの女の人も、そういうことなのね。だから、ミエコみたいなバカ女に身体を盗られてしまったのよ」
「カラダを盗られた人って……死ぬのか？」
「わからない。でもこの世に、幽霊になっちゃうくらいの強い未練がないなら、死ぬしかないと思うよ」
俺、納得。
別に何の根拠もないってばないけど、あかりの言う通りなんだろう。
人は、生きたいから生きる。
どんなにビンボーだって、友達がいなくたって、借金抱えていたって。
生きる意欲のないヤツは、身体が健康でも、死んでるみたいに生気がなくなっちまう。自殺するちょっと前の俺のオヤジがそうだった。
鮎川美佐子も、きっとそうだったんだろう。本気で好きになった男に捨てられて、相当落ち込んでいたっていうし。たまたま事故っ

たばっかりに魂が身体から抜けたんだろうけど、そうでなかったら早いうちに、彼女は自殺していたんじゃないだろうか。
なんなんだろうね。鮎川美佐子もミエコもプライドプライド。異種格闘技の宣伝じゃないんだからさ。
俺はビンボー人だし、プライドなんかにこだわってたら即死だったよ。
ま、鮎川美佐子の場合はどうかわからない。
一言で言って「打たれ弱かった」ってことかも知れないし。例えばレベルが上がって攻撃力とか魔法とかすごくなっても、魂の守備力とHPが○ライム並みだったということか？　結局、財産が幾らあったって、魂は1ミリも鍛えられない。
事情はどうあれ、ともかくも鮎川美佐子は……死んでしまった。
あんなバカ女に自分のカラダを利用されているって、理解できたんだろうか。
してないよな、多分。
不幸な結末。
「でもね」
「ん？」
「自分のカラダ手に入れたミエコにあんなこと言われてすっごいショックだったけど、やっちーが『自分と変わってやりたい』って、そこまで強く思ってくれて」
と――気がついたらあかりのヤツ、目が涙でウルウルになってんじゃねぇか。
「……とっても嬉しかったの、あたし」
涙がこぼれて頬を伝っていった。くすんくすん、ってしゃくり上げてるよ。
お前がどんなに辛くても、俺はそう思うことしかできなかったんだけどな。
それというのもあかり。お前が俺のために色んなコト、考えたり悩んでくれたからだぞ？

逆に応えてやりたいって、思わないヤツがいたら――人間でも幽霊でもねぇ。ゴミ未満。収集所に出しても「これは出せません」ってシール貼られるだけ。まぁ、それはいいや。
俺の気持ちを素直に喜んでくれたあかり。
ヤバいぞ。
どすうっ！　って、心に矢が深々と突き刺さってる。
俺、あかりの可愛らしさにぶちのめされちまった。今さらながら何だけど。
すると！
あかりは涙を拭おうともしないで、ゆっくりと自分の両腕を俺の首に回しながら微笑んで見せた。
そして。
「……何にもできないダメ幽霊の、気持ちね」
地球上に人類は六十億人いるそうだが、こんな体験をしたのはこの俺くらいだろう。
幽霊と、いや――世界一可愛い女の子とのキス。

俺は誓った。
必ず、あかりにふさわしい、彼女がもう一度人生をやりなおすための、身体を見つけてやるんだと。
無茶？
無茶だろうと〇藤茶だろうと結構！
こうなった以上、どうしようもないじゃないか。
幽霊だろうとなんだろうと、あかりを好きになってしまったんだし。
――好き。
……好き？
うん、好きだ。
そこで自問自答してどーする。

照れ隠しだ、照れ隠し。

翌朝。

時間になっても布団に寝転がったままの俺の上を、あかりがふわふわと漂いながら

「ねぇねぇやっちー！　どーしたの？　そろそろ、ガッコー行く時間じゃないのぉ？」

「……いいんだ。今日は、トメ婆さんちの掃除の続きをするから」

百パーセントだるそうに答えた俺。

確かに、だるいよ。

身体中のエネルギー、全部脳みそに集めてんだからな。今の俺の頭、○ランザムモード。すごい勢いであれこれと考えている。耳の穴からだらだらーっと○N粒子が漏れてきそうだ。

だけど、浮かんでくるアイデアはどれもイマイチ。あり得ない想像だけが次から次へと湧いて出てきては消滅していく。

うーん。

カラダ。

どこにあるってんだ？　若い女の子の――いやいや、なんか誤解を招きそうなこのニュアンス、よろしくないな。言い直そう。あかりの魂が入るにふさわしい肉体、だ。

といっても、やっぱり考えつくモンじゃない。

――フツーはこういうコト、考える筈がないしな。

魂の入っていない肉体のあるところ。

牛とか豚とか鳥じゃなくて、人間の。

いつまで経っても起き上がらないってんで、あかりはすっと降りてきて転がっている俺の上に馬乗りに座った。

――見てないんだな、今回は。

ずっと天井を睨んで考え事しているから。

パンツなんかより、夕べのキスの方がずっとシビレたよ。

「今日はおばさん、病院に行く日だから、家に誰もいなくなっちゃうね。カギ、預かってる？」
病院ね。いってらっしゃい。
あかりも、いろいろ管理人さん的に気になるみたいだ。
少しづつ〇無〇子さんの雰囲気が出てきたな。
すっげー可愛いしロングヘアーだから、エプロンして竹ぼうきなんか持たせたら、スペシャル似合うだろう。
それで「〇張ってくださいね！」とか応援されたら――ああ、また余計な妄想が。あかりを使って〇スプレ妄想しているようじゃ、俺の〇ランザムも大したことないな。
カギはあるよ。トメ婆さんはそこらの年寄りと違って家にタンス預金なんかしないから、仮にドロボーがやってきたって無駄な骨折りだけど。ってか、床が腐ってる部屋があった筈だな。ドロボーの奴、ハマって脱出不可能になって……って、今度は何でドロボーのコトばっかり考えてんだ、俺は。
……ん？
病院？
そういえば。
俺はふと思い出していた。
すぐ傍にあるじゃないかよ。そこら辺の病院に行って「要らないカラダある？」とか訊いたら速攻簀巻きにされて叩き出されるだろうけど、そう訊いても怒られないところが。
宝くじをはずすくらいの確率でダメかも知れないけど――当たってみるだけ当たってみよう。
うまくいけば、あかりだって。
俺はいきなりがばっと起き上がって
「……あかり、やっぱり学校行くぞ。行けば、なんとかなるかも知れない」
「う、うん」
何のことかわからないあかり、目をぱちくりさせている。

言い忘れていた。
俺の通う大学にも、医学部が存在する。
○大とか○大とかに比べたら、全然しょぼしょぼだけど。
そこにも、一人だけだが親友がいる。
キャンパスの外れの、付属病院に隣接した場所に医学部棟がある。
俺はあかりを連れて、そこへ向かった。
医学部棟の中へ入ると、どーいうワケだか人っ子一人、いやしねぇ。なんで？
人体実験とかされてたり――なワケないけどさ。
しかも暗くて、しんと静まりかえっている。
医学部生の連中、一体どこで授業やってんだ？
「……ねぇやっちー、何ココ？　なぁんか、ブキミ」
あかりのヤツ、おっかながって後ろから俺の首にしっかりとしがみついてやがる。
よしよし。
怖がらなくてもいいぞ。
「ここは、医学部棟。将来医者を目指す、タマゴ達が勉強したり実験したりするところさ」
「ふえぇ……。じゃ、この中で人間を切ったりバラしたりしてるの？」
いや……それはないと思うぞ。多分。
ここは付属病院じゃないから、せいぜい動物くらいじゃないか？
「なァに。医学部棟なんていっつもこんなもんだ」
ひんやりと冷たい彼女の手をそっと握ってやると、あかりはきゅっと強く握り返してきた。
「……ここに、もしかしたらヒントがあるかも知れないんだ。――あかりのための、な」
ちょっと首をむけると、すぐそこにあかりの顔がある。

あかりはこっくりと頷いて
「……うん。ありがと」
俺の首に巻き付いている腕にも、強く力がこもった。
今日はいつもとちょっと違う。
家を出てからずっと、あかりはこの調子だ。背後からべったりくっつきっぱなし。
○ケモンの○カチュー的な観はあるが、あんなネズミもどきと一緒くたにしてはならん。
あかりのおかげで、俺は生活を立て直すことができた。今度は、俺があかりの望みを叶えてやる。
――絶対にな。
あんなタカビー酔っぱらいゲロ級バカ女なんかに負けてたまるか。
確か、研究室のナンバーは……４２４２、だったかな。
４号棟２４２号教室って意味なんだけど、これって偶然か？
死に死に。
あー縁起でもねぇ。○神様が「ういーっす」とか言って現れたらどうしよう？
その気味の悪いナンバーがふられた部屋の前で、こつこつとドアをノックした。
「――どーぞ」
誰かいるな。
「失礼します……」
研究室の中には、男子学生が一人きり。やっぱり暗いぞ。
彼は机にむかって資料に目を通していたが、ゆっくりと視線だけをこちらに向けて
「……ヤスか。久しぶりだな。退学は回避できたのか？」
いたいた。
セージ。
医者を目指しているヤツ。
雰囲気は例えるなら、○ュタイン博士？　別にサディスティック

な奴ではないんだけど、いつも眼鏡がキラーン！　って光っていて、気が付くと独りでぶつぶつ言ってたり、ニヤッと笑ったりしている。医者になって開業しても、患者に猛ダッシュで逃げられそうな感じがしなくもないが。……そうそう。顔にツギハギもないし、ネジも刺さってないぞ。〇威！　ってのも使えないし。〇スプレでやったら似合うかもな。

それでこいつは研究室に籠もりっきりで、滅多に外を出歩かないと仲間内で言われている。

気が付くと、セージがキャンパスを歩いている姿を目撃した覚えがない。

太陽の光を浴びると灰になる、なんて噂もあるけどな。コミ研レベルのしょーもない噂。

ややビビっているあかりの手を握りしめながら、俺はセージの傍へ寄っていった。

「ああ、おかげさまでな。どうにかなったよ」

「そいつは良かった。俺が勧めてやったバイトを引き受けていれば、すんなり片付いたのに」

ニヤリ、とセージは笑った。

冗談じゃない。

以前、確かにセージは金がない俺を哀れんでバイトを紹介してくれたことがある。この野郎が俺に強く勧めてきたのはそう――闇のバイトだった。

一回請けただけでありえない報酬が用意されているらしい。

しかし、だ。

製薬会社が開発した試作品の薬を服用して経過をみるという、別名人体実験なんて言われる完璧にデンジャラスなそのバイト、一体誰がやるっていうんだ？

もしかして、まさかセージの奴、すでに……？

「で、なんかあったのか？　お前が自分からここにくるなんて、滅多にないからな」

それもそうだ。
こんな異次元の世界みたいな場所に、そうそう用事があるモンじゃない。
「……ちょいと相談が、ね。話が話なんで、理解できないかも知れないが――」
「ん？　金以外の相談なら、聞かせてみ」
医学部ってのは、他の学部よりもえらい金がかかる。
医者を志望する連中ってのは割と「パパがドクター！」っていう、いわば二世が多くて、大体金のある奴らばかりだ。が、セージは実家が医者でも何でもなく、どういう動機かは知らないがいきなり医者を志望し、医学部に入ったらしい。あんまり裕福な家でもないっぽくて、本人はバイトしながら勉強もしているというタフなヤツ。
タダでさえ、医学部は大変な筈なのに。
「最初に言っておこう。カネじゃない。……が、あるいはカネより大変な相談だ」
一瞬どうかと迷ったが、セージは「聞いてやる」と言ってくれている。
俺はありのままを話した。
でなけりゃ「カラダを探してる」なんて、相談できるワケがない。死体フェチとか思われるのも心外だしな。幽霊とは恋愛中だが。
あかりのことやら魂のこと、カラダがあればもう一度人生やり直せるというウソのようなホントの話を語って聞かせたあと、俺は「ってこっちゃ。何を夢みてるんだ、と思われるかも知らん。だが、そういういきさつがあって、現に俺は退学まで免れることができたワケだし。……ま、お前が俺の話を信じようと信じまいと、それはお前に任せる」
そこまで言い切った俺の気迫を感じたらしいセージは、下を向いてしばらくじっと考え込んでいた。
やったら長い沈黙だった。
その間、ふわふわとあかりは室内を漂っていたが、陳列してある

標本に近づいていってそれが何物か気が付くたび、独りでビビっていた。その様子が可笑しくて仕方がなかったが、セージがぐっと考え込んでいるんで、笑うに笑えない。
思考フェイズに入ってから、随分時間が経ったように思う。
やがて、ゆらりと顔を上げたセージは
「俺には、お前の言うその女の子の幽霊が見えないから、真実かどうか判断のしようがない」
「……」
そりゃそうだ。
彼にはあかりが見えていない。
お前のすぐ後ろで、内臓の標本見て仰け反ってるけどよ。
あ、今度は眼球とにらめっこしてるぜ。
「ただし」セージは続ける。「お前が訊きたいと思っている質問に対して答える必要はある。もしヤスの言っているコトが俺にわからないだけで本当の事だとするなら、倫理的に問題はあるにしろ、人間一人この世から消えずに済むワケだからな」
ほお。
こいつにしては前向きというか、侠気ある発言をしたものだ。
人並みに人間の赤い血が流れていたんだなぁ。
で？　で？　あかりに相応しいカラダ、あるのか？
セージはくいっと中指でずり落ちた眼鏡を上げた。
その奥で切れ長の目がキラリと光り
「が、ぶっちゃけ言う。医学部にある献体じゃ、どうにもならん」
そうなの？　ダメ？　なんで？
俺の頭上に「？」がつきかけた。
が、セージはさすが医者を目指す秀才だけあって、言うことがテキパキしていて無駄がない。続けて、
「考えてもみろ。付属病院からやってくる献体なんてのは、事故なり病気なり、何らかの形で肉体が破損又は臓器とかが修復不可能なほどに故障しているものばかりだ。要は、魂のステイに耐えられな

いから、死んじまった肉体なんだぜ？　ごく一部はリサイクルされることもあるが、まるまる中古でご利用って訳にはいかねェだろう」
えーと。
表現としてやや不適切で不遜な部分があるようだが。
といって、セージが言っている事はよくわかる。
だよな。
肉体がまだ魂を受け入れるだけ健全なら、その持ち主は死なずに済むって理屈だ。それが不可能になっちまって魂はお逝きになられたから、ここにはその抜け殻だけが献体として集積（……これも不遜な発言か？）されているってコトだ。
こりゃ、モノがあったとしても、とてもじゃないけどあかりが入るべきカラダじゃない。
ツギハギだの内蔵が幾つかないとかじゃ、冗談にもならんよな。
「ハナシはよくわかった。丁寧に説明してもらって、助かった」
「すまんな。医学は人間のためになるものだが、その研究施設は思っているほど美しいものじゃない。……どっちかといえば、ダーティな事ばっかりだ」
なるほど。
セージはセージなりに、色々と思うところがあるんだな。
ただ、最後に彼はこう言ってくれた。
「……ま、付属病院の方で変わった話があったら、その時はこっそり教えてやるよ」
じゃ、失礼するか。
セージのヤツ、忙しいし。
行くぞ、あかり……って、ナニやってんのお前？
骨格標本をつんつんやっていたら倒しかけて、めっちゃ慌ててる。
やめとけよ。
それ、すっげー高いんだからな。
壊したりしたら、トメ婆さんクラスじゃないと弁償できないぜ？

医学部棟を出た俺は、講堂中庭にあるベンチにふんぞり返って空を眺めていた。
「上手くいかねェなぁ……」
さっきから、そればっかりぼやいているな、俺。
「でも、やっちーの友達、みんないい人ね。あのお医者さんも」
あいつはまだ医者じゃないんだ。タマゴだよ、タマゴ。
ふふん、とあかりは微笑した。
「でも、うれしー。やっちー、あたしのコトを思って、動いてくれたんだものね」
昨日よりは、ちょっと回復してくれたみたいだな。
ひょいと俺の膝の上に座って、にこにこしている。これが生身だったら「真っ昼間から授業サボって、何いちゃついてんだ！」って見られるだろうけど、今のあかりは（多分）俺だけにしか見えてないからな。
他人の思いやりとか心がすごくわかって、ありがとうって言えるあかり。だから、めちゃめちゃ可愛い。
ま、行動を起こしてみて良かったよ。
彼女の小さくて綺麗な横顔に見とれていると、
「……そーそー、言い忘れてた」
あかりはポンと手を打って
「魂が抜けて大分経っちゃったらダメなんだ。完全に死んじゃったカラダは、魂が入れないのよ。魂がいなくなってすぐじゃないといけないの」
おおっと。
じゃ、献体なんかじゃダメじゃんか。
そーいう事は、早く思い出せ。
セージが「おお、あるある」とか言ってたら、申し訳のないことになってたじゃないか。
ってか、それじゃあ条件はさらにシビアになったな。

魂が抜けてすぐのカラダ。
つまり「ご臨終です」宣言が発令されて「〇〇ちゃーん！　うえーん！」とかいう嘆きの場面やってるところへ突入していき「このカラダ、いただきぃ！」とかやらにゃならん。んなコトやったら、遺族から袋叩きに遭うだけじゃ済まんぞ。代わりに棺桶にぶちこまれてしまう。
その上、だ。
死んだと思っていた本人が（中身はあかりになるのだが）また動き出したら、それこそ遺族は大パニックだ。〇陽師とか〇界師とか呼ばれ……るハズはないけれど、とにかく遺族とか親類がいない方がいいんだろうな……。
うわー！　いよいよ難しーぞ、こりゃ！
ほんっとーに、なんかねェかなー！
こうなったら仕方がない。ありとあらゆる病院でもしらみつぶしに回ってみるか？
ほんっとになんかのタイミングで、見つかるかも知れない。
時間とか交通費とか、すっげー単位でかかりそうだけど。
俺が取り留めもなくそんなことを考えていると
「ねぇ、やっちー」
あかりはほんわかと微笑んだ。
「……ゆっくり、やろうよ。急がなくたって、いいんだもん」
そうか。
そーだな。
慌てる必要なんかないんだ。
お前と一緒にいることを楽しいって、思えることが大事だものな。

その7　ココロとカラダと（後書き）

ネ小ランに投票してくださった方へ。
この場で篤く御礼申し上げます。
ありがとうございました！

で、一見ラストっぽいですが、まだ続きます。

その8　ミエコの誤算、セージの相談

授業料を支払い、晴れて無罪放免、じゃなかった退学を回避できた俺。

それから2日ばかり、出かけるのはヤメてトメワークに勤しんでいた。

オーナー・トメ邸を美しくキープするのが俺の役割。生活費も出してくれてるし、当然家賃はタダにしてもらっている。せめて、俺にできることはやらせてもらわねば。

とりあえず、トメ婆さん邸の入り口と庭は少し綺麗になったぞ。

腐った雨戸と傷んだ縁側も直したいんだけど、これは大工さんでなくちゃな。

俺じゃ直せない。一方的に破壊してそれまでになっちまう。

金のかかる話だからおっつけトメ婆さんと相談する事にして、次は幽玄荘の方も手をつけることにした。

このボロアパート……いやいや、今や俺の大事な城だ。

そろそろ正式名称で呼ぼう。幽玄荘！

って、このネーミングもどうかと思うけど。中国の秘境かよ。

幽玄荘の裏庭で、これまたデラックスに伸びきった草をむしりながら、俺はずっと考え続けている。

あかりのカラダ。

って、えっちな想像をしてるワケじゃない！　言うまでもなく、あかりが人生やり直すためのカラダをどうやったら見つけられるかってコトだ。そろそろくどい？

だけど、これといったアイデアも浮かんできやしない。

サクサクと草を刈る手だけは動かしながら、あれこれと考えてみるのだが。

お、俺の命の恩人、野いちごだ。

こんなちっぽけな植物だけど、俺を助けてくれたんだよな。十秒

チャージで五分キープ。
残しておくか。
いやいや、でもここをさっぱりさせれば庭の見栄えがよくなる。ここは「ゴメン！」って刈っちゃおうか。雑草は俺みたいに踏まれても刈られてもまた生えてくるから……Ｎｏ！　そんな無慈悲で不知恩なマネができるか！　植物だって大切な生命だ！　しかし、これを目当てにカラスが来ても困るな。
――はっ！　気がつけば余計な事ばっか考えてるし。
もーダメ。今はダメ。
停滞しきった脳みそから人智を超越したグッドアイデアが閃くはずがねぇ。
落ち着け、俺。冷静になれ。○鏡止水の境地だ！　○イパーモードになるんだ！
待てよ。
人間にこだわるから、先に進まないんじゃないか？
人間でなくても人間みたいな存在なら、どうだろう。
○耳娘とか○○耳とか○魚とか、ほとんど人間みたいなモンだぞ。世に蔓延している二次元の完成予想図ではどれもピチピチとした女の子だし、今のあかりみたいに巨○だし、問題ないんじゃないか？
うん、ストライクだ！　これでいこう！
……って、んな存在がこの世にいるかよ！
だーっ！
やっぱりヘン、俺の脳みそ。
「――っちー！　やっちーったらぁ！」
独り悶絶しているところへ、ふわふわとあかりがやってきた。
「……はっ！　何か呼んだか？」
「やっちー、ヘンなことでも考えてたの？　――フネおばさんが来たよ。お昼だって！」
ヘンなこととは何だ！
俺はな、お前のコトを――でなくて、お前のためになることを必

死に考えてたんだぞ。
お前のために、お前のために、その……。
うう。
すまん。
確かに俺は、ヘンな事を考えていた。最低なヤツだ。
「……？　やっちー？　やっちー！　――おーい！」
猛省している俺の目の前で、あかりが不思議そうに手を振っていた。

その日の午後、俺はふと用事を思い出して大学へ出かけた。
ゼミの申込書をもらってこなくちゃならない。
修一が言っていた。三年生になると、ゼミが必修になる、と。放っておいたら、単位未取得で自動的に留年決定になる。これは退学の次に避けたい。
文科系学舎で申込書をもらって少しの間それに目を通したあと
「よし、どれにするかは帰ってからゆっくり考えるか。――あかり、帰ろうぜ」
「ほーい」
まだ幽玄荘裏庭の草むしりが残っている。暗くなる前に帰って続きをやらねば。
で、正門に向かって歩いていると。
講堂の周りにやったら人がいる。
「……お？　今日、なんか催し物があったっけ？」
近くまで寄って行ってよく見たら、これから自治会主催の学生大会があるらしい。俺もよくわからんが、要は大学側への建議とか、学内の懸案事項なんかを広く学生に訴えかけるっていうイベントみたいなもんだ。当然、学生なら誰でも参加ＯＫ。
でも、あんまっつーかキョーミゼロ。
学内のよりも、幽玄荘とトメ邸の懸案事項を片付けなきゃならん

のだ、俺は。
立看板をさらっと見てそこから立ち去ろうとすると
「ねぇねぇ、このイベントに行かないの？」
あかりが立看板を指した。
「イエス。どーせ聞いたって、面白いこたねーもの」
マジでな。
が、あかりは何がいいのか興味があるらしく
「ちょっとだけ、覗いていこーよ。あたし、見てみたーい！」
両手で俺の腕をとって、くいっくいっと引っ張っている。
ほお。
こんなものが見たいのか？
つまんねーぞ？
ヒロのリアクションでも眺めていた方が、十倍くらい面白いかも知れないけど。
「何でこんなモン見たいんだ？」
「だって、高校にはこういう真面目なイベントってなかったもの。学校祭はあったけど、どんちゃん騒ぎして終わりだったし。――これってアレでしょ？　五人くらいで輪になって座って『あなたの言っていることは矛盾している！』『いや、ですから！』『今私が喋っているんだから、聞きなさい！』とかって、スーツ着たオッサン達が口ゲンカするヤツでしょー？」
それ、なんかとカン違いしとるぞ。
○まで○討論じゃないっての。
自○党も○主党もきてませんから。こんなしょぼい大学の片隅で日本の政策を討論されても困っちゃうし。
ってかお前、どうしてそんな暑苦しい番組のことを知ってるんだ？
「あー……でも、裏庭の草むしりがまだ――」
そう言って婉曲に帰ろうという意思表示をして見せると
「じゃ、ちょっとだけ！　ちょっと覗いて、それでかえろー！」
ううむ。

しゃーないな。
そこまで見たいなら、ちょっとだけ、な。
もうすぐ開始時刻だから、待たずに済みそうだし。
「……少しだけだぞ。４５分に来る快速に乗りたいから、それまでに駅に行かなきゃ」
「わーい」
無邪気に喜んでやがる。
こんな味も色気もないイベントを喜んでいる人もいるんだから。
自治会のみなさん、よかったねぇ。
そんなことで、俺は入り口でレジュメをもらって、中へ入った。

パイプ椅子がオニのよーに並べられているが……実際に来ている学生は、半分くらいだろうか。そりゃそうだ。これが「単位あげまーす」とかいうならたちまち授業フケフケ常習犯学生達が殺到して会場は超満員立席御礼キャンセル待ちにでもなるんだろうが、延々と原稿の棒読みを聞かせられるだけじゃあね。わざわざ足を運んでくるヤツの方が珍しいよ。
速攻ずらかるつもりだったから、俺は最後列の端っこの椅子に腰を下ろした。
程なく、ステージ横に司会役の男子学生登場。
『それではこれより、自治会主催学生大会を開催いたします』
ぱち、ぱち、ぱち……。
人数を簡単に数えられるくらい、まばらな拍手。
司会君はすうっと息を吸い込むと、声を励まして
『私達の有意義な学生生活獲得のためには、学生同士が連帯して団結し、その主張を大学側に訴えていく事がもっとも大切であります！』
はぁ。
どっかの労働組合かと思ったぜ。キミ、もしかして〇工船とか、好きでしょ？

俺は内心フッーに白けていたが
「わー！　すごいよ、ねぇ、やっちー！　自分達で学生生活をもぎ取るんだって！」
何がそんなに気に入ったのか、喜んでいるあかり。
うーんとね。間違ってないよ、あかり。間違ってないんだけど――果物じゃないから、もぎ取ってもねぇ。
『このたび、私達自治会では、学生のみなさんの意見を代表して大学側へ○×△□※☆♀――』
途中からどうでもよくなって、俺は全然話を聞いていなかった。
それから五分くらい司会君は決意表明みたいな前フリをやってのけた後
『それではっ！　大学側への要望書原案を、自治会会長・鮎川美佐子よりみなさんへご説明させていただきます。質疑応答の時間は、式次第の最後に設けたいと思いますので、よろしくお願いいたします！』
ぱちぱち、ぱち……。さっきより、一割増しの拍手あり。
いやぁ、見事なバトンタッチですねぇ司会君。キミの熱弁で、拍手も少し増えたみたいだよ。
それよりも、ここで意外な人間が出てくることに俺は若干の興味を抱いた。
鮎川美佐子、いや、ミエコのお出まし。
あいつがこの聴衆を前に、人望の篤かった鮎川美佐子本人を演じきれるのかどうか、見ものだな。
そうしてミエコ、登壇。
あいもかわらず、すげぇ格好。
胸元がばっくり開いたヒョウ柄の服に、丈こそ長いが「……それ、イミあるの？」って訊きたくなるようなキツいスリットが入ったスカート。脚の横が太ももの上まで露出入りました！　うっかり引っかけでもしたら、ビリビリっていって片股間に片尻オープンはカタい。どう考えてもあいつ、水商売系ねーちゃんの化け物にしか見え

んぞ。どこでああいう服を手に入れるんだろうな。
彼女が姿を現した途端、あかりは気持ちの整理がつかないのか、そっと目を反らした。
いいよいいよ。あんなゲロみたいな女を見たら、目がつぶれちまうぞ。ホントにゲロ吐いてしまうかも知れない。見るな見るな。
演台を前に立ったミエコ、ぺこりとテキトーに頭を下げた。
で、ポケットをごそごそとやっている。
……まだ、やっている。
原稿を探しているのか？
手に持って登壇しろよ。祝辞じゃないんだからさ。
と、ミエコはステージ袖にいた役員らしい男子学生に
「ちょっとー！　原稿忘れたー。持ってきてー！」
おいおい。
この大会で一番大事な原稿を忘れるヤツがあるか。
しかも、マイクのスイッチが入っているんだぞ。スピーカーで筒抜けなんだよ。
この時点で、すでに俺は何事かを予感していた。
慌てて役員の学生が原稿をミエコに渡し、とりあえず窮地脱出。
がさがさと原稿を広げたミエコは、げほげほを咳払いならぬ咳そのものをしたあと
『……ええと、だ、だいがくへの、よ、ようもう、じへい』
？？
今、何て読んだ？
しかも、思いっきりカミカミっす。
『わ、わたし、ったち、が、がくせい、いちお……いちどうは、たっ、たてがくのっ、せい、せいかみを、へ、へいじて、あかるく、あり、いぎな、がっ、がくせいせいかつを、おい、おいもとめする、ためっ――』
みんなざわついている。
そりゃ、そうだ。

自治会会長ともあろう人物が、ろくに原稿も読めないんだからな。つーか、これがもう、爆笑もの。
遠慮のないやつらは、とっくのとうに笑っている。
俺も、腹の皮がおかしくなりそうだよ。
完全にとろけきったミエコのスピーチの一部を取り上げて、ツッコミを入れてみたい。
『ろうくちけした、もんけけぃ、がく、がくしゃ？　ほん、むね、のかい、かいきづ、よう、ようもう……がきを、だいがくがわへてい、でし、じ、ち、かいがぁ、おも……たい、て、てきに○△※□♪した、がっ、がくせいせいかつの、み、みのげんの、ために――』
ろうくちけ？　ここから早くも意味不明。
もんけけぃ？　猿かなんかの生き物か？　うっきー。
ほん、むね……なぜそこで訓読みする？　いきなり高等スキルだな。
かいきづ……怪奇図？　俺のボキャブラリーにはねぇなぁ。
ようもうがき？　だっはっは、食ったら毛の生える柿の一種かい。ていで。ん？　停電？
おも、たい、てき……こんな漢字を読み間違われても、ほとんどツッコミようがないぞ。
○△※□♪って……。読めないからって、テキトーにスルーしやがった。
とどめに「みのげん」かい！　昔話に出てくるじーさんっぽいぞ。ミノを被ったゲンさんがみのげん、みたいな。――これはいかん。あかりにでも言ったが最後、ドン引き決定だ。
手元にレジュメっぽい資料があるんで、大体主旨はわかる。これを元にミエコの言語を日本語に通訳してみると
「老朽化した文化系学舎本棟の改築要望書を大学側へ提出し、自治会が主体的に充実した学生生活の実現のために」
たかがこれだけじゃねぇかよ。なんでこったら中学生レベルの文章を読むのに、般若みたいな形相をせにゃならんのだ。

久々に、これだけ笑わせてもらったぜ。
来て良かった。
あ。
ミエコのヤツ、フリーズしてる。
おーい。
面白いから、早く先読めよ。
すると！
「ああっ、もう！」
突然、ミエコがキレだした。何だ、逆ギレってオチかよ。
ばーんと演台を叩いて
「こんなの、アタシがやんなくたっていいじゃん！　誰かやって！
ねぇ！」
シンと水を打ったように一瞬静まり返る学生達。
すると、ステージ袖にいたメガネをかけた女子学生、ってこいつも自治会役員だろうけど、居たたまれなくなったらしく中央へ飛び出してきた。
「ちょっと！　何やってんですか！？　みんなの前でそんな――」
「知らないわよ、こんなの！　あたし、忙しいの。誰か、やっといて！」
ばさあっと原稿を投げ出し、ミエコはつかつかとステージを降りていった。
メガネはすぐさまその後を追いかけ
「待ってってば！　あなた、会長なんだから！　そんな勝手はないでしょ！」
がっ！　と腕をつかんだ。
それをぶん！　と勢いよく振り払いつつ
「うっせーよ！　あたしの知ったコトか！」
講堂の広い空間にミエコの罵声が轟き渡った。
会場に詰め掛けている学生達、ボーゼン。
おーおーおー。

これがＲＰＧなら、画面の下あたりに「ミエコはしょうたいをあらわした！」とかテロップが流れるところだな。ＢＧＭもエグイやつに変わるわな。
自治会役員は右往左往。
聴衆の学生はどよめいている。要はもう、大混乱。
俺は黙ってその大宴会を眺めている。
見ものだぜ。
俺の予想は、やっぱり外れなかった。
背中にぴったりくっついてふーんってカオをしているあかりに、俺は
「……なぁ、あかり」
「なぁに？」
「アレだ」
「アレ？」
ミエコは、分不相応なカラダを手に入れたばっかりに、ああいう醜態を晒すハメになった。
そりゃあ、そうだろう。
元の鮎川美佐子は秀才で成績抜群、英語とフランス語と、あとなんとか語まで喋れるって話だったし。
だけど、それはカラダの方じゃない。魂の方に蓄積されたデータだ。鮎川美佐子の魂にな。
だから、ミエコが鮎川美佐子のカラダを盗ったからって、秀才ぶりがそのままインストールされるワケないよな。カラダは入れ物だ。本当に大事なのは、そこに入る魂だ。心だ。
あの時、俺が思ったのはそのことだ。
ゲロ女・ミエコは勝ち誇ってあかりをバカにした。ついでに俺のこともな。
でも、ミエコはもっとバカだった。
鮎川美佐子の人生を演じようなんて、逆立ちして町内一周するより至難のワザだぜ。俺ならゴメンだな。人間ってのは、他人の人生

をマネできるほど器用じゃないだろう。まして、ろくに勉強のべの字もなさそうな典型的バカ女子高生が、クールなお嬢様女子学生を演じようなんざ〇億と二千年早いわ。――あれ？　これは何の数字だっけ？

そういうことを、俺はゆっくりとあかりに説明してやった。

すると彼女はみるみる笑顔になって

「……そーだったんだ！　やっちー、すごーい！　そこまでわかってたんだぁ！　あたし、カンドー！」

嬉しそうに俺の首に抱きついてきた。

「ホント、やっちーの言うとーりね。ミエコ、プライドが激高いから、素直にわからないって言えないんだよね。アタマ打っておバカになったフリでもしてれば、まだみんな優しくしてくれたんじゃないのかなぁ」

かもな。

入れ物である鮎川美佐子の顔もスタイルも、言ってみれば極上。おまけに大金持ち。

中に入った魂があかりだったら、きっと今頃みんなにちやほやと可愛がられていただろうに。

でも、良かった。

あかり、もっと元気になった。

こいつはミエコが大勢の前でバカを晒したのを見て「ざまーみろ」的にテンションが上がったんじゃない。それじゃあミエコと一緒になっちまう。

ミエコって奴は思いっきり救いがたいバカで、人類〇完計画でも〇ロレクイエムでも救済は不能だ。それほどのバカだけに――哀れなものだ。自分の向き不向きを理解できないっていうのは、本人がよほど自分と正直に向き合っていない証拠だから、ぶっちゃけ本人の責任。

ただ、３０パーセントくらいは――それが本人の限界である以上、本人でも制御なんかできっこないのだ。そうなると要領か愛嬌でカ

バーするしか手はないけど、ミエコみたいな要領も愛嬌も枯渇した人間じゃあ、明らかに無理だ。今みたいに、醜態曝け出して自滅するよりない。だから、強いて言えば可哀相な人間なのである。
こんなことになった以上はもう、ミエコは学校にはこれないんじゃないだろうか。
俺はそんな気がした。
「……行くか？」
あかりに声をかけてやると
「うん。――やっぱり、○まで○討論みたいだったね？」
だから、違うって。
もしかしてあかり――天然？

あっけなかったなぁ。
人間、分不相応の財産とか地位とか名誉なんか、もつものじゃないね。
待っているのは不幸な結末だけだ。
くわばらくわばら。
やっぱ、最後は魂の良し悪しが全てをキメるってことだよな。
――とはいえ。
それであかりのカラダが見つかったワケでもない。
もう少し、気合入れて探さないとな。
あー、そういや腹減ったなぁ。学食行ってスペシャル特盛りランチでも食っとけばよかった。学生の間ではＳＴＲと呼ばれていて人気がある。生姜焼きにハンバーグに唐揚げのついた豪華三品立て定食！　ってか、頭文字だけとって略する意味、あるのか？
が、もう時間は過ぎてるからアウトだよ。大人しく、幽玄荘へ帰るか。うわー、快速間に合わねぇ。急ぐイミないし。
そんなことで、正門へ向かってぶらぶら歩いていると
「……ヤス！」

見れば、珍しくセージが外を歩いている。
お。雨がぱらついてきた。珍しいコトするからだよ。
彼はサササっと俺の傍に寄ってくるなり
「ちょうど良かった。お前に会ったら、相談したいと思っていたコトがあってな」
「お前が俺に？　珍しいな」
こいつ、ほとんどっていっていいくらい、何でも自分で解決しようとするクセがある。
責任感が強いってのか、はたまた最後に頼るは己のみ、みたいな信念でもあるのかどうか。
そういう奴から相談を受けると、ちょっと誇らしい気分。
ああ、こいつでも俺に幾らか信頼あるんだなぁ、みたいな？
どーせ金でも学問の話でもないから、聞くだけ聞こう。この間はセージ、忙しいのに俺の相談にのってくれたからな。
「立ち話じゃ、なんだ。雨も降ってきたから、そこの喫茶まで付き合ってくれ」
さすがに大学くらいになると、食堂だけでなくて喫茶店めいたものまでキャンパスにある。
俺みたいにビンボーな男子学生なんか金もなけりゃむさ苦しいってんでほとんど近寄らないんだけど。やっぱ、行くのは女子学生ばっかりみたいだ。分厚い小難しい本を持ってコーヒーをずずっ、とかやってると、それなりに「ああ、学生！」的な雰囲気も出るよな。
正門と反対方向に歩き出すと
「……やっちー、いいの？　帰るの、遅れるケド」
「まあ、いいだろう。暗くなる前には帰れると思うから」
俺があかりと話しているところを、セージはちらりと目に入ったらしい。
あかりのことは見えてない……ハズではあるが、
「……今も、いるのか？　お前の言っていた、女の子の霊とやらは、そこに」

真面目な顔で尋ねてきた。
ああ、いるよ。
この前だって、お前の研究室にも行ったんだぜ。あわや、大惨事を引き起こすところだったけどな。それは黙っておこう。
「いえーい！　ゆーれーでーす！」
セージに向かって手を振ったりピースしたりしておどけているあかり。
見えてないから、セージはリアクションのしようもないのだが。
それを承知で、あかりはさんざんふざけて喜んでいる。
こら。
えっちなグラビアアイドルのポーズはよせ。

俺達は喫茶店にやってきた。
○トールみたいに、先に金を払って飲み物を受け取る方式。
「……ヤスはホットでいいのか？」
「ああ」
セージは俺の希望を訊いたあとに
「……お前の連れている幽霊の子は、こういうものは飲めるのか？」
おおっと？
そこまで気を遣いますか、セージさん。
すみませんねぇ。
しかしながら、あかりは一般的な幽霊だから、さすがに飲み食いというアビリティはない。
「いや、人間と違って、飲み食いは不可能なんだ」
「……そうか」
軽く頷いたセージ。
俺、ちょっと嬉しくなった。
こいつ、顔にも言葉にも出してないけど、この間の俺の話を（信じているかどうかは別として）正面から受け止めてくれている。

俺達のやり取りは、当然あかりにもわかっている。
背後から首に抱きつくような恰好で憑いているもんで。
あかりは俺の耳元でそっと囁いた。
「……この人、ちょっとコワい感じだけど、いい人なのねぇ」
そうだ。何考えているか全然見えないだけで、心と赤い血はあるんだぞ。お前の存在だって、きちんと認めてくれているじゃないか。
そういうところにあかりは感心したのかと思っていると
「ちゃんとやっちーの分、オゴってくれてるし」
あら。そっちかよ。
別に俺は俺の分、払う余力はありますけどね。
セージがいいっていうから、そこはそれ。おばちゃんのグループみたいに「いいからいいから！　ここは、あたしがね」「何言ってんのよ、奥さん！　この間だって出したじゃないのよ！　今日は私の番だからね！　はい！」とかいう日本中年女性症候群（オバサンシンドローム）的なみっともない事はせんのだ。そこはビンボーでも誇り高き学生である！
俺達は窓際に据え付けられたカウンターみたいな席に腰を下ろした。
歩道に植わっている木々の緑が、しっとりと雨に濡れている。ちょいと本降りしてきたみたいだな。
フツーの席は、どこもかしも女子学生達がやってきて、占拠されちまってる。
独りで四人がけボックス占領して「ここは私の領土よ！　○島だか○閣諸島だか知らないけど、ここが私のフィールド！」みたいな顔して涼しげにコーヒー飲むのやめなさいね。あなたは映画館でも４つ席を取るのか？　新幹線に乗っても指定席４つ残ってないと「満席か……」
とかってため息つくのか？　ん！？
……まあ、いいや。本題はそこじゃないんだ。
「……んで？　どーかしたのか？
水を向けてやると

「それがな、こういうハナシもなんなんだが――」
コーヒーを一口すすってから、セージは話し始めた。
彼の年上の友人は、付属病院で看護士になるために研修を受けているという。
ある日、一人の女の子が救急搬送されてきた。
両親と共に車で移動中に事故を起こし、両親は即死。その子は重傷を負ったものの、一命は取り留めた。やがて意識は戻り少しづつ怪我も回復してきたが、両親を一気に失ったせいかまるで生気がなく、人形のようにほとんど口をきかなかった。
それから少しして、看護士達が異口同音に夜勤を嫌がるようになった。
深夜に巡回をしていると、女の子の病室からひそひそと話し声が聞こえてくる。
最初はこっそり携帯でもしているかと思われたが、どうも様子が違うと感じた巡回の看護士の一人が、思い切ってドアを開けたところ――青白い、いかにも「霊です」的な中年の男性と女性の姿があった。そして、どういうことか女の子の姿が二つ！　その看護士は恐怖と戦いつつよくよく見ると、片方の姿は眠ったまま、片方はその肉体から這い出してきたようにしている。つまり、その子の魂らしい。
「……どなたですか？　面会時間は過ぎてますよ！」
声をかけると、男性と女性はすっと姿を消し、女の子の魂も肉体に戻っていった。
それ以来、毎晩のように病室に男性と女性の霊が現れ、女の子の肉体からも魂が抜け出るようになったという。ドクターや看護士は「両親だな」という意見で一致した。
両親らしい幽霊が出没するようになって以来、女の子は眠ってばかりいるらしい。不安に思った看護士が呼びかけても、なかなか目を覚まさない。ようやく意識が戻っても、表情がうつろで、何を話しかけても上の空。

女の子の容態が弱っていく一方、夜になると三人の霊と魂は、こともあろうに病棟の廊下を徘徊し始めた。トイレに行こうとした入院患者がそれに出くわして悲鳴を上げ、病棟中が大騒ぎになるようなことも起こりだした。

度胸あるベテラン婦長が彼等の出現を待って「いい加減にしてください！　皆さん、迷惑しているんですよ！」と叱責したところ、形相凄まじく女の子の魂が迫ってきて、これには婦長も肝をつぶしてほうほうの体で逃げた。

「病院側では、すっかり困っているようなんだ。ドクターも看護士もビビっちまってるし、幽霊を見た患者からは病棟変えろだの退院させろだのって苦情も出ているみたいで」

幽霊出たから苦情？

寝言ほざいてるんじゃねぇぞ、患者どもにヘタレ医者ども。

俺なんかどーするんだ。

ババーズ（今思いついた！　トメ&フネをこれからそのように呼称するぞ！）の偽装表示によって、幽霊付の部屋に住むハメになったんだからな。――とか何とか、今やその幽霊と仲良く街の中を歩いちゃって、ついでにキスまでしちゃったりしたけど。

セージはカップを口に運んで一息つき

「……で、お前を思い出した。幽霊と仲良く出来ているみたいだから、病棟をさまよう幽霊連中とどうにか話をつけられるかも知れないな、と」

はは。

なんか、○ーストバスターズとか○S○神の扱いだな。

目には目を、歯には歯を、幽霊には幽霊を、か。随分と短絡的な気がしないでもないが。

どっちでもいいや。

だが、俺が直接その幽霊グループと対話できるかどうかはわからない。ひょっとすると、あかり以外の幽霊な皆様の姿が見えるとは限らないし。

とはいえ、幽霊対幽霊なら、そこは同業者……商売じゃないな。
ま、とにかくお互いにコミュニケーションできそうな感じがなくもない。
ここは一つ、幽霊歴二年という大ベテランであらせられるあかり様のご意見を伺ってみたい！
「……セージ、ちょっとすまん」
「ん？」
俺はくるっと振り返った。
セージには見えていないが、すぐ背後にあかりがいる。
「……だとさ。聞いてた？」
「うん。パパとママの魂に未練があるのね。そのコもそのコでパパもママも死んじゃったものだから、会いたくてさみしいのよ。だから、お互いに魂同士引き合ってそーいうことになったのね」
そんな感じだな。俺もそう思う。
で、問題はそいつらに無事お引取りいただけるかどうかにある。
「それで、どうする？　話し合える余地はありそうか？」
するとあかり、急に腕組みをして難しい顔になり
「これは難事件だねぇ、〇智警部」
いやいや。
そういうリアクションは要求してませんから。
「――いいよ。行ってみよ？　話くらい、できると思うよ」

その9　いいから生きてやがれ

俺達はセージと別れて、幽玄荘に戻ってきた。
幽霊退治に行くのに日を選んでも仕方がないが、相手は病院。いきなり乗り込んでも「何ですかあなた達は！」って追い出されてしまうだろうしな。
それに今日はセージの友人とやらはいないみたいだから、日をあらためて行くことにした。
セージも
「……じゃあ、友人にヤス達が調べてくれるって、伝えておくから。それからの方がやりやすいしな」
って言ってた。
ヤス達？
よかったな、あかり。
セージの奴、お前もきちんと人数にカウントしてくれてるよ。

次の日はトメワークに専念した俺。
もしかしたら張り込みが続くかも知れない。そうなると、昼間満足に作業できないってことも考えられるしな。
で、その翌日。
俺達は夕刻から付属病院の病棟を訪ねた。
セージと、そういうスケジュールの約束をしていたんだな。
大学付属病院だから、建物もでかいし、それなりに病室も多い。
ただ、建物はけっこー古びていて、どっちかっていうと暗い感じがする。新しく設計された病院って、採光とか癒しの色調に気を遣っているけど、ここは間逆だな。治るものも治らなくなりそうだ。
みんな、よくこんなヤバい病院にくるよな。俺は病気になってもかかりたくねぇ。――と、いう雰囲気の病院なんだ。

自分が診察にきたワケじゃないけど、いい気分はしないな。
一緒に、セージがいる。
友人に、顔つなぎしてくれるらしい。
４階にある一般病棟へやってくると、セージは詰所で友人を呼び出した。
「――はじめまして。神坂美幸です」
おいおい。
セージの友人っていうから男だと思っていたら、やってきたのは女性だよ。
すらっとしていて背が高い、かなりの美人。顔つきがきりっと引き締まっていていかにも優秀な雰囲気があるものの、目元が軟らかくて優しそう。額から垂れている長い前髪がオトナ！　色っぽい！
あかりも十分セクシーだが、これはまた別系列のフェロモンだな。
こいつはどこでどうやって、こんな人と知り合いになったんだ？
ってか、ホントに友人かね？　ちょっと疑わしいぞ。
とか内心であれこれ思っているとセージはつらっと冷静に
「こいつは俺の友達でヤスっていうんだ。学部は経営だけど、空間と心理的諸条件がもたらす視覚作用、っていう研究もしていて、色々あちこち調べて歩いている」
紹介してくれた。
なんかあらぬ方向へ話が発展しているようだが、これはセージと打ち合わせ済み。
そういう口実とか権威（？）でもつけなけりゃ、面会時間過ぎた後の病棟になんか入れてもらえないからな。
空間と心理的諸条件がもたらす視覚作用？
上手いコトをいう。ぶっちゃけ「ユーレイ」だ。学問のコトバっていうのは、一見エラそうなものが山ほどあるが、中身を知れば「なーんだ」ってのが多い。
そんな偽装表示（？）の事情など知らない美幸さんは深刻そうな表情で

「すみません。色々、ご厄介をかけます」ぺこりとお辞儀した。
「ヤスが夜中にここにいても、問題ないだろうか？」
セージが確認すると
「ドクターと婦長には、こっそり話してあるの。大学の方から、こういうことに詳しい学生さんがきてくれるから、って。ほら、場所が場所だから、霊能者みたいな人とか呼ぶワケにいかないでしょう？　お寺の住職とか神主なんて、もってのほか。患者さんがいい気持ちしないもの。もし、そういう何ていうのかしら、お祓いみたいな？　事をしないで収められるのであれば、その方がいいって……」
わかるわかる。
病棟を坊主がのし歩いていたら、死人が出たのかと思われかねないもんな。
というか、俺も別に全くのド素人なんですけどね。
幽霊の研究なんか、1分もしたことありません。それどころか「いるワケねぇ」とかフツーに思ってました。知識といえば、テレビで「怪奇特集　あなたの○らない○界」とか観ていたくらいなもんだ。あれって、妙に映像がコワいんですけど。
ただし！
今、俺の傍には本物の幽霊が付いて、いや憑いている！
紹介してもいいんだけど、残念ながら美幸さんにも見えていないらしい。というか、外部から幽霊を連れ込んだなんて喋ったら、いったいどんな顔をされるだろう？
とはいえ、俺は研究しているということになっているから、もっともらしい質問を二つ三つぶつけておく必要はある。
「あのー、神坂さんは、その……目撃されたんですか？」
念のため訊いてみると
「いえ、私って鈍感だからそういうのは、ね。……だけど、看護士にも患者さんにも、妙に敏感な人っているでしょう？　彼等が騒いでしまうと、他の人達も嫌な気分になってしまうのよね。現実にあるかないかっていうのは、私もよくわからないんだけど」

なるほど。
もう一つ訊いておこう。
これは、タダの建前なんだけども
「……それから、今回の件以外にほかにそういう噂を聞いた事はありませんか？」
美幸さんはうーんと考えてから
「病院だから、噂としてゼロではないのよ。ほら、人の生き死にがある場所でしょう？　……といって、本当に現れたのを目撃したっていう話は聞かないわ。若いナース達はもちろん、ドクターも婦長も。婦長なんかはここが長いんだけど、今まではねぇ、って」
了解。
過去にそういうことがあろうとなかろうと、俺の知ったコトではありません。
そうだ。肝心な質問を忘れていたぞ。
「あの、患者さんの話、セージからは触りだけ聞いているんですけど――」
美幸さんは声を小さくして
「ホントはダメなんだけど、内緒で教えておくね。――患者さんは75号室の白井由樹さん。歳は十六歳で、入院は一ヶ月前。事故で手足と身体に受傷したけど、命は取り留めたの。意識が戻ってから、両親が亡くなられたって警察の方が伝えたのね。そうしたらその日から、まるで表情がなくなっちゃって……。ドクターとかみんなが話しかけるんだけど、まともに反応してくれないのよ。そうこうしているうちに、こういう騒ぎが起きちゃって」
心底困った、という顔をしている。
まあ、色々大変だろうな。仕事が仕事だし。
俺としては、両親が事故死して本人に生きる希望がなくなった、というポイントがつかめれば問題はない。
ってか十六歳、か。
あかりより一つ下。若いなぁ。

多分、俺やあかりと違って、家族の仲がよかったんだろうな。だから、ショックが大きくて立ち直れずにいるようだ。
このあたり、同世代で辛い目に遭ったあかりと話ができれば、あるいは何とか励ますことができるかも知れない。あかりは一度死んじゃったけど、今は幽霊とはいえ前向きで明るいコだから。
「とりあえず、一晩張らせてください。異常を発見したら、まず神坂さんにお知らせします」
「お願いしますね。お腹が空いたら、遠慮なく言ってください。食事の用意もできますから」
優しいなぁ。さすが看護士になるだけのことはある。
などと思っていると
「……」
俺の直近から、マガマガしいオーラを感じるぞ。
ふと見ると、あかりがすっごくイヤな顔をしてじとーっと俺を見ている。
「何だよ？　何をツムジ曲げてんだ？」
「やけにニタついてるじゃない、やっちーってば。そんなにあのお姉さんが気に入ったワケ？」
ニヤけてなんかいねーよ。
優しいな、とか思っただけじゃないか。
ってか、すごい直感だな。ちょっとそう思っただけで、何でそこまで感づくんだ？　女のカン、ってやつ？　幽霊だけに特殊アビリティが具わっているのか？
「やっちーのスケベ！　あたしってものがありながら、よその女に目移りするなんて！」
がくがくがくがくと揺さぶってきやがった。
だから、してねぇって。
大体、美幸さんはお前の事が見えてないんだから。俺にだけ色々話をしてくるのは当たり前だろう。そもそも、俺はここに出てくる幽霊とお話しにやってきたのであって、あの美しいお姉さま目当て

にやってきたのではない！　だいたい、俺は〇スプレなどに興味はなくって、どうせならお前みたいに胸とパンツがはっきり目視できる方が――あーいやいや、これは余計だ。
……と、いうことを、ゆっくりと噛んで含めるように説明してやると、ようやくあかりは
「……なら、いいわ。今回は許してあげる。次からは、許さないからね？」
許すも許さないも、俺は何もしてないんだが……。
が、あかりがあんまりにもコワいんで、それ以上ツッこまないことにした。
「じゃ、済まない。俺は明日提出のレポートに取り組まなきゃならんから。……ヤバい時は、研究室に電話くれ。ここなら、すぐに来れる」
「サンキュー。こっからは、俺が引き受けたコトだ。お前は安心してレポートやってくれ」
セージは研究室へ戻っていった。
見送ったあと、エレベーターホールにあるソファに腰を下ろして、ぼへーっと時間をつぶしていると
「今日は出てきてくれるかなぁ。――あんまり、いる感じがしない。今は」
ぼそりとあかりが呟いた。
まだ夕方だしな。
病院に人がいなくなって静かになったら、現れるかもしれないぞ。
黙っていても死ぬほどヒマなので、別に下見というほどのものでもないが、俺達は由樹さんがいるという７５号室の前にやってきた。本当なら４７５号室にでもなるんだろうが、病院はこういうところに神経を使わざるを得ない。死を連想する人がいないように、わざと４を外しているワケだ。
病室の扉は閉まっていて、中の様子はわからない。
「――あかり」

「何？」
「ちょっと、中の様子を見てきてくれ」
「へ？　やっちーも一緒に来ればいいじゃん。カギ、かかってないんでしょ？」
ばかもの。
病室とはいえ、女の子の部屋だぞ。男がいきなり「どもー！」とかって入れるかよ。
それに、万が一着替えでもしていたらどうする？
○ラえ○んでお決まりの、○こでも○アを開けたら○ずかちゃんが入浴中で「キャー！　○び太さんの、エッチー！」的な大惨事を招く恐れがある！　そういう失態は断じて避けたい。
俺の異様な気迫に圧されたらしいあかりは「何で？」みたいなカオをしていたが
「うーん、わかった。じゃ、ちょっくら見てくる」
すいっと、壁をすり抜けていった。
いやいや、幽霊とコンビを組んでいると、こういう時に便利だな。
いっそのこと、あかりと探偵事務所でも開くかね。「心霊探偵開業！　貴方の周りで起こる不可解な現象を、解決して差し上げます！」とかいうフレーズで。
いかんいかん。あかりのミステリー物真似に影響されてきとる。しかし、探偵モノの小説とかコミックって不思議だよな。主人公の行く先でこれ見よがしに殺人事件が起こるっていう七不思議もさることながら、どーしてみんな警察関係者とお知り合いなんだろうねぇ。
くだらんことを、あれこれ妄想していると
「ねぇねぇやっちー、すごいねぇ」
壁からあかりが抜け出てきた。
「あ？　何が？」
「病院のパジャマ、みたいなヤツ？　あれって若い女の子が着ると、けっこーえっちな感じがするね。今、由樹ちゃん眠っているんだけ

ど、胸の前のところが（云々）。カオ、けっこー可愛いコだよ。やっちーも見てきたら？」観光にきたみたいな事を言いやがる。
ええと。
表現に耐えないので、一部カット。
――ってか、そんな情報要らんわ！
何もないなら何もないって言っとけ！
誰が「病室着と女の子のマッチングをエッチな視点から観察しろ」なんて言った！？
「ぶー。だってやっちー、中を見て来いって、言ったじゃん」
むくれている。
言ったよ。
言ったけど、女の子の寝姿をじっくり眺めて来いとは言ってねぇ。病室の様子だよ、様子！　あのコの両親の霊がやってきてないか、どうかをな。
ま、何はともあれ俺が直接乗り込まなくて良かった。
「異常はなかったんだな？」
「ないよ。――ってか、あたしもあれ、着てみたいなぁ」
○スプレが好きなのかよ？
よせよせ。
あんなものは、着ない方が幸せなのだ。
――再びヒマすぎる待機時間突入。
来客用ソファに転がってぐだぐだしていると、
「……ねぇねぇやっちー」
「あん？」
「あのコ、元気になれるのかしら？」
不意にあかりがそんなコトを言い出した。
「どーいう意味だ？」
「だって、せっかく治ってもパパもママもいない。借金してたっていうから、これから暮らしていくお金もないじゃないよ？　――じゃあ、どうやって生きていくの？」

小難しい質問をしてきやがる。
だが、俺にはその答えがない。俺はまだ婆ちゃんがいてくれて、親身に俺の面倒をみてくれたから。その婆ちゃんが死んだ時には、俺はもう自分で稼げるようになっていたし。
「あたしだったら、元気になりたくないなぁ……」
確かにな。
女の子独り遺されたところで、途方に暮れるわな。
どうしたらいいのか、俺にもわからない。
何だか、暗い予感がした。
本人がもし、そういうことを思っているのだとしたら――両親にお引取りいただき、晴れて彼女が退院していくことに、どれほどの価値があるのだろう？
希望がないと、報われない。
返す言葉もない俺は、黙ってくすんだ床を眺めていた。
そうして面会時間も終わり、病棟はすっかり静けさに包まれている。
「さて、こっからだな。――あかり、何か感じたら教えてくれよ？」
「ほーい。やっちーがヘンなこと考えているのを感じたら、ひっぱたいちゃいまーす」
そっちじゃないってば。
俺はお前以外のことを考えたりはしない！　……いやいや、今はちゃんと依頼の件に集中しよう。
「ヘンな事は考えない。……その代わり、眠気に襲われだしたら、遠慮は要らんからやってくれ。最近、深夜バイトやってないから自信がない」
そう言うとあかり、ニッと笑って
「……わかってる。やっちー、真面目だもん。――さっきのは、ちょっとすねてみたかっただけ」
俺もわかってるよ、そのあたりのことは。
７５号室が見える位置に座った俺は、じっと見張りを開始した。

で、どれくらい経っただろう。
ふと気がつくと、窓の外がしらばんできている。
朝か。
眠いのをどうにか堪えて一晩見張っていた。セージが去り際に「コーヒーでも飲んでくれ」っていって、〇ョージア五・六本飲めるだけ置いていってくれたし。寝こけたら申し訳ないってモンだ。そーいやあいつ、コーヒー好きだなぁ。
が、結局両親の霊らしきものは現れなかった。
途中、何度か美幸さんとか他の看護士さんが巡回に来て由樹さんの部屋の様子を見ていったが、首を横に振って見せるばかりだった。
異常なし、ってコトだ。
一度、美幸さんが俺の傍にやってきて
「……由樹ちゃん、眠ったまま。だけど、ちょっと不安なの。全然身体が動いてなくて、呼吸だけしているような状態なの。意識が戻らない時の様子に近いかな」
と、教えてくれた。
あー。
俺達が来てからずっと、彼女は眠りっぱなしみたいだ。
ホントは、目覚めたら話でもしてみたいところなんだが。
あかりも時々、すいっと75号室に忍び込んでみてくれたが
「……だーれもいないよ。ま、やってきたらすぐわかるけどね」
そうか。
幽霊どうしでセンサーが働かないんじゃ、ホントに来ていないってことだろうな。
とりあえず、今日の任務はここまで。
幽玄荘に帰るとするか。

昼間睡眠を摂った俺は、夕方になってまた付属病院にやってきた。
今夜も張り込み。
途中、お客様あり。
当番のドクターが俺を見かけて
「……ああ、君だね。神坂さんから、話は聞いているよ」
話しかけてきてくれた。
まだ若いドクターで、この大学の卒業生だって教えてくれた。
俺が後輩なだけに、多少の親近感をもってくれているらしい。
「この騒ぎも、院長の耳に入っているんだ。正直、ホントの話かどうかなんて調べようもないんだけど、患者さんも見たっていうんじゃ、放っておけないからね」
患者さん本位か。
いいお医者さんだな。
こんな病院で診察受けたくねぇなんて思ったりして、申し訳ないです。
特に調子が悪くなる患者さんも出ていないようで、彼はしばらく話し込んでいった。
他愛もない話？
いや、一つだけ重要な話があった。
「……もうすぐ俺、結婚するんだ」
そんなコトまで喋ってくれた。
「それはおめでとうございます。お相手の方は、この街に住んでいるんですか？」
「もっと近くにいるんだ。――はっきり言っちゃうと、神坂さんだよ」
おやおや。
あんな研修生に手をお出しになられましたか。
神坂さん、どうするんだろう？　このまま看護士目指して続けるつもりなんだろうか。
――どうでもいいんですけどね。

ただし。
セージ。
疑って済まなかった。
ってか、お前、もしかして「好き」とか思ってないんだよな？
だとしたら、何というか、その……次目指して頑張れ。女性は沢山いるし、お前のようにそこそこスマートでアタマのいい男なら、幾らでもモテるぞ。
とかいってると、今度はそのセージ本人がやってきた。
「……どうだ？　変わったことはないか？」
さっと差し出してくれたのは缶コーヒーの〇ス。
やっぱり、コーヒー好きか。この間から俺、何倍奢ってもらってることやら。
「サンキュ。レポートはいいのか？　忙しいんだろ？」
セージは俺の隣に腰を下ろして
「……手直しくうのはいつもの事だ。期限さえ守れば、どうということはない」
俺は昨日や今までの見張りの状況を教えてやったが、どうにも気になって仕方がない。
こいつと神坂さん、マジでタダの友達関係なんだろうか？
いや――セージ、本当に友達だと思って接していたのかよ？　神坂さんは少なくとも、婚約までするくらい、あのドクターとの関係が進んでいたことだし。
でも、訊けない。
こいつには、訊けねぇ。
俺は余計な事をいえる立場でもないし。
少しづつ、窓の外の闇が薄れかけてきている。朝が近い。
セージは黙って両手で缶をもてあそんでいたが、不意に
「……あの美幸、近々結婚するそうだ」
！！
知っていたんだ。

俺は内心驚いたが、顔にも身体にも出すまいとした。
彼は独り言のように続ける。
「俺の幼馴染だった友達のねーちゃんさ。医者家系でオヤジさんもおふくろさんも医者。幼馴染の友達も医者になりたいってよく言ってた。――でも」
残っていたコーヒーをぐいっと飲み干し
「そいつ、病気で死んだ。皮肉なモンだよな。両親が医者だっていうのに、てめーの子供一人救えなかったんだからな」
「……」
「ホントは法学部でも受けて弁護士になろうかと思ってたけど、医学部に切り替えたのはそれが動機さ。医者っていうのが実は無力な存在なのか、逆にギリギリにヤバい患者でも救う事ができるのかどうか、俺自身で確認してみたかった。――そうしたら、たまたま同じコト考えていたのがあの美幸さ。ま、結婚しちまってまで続けていけるかどうか、知らんがね」
そうかい。
そうだったのか。
どう見ても文系青年なセージが医学部を志望した理由、初めて聞いた。
彼は口にしていないけど、その幼馴染が死んだっていう事実が、こいつにはしこたまコタえたんだろう。じゃなかったら、そうそう簡単に医者になろうなんて思わないんじゃないだろうか。子供が「お医者さんになりたーい！」なんていうのとは、ワケが違う。
「よっぽど、仲のいい友達だったんだな」
俺は何気なく言ったのだが
「……美紅っていった。高校一年の冬に、癌で死んだ。そん時俺ら、付き合ってた」
頼むから、やめてくれ。
そういう辛い話を淡々と喋るのは。
お前の辛さとか、悲しみがダイレクトに伝わってきて、やりきれ

ねぇ。
俺は理解していた。
セージにとっては恋人、美幸さんにとっては妹。それぞれに大切だった存在を病気に奪われて、二人は二人なりに復仇を決意した。それでセージは医者、美幸さんは看護士を目指したワケなのだが――ここへ来て、どうも按配が違ってきた。
美幸さんは、結婚する。
もしかしたら、それはそれとして、看護士への道を続けるかもしれない。
でも、明らかに難しいことになるよな。研修を受けたり勉強したり、そういう自分への試練は結婚生活にとって決していい状況を生み出さない。セージのカン、あるいは諸々の状況証拠から総合すると――美幸さんは結婚を機にリタイアするのではないかと思ったのだろう。
俺も、そんな気がした。ドクターの話を聞いた瞬間。
これは、なんとも言いようがない。
男と女、恋人と妹、同じくらいに重みはあっても、いつまでも同じ重みかどうかなんて、誰にも決められない。当人が判断することだし。
「……ま、美幸が結婚して、それで看護士になるかならんかなんてのは、俺の知ったことじゃない。やめるならやめればいいし、続けるならそれも一つ。俺は俺さ。――向いてるかどうかわからんが、ここまで来た以上、やるだけのことだ」
そうか。
それが聞けて、良かった。
「……お前、医者向きだな。自分のやることを真っ直ぐ見てるし。いいカンジじゃねぇ？」
そんな言い方で、自分の今の感動を表現した俺。
するとセージは
「ふっ」

ちょっとだけ笑ってみせて、あとは何も言わなかった。
安心した。
疑って、マジ済まなかった。
かといって、美幸さんがどうこうってことでもないし。
死んだ人のことにいつまでもとらわれたままで、人は生けていけやしないしな。
「……じゃ、戻ってレポートの整理するわ。そのうち、焼肉でも奢るさ」
セージは立ち上がり、エレベーターへと消えていった。
強い奴。
俺も、強くありたい。
何かすごく神聖な気持ちになって、俺は再び見張りを続行した。
言い忘れていたが、今日はあかり、ずっと病室の中にいてくれている。
また朝を迎えようとした頃、
「……あーん。今日もダメー。来てくんなかったー」
ぶつぶつ泣き言を言いながら、あかりは出てきた。
「お出かけでもしてんのか？　それか、俺達が張ってるからかな？」
あかりはううん、と首を横に振り
「……あのコ、ずっと眠ったままってのはヘン。なんだか、そこにいるってカンジがしないのよ。もしかしたら――」
両親と一緒に逝っちまったか！？
いやいや。
身体は動いているし。
魂が死なない程度に他所へ行ってしまっているんじゃないだろうな。
ありえる。
両親と一緒。だから両親の霊も現れないし、本人も眠ったままなんじゃないか？
あかりは俺の隣にやってきて

「……でも、そろそろなんかあるかもね。いつまでも身体から離れていられる筈もないし。離れっぱなしだったらあのコ、フツーに死んじゃうもの」
「わかった。今夜あたり、なんか動きがありそうだな」
俺達は詰所にいるドクターや看護士の人に報告をしてから、病院をあとにした。
幽玄荘へ帰る。
腹も減っているし風呂にも入ってないし。疲れた顔と頭が野蛮人風になってるよ。
「……くっそー。何で、俺達がいる時に限って、出てきやしないんだ」
眠気もあって、俺は一人でぼやいていた。
早朝だから、電車の中は誰もいない。
外は見事な朝焼け。
真っ赤に染まっている街の様子を眺めているあかりの横顔、すごくキレイだ。
ちょっとドキッとしつつ、なんかこう――切なくなった。
このままだといつか、俺達も別れていかなくちゃならないんだろうか。例えカラダが見つかったとしても、一緒に過ごせるという保証はこの街のどこにもない。もし、誰かがその保証をしてくれるなら、俺は今すぐセージに「ゴメン！」って言って、あかりのカラダ探しを再開するだろう。――世界中を回って。
「ん？　どーかしたの、やっちー」
きゃはは、と笑っているあかり。
この笑顔……手放したくない。
もし、ずっと一緒にいられるなら、俺が幽霊になってもいい。
疲れているせいなのかも知れないけど、今の俺は妙に沈んでいる。
自分で明らかにわかる。
なんだろう？
今夜こそ、由樹さんの両親と――話をつけたい。

夕方、あかりを連れて三度付属病院へ向かった。
そろそろ、ケリをつけたいところだ。この状態が続けば、こっちが保たない。
あかりみたいなコの幽霊に振り回されるのは気楽でいいが、何を考えているのかわからん人達の幽霊に、いつまでも付き合ってられない。こっちが保たないってば。もう、三夜目だよ。千夜一夜だけは勘弁だな。
４階の病棟フロアに着くと、ちょうど美幸さんが出てきていた。
が、何かいつもと様子が違うぞ。
廊下をバタバタと走っている。
「……こんばんは」
挨拶をすると
「あ、お疲れ様。由樹ちゃん、どうも昼過ぎから容態がおかしいのよ。心拍数も脈拍も不安定で、ちょっと危険なの」
はぁ！？
なんだそりゃ？
怪我、もう治ってるんでしょ？
どうしてそういうコトになるんだ？
「わからないのよ。こんな事は初めてで、ドクターも首をひねってるの」
おいおい。
医者にもわからないってのは穏やかじゃないな。
「……やっちー、これ、ヤバい」
あかりが恐ろしい顔をしている。
「由樹ちゃんの魂、連れて行かれようとしてるんだよ。放っておいたら――逝っちゃうかも」「……マジかよ？」
あり得る。
魂が抜けていこうとしているから、怪我も病気も抱えていない身

体が突然衰弱していくんだろうな。
俺は一瞬、鳥肌も立ったが、それ以上に彼女の両親に腹が立った。
ふざけやがって。
自分達が死んだからって、まだ生きている娘まで連れて行くか、フツー？
「何が何でも、あの親の霊と会わなくちゃな。会って、やめさせねーと」
「話してみなくちゃわからないケド……あたしもそう思う」
その後、美幸さんはちらと病室を見せてくれた。
ベッドの上に横たわっている、あかりと同じくらいの年かさの女の子。
色白でほっそりとしていて、ちょっとあどけなさが残っている。表情がつけばきっと可愛らしいのだろうが、今の彼女は――微動だにせず、こんこんと眠り続けている。
呼吸器やら心拍数を計る機械なんかが取り付けられていて、痛々しい。
俺はじっと、動かない由樹さんを見つめていたが
「……俺達も、今日がヤマだと思います。このコが元気になるかそうでないか、今晩にかかってきます」
そんな重大な事を言ったので、美幸さんはちょっと驚いている。
「やっぱり、その……霊的な、何かが影響している、と？」
「霊というよりも」
霊じゃない。このコはまだ、生きている。
言うなれば――
「魂の問題です。このコの魂が、生きることを選べば明日の朝には元気になる。リタイアを選択されたら、救いようがありません。出来るのは、見送ることだけ……」
午前一時を過ぎているらしい。

廊下の長イスに座りながら、さすがにうとうとし始めていた。
三夜目は、さすがにこたえた。
すると、
「――やっちー！　やっちー！　いる、いるよ！」
あかりにがくがくと揺り起こされて、俺はハッと気がついた。
「中で、ひそひそ声がする。由樹ちゃんのパパとママ、きてるよ！」
「……何だと？」
俺は立ち上がって、そっと75号室のドアに耳をつけた。
確かに、声がする。
声に響きがないから聞き取りにくいのだが、男の人に女の人、それから若い女の子の声。
そーっとあかりが近寄ってきて
「やっちー、聞こえた？」
「ああ、聞こえるぞ」
「じゃ、お話できるね。声も届かないと姿も見えないからお話できないんだけど、それなら大丈夫っぽい。……で、どーするの？」
いきなり飛び込んでも、全て台無し木っ端微塵になるかも知れない。
とりあえず、中でどんな会話をしているんだろう。
盗み聞きは本位じゃないが、この際、やむを得ない。
由樹さんの魂がかかっているからな。
よーく耳を澄ましていると
「――本当に、いいのかい？」
「――うん。パパとママと一緒でいい」
！？
どういうことだ？
もしかして――生きることをリタイアするつもりか？
一瞬焦ってドアを思いっきり開きそうになった。
が、俺はぐっと堪えた。
堪えつつ、会話の次を待っていると

「……そうだそうだ。無理して生きていく必要もない。パパ達と、一緒においで。さぁ――」
親父さんの声。
が、俺には死神の声としか思えなかった。
死者が、生ける者をあの世へと誘う、呪いの声。
もう、我慢がならなくなった。
「――待てコラ！」
思わずバーンとドアを開け、俺は病室の中へと飛び込んでいた。
「まだ生きられる娘の魂を引き摺り出すなんざぁ、てめーらそれでも親か！　親の勝手で、娘の人生終わらすのか！？　ああ！？」
いきなり現れた俺に、両親の霊が驚いた顔をしている。
はっきりと見えた。
二人とも、四十歳になったかならないか、くらいに若い。ベッドの傍に佇んでいた。
ちょっと異様だったのは、由樹さんが二人いたことだ。正確には、肉体と魂だけど。彼女の魂は、抜け出した自分の肉体の上にのっかっている。
これこそ一般的に言われる「幽体離脱」って現象なのかどうか、俺にはわからない。
ただ、余りまともじゃないよな。
まだ死んでもいない人間が、肉体を離れて魂だけになっているってのは。
それというのも、そこに突っ立っている、親の姿をした死神が――。
「ちょっと！　やっちーってば！」
あかりが慌てて止めに入ったが、追っつかなかった。
「勝手にやってきて他の患者をビビらせてるかと思えば、今度は生きている娘をあの世に連れて行こうとしやがって！　どこまで手前勝手なんだよ、あんたらは！」
頭の中に、俺をおいていなくなったお袋、そして勝手に死んだ親

父のことを浮かべていた。
そして、自分のためにあかりを犠牲にした彼女の母親のことも。
親だからって、子供の人生を握っているなんて思うのは傲慢だ。
親には子供を成長させる責任はあっても、自由に扱う権利なんかない。絶対。
そういう色んなことが一気に俺の中に渦巻いていて、怒りが収まらなかった。
「誰だ？　キミは」
「それはこっちの質問だよ。てめぇらこそ、どこのどちらさんだね？　こんな騒ぎを起こしやがって。両親の皮かぶった死神か」
死神、と言われておふくろさんの方は、そっと俯いている。
が、オヤジさんはすっと音もなく立ち上がると、俺を睨みつけながら
「……これは、私達の問題だ。君にそのような……」
「やかましい！」
ここが病棟であることなんかすっかり忘れて、つい怒鳴っちまったよ。
「何が私達の問題、だ。お前等なんか、親でも何でもねぇ。ただの死神か悪霊だぜ！　そのコが辛くても頑張って生きていけるようにって、何で言えねぇんだ。――ここにいるあかりなんてなぁ」
後が続かなくなった。
叫びながら、俺はほとんど泣きそうになっていた。
あかりは幽霊になっても明るく振る舞って、俺を何度も励まして助けてくれた。
幽霊だぞ、幽霊。
それなのにこの男「家族がみんな死んだから、お前も」って、まだ生きてる娘をあの世にさらっていこうとするか、フツー？
逆だろう。
由樹の両親は、確かに事故死してしまった。もう会えない。
会えないけど、辛いけど、娘が頑張って生きていけるように応援

するもんじゃないか。
それが「親」だって、俺は信じている。
俺の親もあかりの親も、くだらない人間だった。
だけど、俺達はこうやって粘って粘って生きている。諦めずに生きてきたから、あかりに出会ったり「ババーズ」に出会って助けてもらったりすることが出来た。
オヤジさん、沈黙。
俺がマジギレしちまったから、結構雰囲気的にはまずかったと思う。
が、あかりの登場に、由樹さんが目を丸くして
「……そのコ、幽霊？　今のあたしと、一緒？」
あかりに関心をもったらしい。
ちょっと空気の流れが変わって、俺は気勢を削がれた。
そうそう。
このコの言い分はどうなんだろう。
すると、あかりがひょいと俺の前に浮かんで
「あたし、あかり。見ての通り、幽霊よ。んで、やっちーと一緒に暮らしてるの」
自己紹介。
一緒に暮らしている、か。あらためてコトバにすると、照れくさいもんだな。
あかりのほんわかした雰囲気が良かったのかも知れない。
由樹さんの魂はくるりと身体ごとこっちを向き
「へぇ。その人、彼氏なの？　幽霊と人間なのに？」
「ユーレイも人間も、カンケーないよ。――それから、あたしはユーレイだけど、あなたはまだ魂。死んでいないから」
「そぉなんだ。あたしてっきり、今の自分、幽霊だと思ってた」
打ち解けているな。
ちょっと由樹さん、楽しそう。
これは、もしかして――俺はかすかな希望を持った。

「娘さんを連れて行くことだけ考えないで、もう少し前向きになってください。これからなら、俺やあかりもいて、信頼できる人達もいるんです。力になることだって、出来るかもしれない」
ありったけの誠意を込めて、言った俺。
何とか、由樹さんには生きていて欲しいと思った。
彼女はうつむいている。少しは、俺の思いをわかってくれたんだろうか。
すると、今まで黙っていたおふくろさんが
「……本当は、無理心中するつもりだったんです」
は？
無理心中？
ずいぶんと穏やかじゃねぇな。
「だまされて借金を抱えてしまったんです。それなのに、主人は勤めていた会社をリストラされて、その日の生活にも困るようになってしまって……。死に場所を探して一家で移動している時に、事故に遭いました。私と主人はそれで死んだんですが、娘が独り残されました。本当は、生きて欲しい。でも――」
おふくろさんは、両手で顔を覆った。
泣いてるよ。
母親が泣き出して困ったらしい由樹さんは、そっとその肩を叩いて
「……あたし、もういいの。パパとママがいないこの世で、生きていたくない」
ちょっと待て。
すぐそれだ。
「生きていたくないって……そう簡単に言うなよな」
俺は身体が怒りやらやるせないやらで、ぶるぶると震えがきて止まらない。
すると、あかりがそっと俺の右手を握った。
ちらっと俺の方を向いて頷いてみせると、
「……あたしは、やっちーの気持ちがわかる。やっちーは、どんな

に辛いことがあっても、頑張って頑張って乗り越えてきたから。だから、あたしも一緒にいたくなったんだ」
握っている手に力がこもった。
「でも、頑張ることに疲れちゃってるヒト達は、百万回言ってもわからないと思う。ってか、わかりたくてもわかれないのよ。あたしも自殺した時、そんな気持ちだったかなぁって、思い出した」
「……」
言われてみれば、あかりもそうだった。
俺だって、婆ちゃんが死んでバイト先をみんな失った時、どうしていいかわからなくなった。もし、幽玄荘であかりに会えなかったら――俺だって、もしかしたら、だ。
「ねぇ、由樹ちゃん」
あかりはふわっと浮いてベッドの上にのり、由樹さんの傍へ寄っていった。
「もし、ちょっとでもやっちーの言うコトがわかるんだったら、生きることを諦めないで。――でも、無理は言わない。それは由樹ちゃんが決めること。パパとママと一緒に逝きたいなら、仕方がないと思う」
あかり、最後の方は涙声。
そうだよな。
生き続けるかやめるか、結局は本人が選ぶしかない。
どれだけ周囲の人間が「死ぬなー！」って叫んでも、生きる意欲がない人間は死んでしまう。
二人とも、思いは伝えた。
そっとあかりの肩を抱き寄せた俺。
あかりはすぐ傍で俺を見上げて泣き笑いした。
俺――あかりがいて、本当に良かった。
由樹はうつむいたまま、黙っている。
両親も、意外にもそれ以上何も言わなかった。
「……色々、ありがと。でも」

しばらくして、由樹はゆっくりと顔を上げた。
「――アタシもう、いいの」

その１０　生きていく魂

由樹さんは続けた。

「いつまでもいつまでも、パパとママにこうしてきてもらえるワケじゃない。いつか、パパもママも逝かなくちゃいけないし。――だったら、不安で悲しい思いしながら生きていくよりも、一緒に逝ってしまった方がマシ」

その目から、涙がこぼれている。

「……」

そう。

由樹は、両親と共に逝く事を選んだ。

正直、もう、止められない。

あかりが言うことの意味、わからなくもないから。

逝くのか――。

何か、すげぇ虚しいな。

満点獲れる試験をわざわざ放棄する感じかも知れない。三夜分の苦労が、とかいうことでは決してないけれども、救いたいって思いが届かなかった。――いや、届ける事ができなかった。これって、俺達が無力だってコトなんだろうか。

違うよな。

あかりが言っていた。

最後は、本人が選ぶことなんだって。

「……」

もう、コトバもない俺。

母親がすーっと俺の前までやってきて、深々と頭を下げた。

「病院をお騒がせしてすみませんでした。でも、私達はこれで、ここからいなくなりますから。皆さんに、申し訳ございませんでしたと、お伝えください」

バカ。

あの世なんて、そう都合良くいくかよ。この世では絶望したって、まだ何とかするチャンスはやってくる。でも、死んでしまったら何もかもパーだよ。
死んだ後に一緒にいられる保証なんて、まったくないのに。
由樹さんはオヤジさんの方を向き、にこと微笑んだ。
オヤジさん、笑わずに真面目な顔でぐっと頷いている。そして、娘に向かってそっと手を差し出した。
差し伸べたられたその手を由樹さんはしっかりと握り締め――親子三人が仲良く並んだ。
この世で最後の、家族の光景。
「では、失礼いたします」
オヤジさんがゆっくりと俺達にお辞儀し、三人は窓の方を向いた。
由樹さんとその両親、本当にこの世から消えていこうとしている。
それを、寄り添って見送っている俺とあかり。
ふと、逝こうとした由樹の魂がその場に停まった。
彼女はゆっくりとこっちを振り返り
「……あかりさん、だっけ？　もし、あなたが望むなら、私の身体に憑いてもらっても構やしないわ。怪我はほとんど治ったし、どこも悪くない。もう親戚とかもないから、面倒くさいこともないしね。ただ」
由樹さんは最後にちょっと笑って
「今のあなたほど、胸は大きくないケド」

そうして由樹とその両親は逝った。
今度こそ、もう二度と、戻ってこない。
あとには、ベッドに横たわっている由樹だった人の身体だけが残されている。
彼女はもう、由樹じゃない。
あかりがこの身体に、入ろうと思えば入れるだろう。

でも、悩んでいる時間はないんだ。
魂を喪った身体は、間もなく死を迎える。
由樹の身体が死んでしまえば、それまでだ。元の木阿弥。また別の身体を探さなくちゃならない。
つってもよ。
こんなカタチで、突然やってくるとはな。ホントに。
俺はどうする？　とも訊かずに、黙ってあかりを見つめている。
こっから先は、あかりが選ぶ事。
他人の身体をもらって再び人生を歩み出すのか、幽霊を続けていつかあの世へと戻っていくのか。あかりの気持ちは知っているつもりだったけど、いざその場になったらよくわからなくなった。
確かに、由樹の身体に憑けば、もう一度生きることができる。
でも、あかりっていう、この世界にたった一つしかない彼女の姿は、永遠に――失われる。
愛くるしくてほわーんとしていて、ちょっとどころかすっげー色っぽいあかり。
由樹もあかりと歳はほとんど変わらないし、表情がついてくれば可愛いんだろうな。彼女は「あかりより胸が小さい」とか最後に申告していったけど……。
じっと由樹の身体を見つめているあかり。
何を思っているんだろう。
「ねぇ、やっちー……」
「ん？」
「あたしの……あたしの、どこが好き？」
ここで詰まってはいけない。
今までの全てが水のバブルになっちまう。
俺はあかりの傍に立って、ポンとその華奢な肩を叩いてやった。
俺があかりを好きな理由。
パンツでもそのでかい胸でもない。人並み以上に可愛いその顔でも、ない。

もちろん、姿形が関係ないということではないが。そーいうのは後からついてくるものだ。
それよりも。
いきなり会った俺達が、ゆっくりと惹かれあっていった、その一番強い理由。
「……俺はな」
どういう顔をすればいいんだろう、って、瞬間悩んだ。
でも、ぐじぐじしたところを見せたらカッコ悪いし、あかりも困るだろう。
こういうときは、いい笑顔をするものさ。
俺は力強く笑って見せて
「あかり、お前という、お前が好きなんだ。お前っていう、魂。だから、幽霊だろうと関係なかった。――そーいうこっちゃ」
率直に言ってしまえば、こんな言い方になる。
照れくさいとかいうのは全然なくて、どっちかっていえばえらく神聖な気持ちだな。
俺のカオをじっと見つめているあかり。
彼女はいきなり俺に抱きつくと、一気にキスしてきた。
ぐーっと顔を押し付けてきたまま、なかなか離れようとしない。
「……」
結構、長かったかもな。
そのうちゆっくり離れると、あかりは嬉しそうに笑って見せた。
「……なら決めた！　あたし、もっかい人生頑張るね！　由樹ちゃんの分まで」
そっか。
いいぞ。
お前が決めた事だ。
俺は黙って、支持するだけさ。
あのボロアパート・幽玄荘で、一緒に、ゆっくり行こうぜ。
ババーズも応援してくれるよ。

ピピピピと、心拍数計測器が警告音を発し始めた。
由樹の身体が、危険な状態にあるようだ。
ぼやぼやしている余裕はない。
「んじゃ、あたし、この身体に入っちゃうからね」
「ああ。――今の姿で会うのは、これが最後だな」
ちょっと寂しい気が、しないでもないけど。
ま、それは言っちゃいけない。
「……うん」
あかりは悪戯っぽい笑みを浮かべて
「最後にもう一回、パンツ、見ておく？」
ワンピースの裾に両手をやってやがる。
「……しまっておきな。これからはきちんと、金庫に入れてカギかけとくんだぜ？」
「へへへ」
笑っている。
ふわっと宙をのぼって、由樹の身体の上にいるあかり。
入るのか。
いよいよだな。
「ねぇやっちー」
「ん？」
「大好きよ」
そう言ってあかりは由樹の身体に入りかけたが、もう一度俺の方を見て微笑んだ。
「……これからもね」

俺達のハナシ、そろそろ終わり。
だけどホンのちょっとだけ、それからのコトに触れとこうかね。
ここでシメちまったら、ケツ拭かねーでパンツ履くようなモンだしな。

――例えが汚すぎる？
いや、ほっとけ！
今思うと、ホントにあんなコトがあったのかなーと不思議な気持ちになる。
由樹の身体を受け継いだあかりは、毎日元気に暮らしている。
今は幽玄荘にいるんだな。同じ屋根の下。
元の彼女の姿ではなくなったけれども、やっぱりあかりに変わりはないんだよな。全っ然、違和感ねェ。魂は、肉体に強く影響するらしい。まあ、スペックがかなり近かったのかも知れないけれども。笑顔とか喜怒哀楽がはっきりしている様子は、ストライクにあかりそのものだ。
由樹のヤツ、本当にこれでよかったんだろうか。
でも、今はそれを考えていてもしょーがない。
前向いて生きていくことしかできないし。でも、それでいいんだろう。
俺はというと、大学に通いつつも、〇無〇子さんを続けている。
そうそう。
あれっきり、鮎川美佐子の抜け殻を被ったミエコは、学内で目撃されることはなかった。風の噂では退学したともいうし、学校そっちのけで男にハマりきっているとも言われている。ホントのところはどうなのか、わかったものじゃない。
どっちでもいいや。
あんなヤツが死のうと生きようと。
んで、実はあれからセージにだけは本当のことを報告した。
セージは「……そうか。面倒かけたな」的リアクション。終了。
冷たい？
いや、いいと思うよ。
これは要するに、俺が話したままを認めてくれている、っていうことだから。そのうち、あかりを連れていこうかとは思っている。
それから、幽玄荘には、相も変わらず誰も入居してきやしねぇ。

あかりがやってきただけ。
ま、別にいいけどさ。
トメ婆さんも復活してきて、ババーズはとにかく元気だ。当分、くたばることはあり得ないだろうな。あと五十年寿命が残っているらしいから。
んで、復活記念だとかいって、今日から揃ってどっかの温泉に行っている。さらに寿命が延びて帰ってくるかもしれないぞ。
夕方、大学から戻ってきて幽玄荘の庭を掃除していると
「……ねぇねぇ、やっちー！　おっかえりー！」
お？　あかりがやってきたぞ。
新妻みたいにエプロン姿が初々しい。
って、結婚してるワケじゃないが。
なんたって、由樹の肉体年齢は十六歳だったから、あかりも一歳若返ったことになる。ホントにあるんだなー。若返りって現象が。
「ただいま。どーかしたか？」
「やっちー、ゴハンつくったよぉ、ゴハン！　今日のはきっと大丈夫！」
ここんとこ、毎日これだ。
その溢れ返るような自信は、一体どこから湧いて出てくるんだ。
肉体が変われど魂はあかりだから、料理のレベルがあがる筈はない。食うたびにこっちの寿命が縮まるような代物を、俺は毎日食わされている。
とはいっても、誰かがメシを作ってくれるってのはギネスブックに載ってもまだ足りないくらいに幸せなコトだから。文句は言うもんじゃない。そのうち、ちょっとづつ教えてやるとするか。
「じゃ、早く来てねー――あいたっ！」
またか。
幽霊時代のクセが抜けないらしくて、時々壁にぶつかって痛がっている。
気をつけろよ。

うっかりすると、ホントに人生フィナーレしちまうぞ。
掃除を終えて竹ぼうきを物置にしまっていると
「ねぇねぇやっちー」
ドアが開いて、あかりが顔を出した。
「明日ね、どっかいこーよ」
「はん？」
別にいいけどさ。
「どっかって、どこだ？」
ふふん、とあかりは嬉しそうに笑いながら
「やっちーのガッコー。あたし達が仲良く歩いていたら、やっちーの友達、何て言うのかなぁって」
なんだよ。そんなことか。
幽霊の頃は俺に憑いていたからいっつも一緒だったけど、身体に入ってからのあかりは一度も学校には行っていない。「リハビリ、リハビリ！」とかいって、俺がいない間に幽玄荘やトメ邸のあれこれをやってくれている。本人的には、二年間の肉体ブランクがあるとかで、さっきみたいにまだ十分フィット（？）できていないところもあるようで。
遠くに出かけたいって思ったということは、大分カラダも慣れてきたんだろう。
俺の友達のリアクション？
知れてるよ。
みんな一瞬「うわぁ、こんチクショー！」みたいな顔をして、でもその後「良かったな」って、言ってくれるさ。間違いなく。
「……りょーかい。じゃ、明日は一緒に行こう」

ま、こんなところかな。
色々あったけど、これだけはいえる。
人間、姿カタチじゃねぇよ。

いっちばん大事なコトは、心ってか気持ち。魂。
……だから人間は、生まれ育ちがどんなに違っても、わかりあうことができる。
人は一人じゃ、生きていけないんだ。
絶対にな。

＜憑いて行きます　結＞

その１０　生きていく魂（後書き）

筆者のたわごとをお許しください。

初めての一人称作品です。
今まで一人称の作品を書いたことがなかったので「書いてみるか！」といきなり思い立って書き始めました。どういう計画性もない、ひどいスタートです。
書き始めて「お！　なかなかいいカモ！」とか調子に乗り始め、気がつくとテンションだけがあって文章めちゃくちゃという体たらくを演じておりました。
そのテンションも維持するのがキツくて、いつもの悪いクセで「打ち切っちゃえ」とか思っていたら、たくさんの方が目を通していてくださり、励ましやら評価やらご指摘を頂戴しました。
繰り返しますが、篤く御礼申し上げます。
ありがとうございました！

もう一言だけ許してください。
振り返ってみるとこの作品、小説と呼ぶのはいかがなものかと自分で考え込んでしまいました。暴走が暴走を呼び、小説というより作文、否、それ以下なものがあります。もう、この手の作品に手を出すまいと、固く誓っておるところです。
ただ、色々な強い思いがあって、それをダイレクトに叩きつける事ができたという部分だけは素直に「良かったな」と感じたりもしています。
何はともあれ最後にもう一度、お目通しくださいましてありがとうございました。

２００８／１０／２６　追記

嬉しいを通り抜けて「幸福な」コメントを幾つも頂戴しました。
１０～２０代の方から幾つかコメントをいただき、私が平素作品に込めることを念頭においていた「若い方への励まし、メッセージ」を受け取ってくださった方がいたということは、この上ない幸せです。あらためまして、本当にありがとうございました！！

筆者　北野　鉄露

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0953f/

憑いて行きます

2010年10月8日14時17分発行